

囲碁の「酷」と人智の「魔」

—— 究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I 4強の特質・行方 (3)

夏 剛 ・ 夏 冰

囲碁の「酷」の冷徹・練達・成熟と人智の「魔」の魔法・魔力・魔性

大竹英雄が非職業棋士との3子局で秘かな愉悅の為に最小差の1目勝ちを作り出した事は、3年前に早碁選手権戦で優勝し名人位2連覇中の「早碁の神様」・大家の余裕を見せたが、^{コミ}込出し制で最小差の半目勝負を巡る一流棋士の判断の当否は悲喜劇を多く生み出しており、15年後の棋聖位の帰着を定めた決勝最終局の「1億円の半目」は矢張り究極の典型である。黒169（前掲図3の69）の「侵投」（挑戦者山城宏の得意な「浸透」^{なぞら}に擬えた造語）を見て、隙が略無い小林光一は此の狙い澄ました妙手の侵犯を食い止める術が無く失冠を覚悟した。『読売新聞』1992年4月8日の同棋戦第16期第7局第7譜観戦記「一瞬の勝ち」に拠ると、「ここまで踏み込む手があっては中央の白地がガラガラになり、控室では、「新棋聖の誕生だ」と色めき立った。/白が黒69の石を取り込もうとしても、うまくは行かない。参考図の白1から切ると黒8まで、上辺の白五子が取られてしまう。反対に白1で2と出ると黒A、白1、黒B、次にCとDが見合いで白の大石が死んでしまう。（中略）/しかし、勝ったと思った山城の黒73が手抜かり。/先に77と当てておくべきだったのだ。/黒73で77なら白ホとつぐが、実戦では黒77に白78と外されてしまったのだ。」（図3に在る実戦の着手は下2桁で表示。文中のホは図3の白68の左1路。参考図＝本稿図22）山城は侵攻の爆弾投下で半目勝ちと信じ小林は相手の意表を衝く応手で半目残ると考えたが、未確定の処が多い段階で其々ピンと来た事は^{しもじまようへい}下島陽平（2013年より八段）の賛嘆を博した。挑戦者と同じ中部総本部所属の彼は13歳で院生2年目だった当時の「記憶の一局」とし、後70手ぐらい費やさなければならない最終図まで読み切った両者の「超能力」を絶賛した。終局時に敗者の「半目ですか」と勝者の「うん、半目だね」の応答で2人は検討に入ったが、「白半目勝ち、いいですね」と言う立会人の羽根泰正の念押しで記者等は始めて結果を知った。勝着の白178が岐阜県下呂温泉の老舗旅館「水

明館」の対局室から控室に伝えられた時、棋聖位が中部に来る事を望む棋士陣の中で羽根が「これはヤバイじゃないか」と言い出した。忽ち空気が変わった控室の観戦者以上に山城は此で自分の失着に気付き半目負けを悟ったが、前出観戦記の翌日(4.9)の「【第8譜】(1-244 [完])」解説「七連覇」の此の件に、「一瞬の勝利を逃した山城にとって、終局までは気持ちを整理する時間だった」と書いてある。専門家の凄さを実感した下島はずっと盤面を見るより対局者の風景を見ていたのであるが、石の脈動から心の鼓動が伝わり対局風景から当事者の心象風景や人・碁の原風景が窺える。最後に整地しなかったのも恰好良いと言う感想は両者の精確無比さへの礼賛と通じる(囲碁用語の「整地」は『囲碁百科辞典(改訂増補)』で立項されず『日本国語大辞典』の項にも無いが、終局後自分が取った揚浜[攻め取って盤面から取り上げた相手の石。上げ石]で相手の地を埋めたり石の形を整える等して地を数え易くする作業の意)が、目数差で合意した両者が勝負確認の手続きを経ず検討に突入するという前代未聞の事態³¹⁵⁾は、双方の「半目瞭然」(「一目瞭然」に因んだ造語)の自信と高手同士の信頼関係を現している。

其の翌々年に小説家大江健三郎は日本史上の2人目としてノーベル文学賞の桂冠を獲り、12月7日に瑞典学士院主催の晩餐会で「あいまいな日本の私」と題する講演を行った。26年前の川端康成の同じ受賞記念講演の題と為る「美しい日本の私」を振った発想として、川端はその極めて美しく極めて曖昧な(vague = ぼんやりした)言説や禅の歌の引用を以て、日本的な、更に東洋的な範囲にまで拡がりを持たせた独自の神秘主義を語ったが、自分は120年の近代化に続く現在の日本をambiguous(曖昧、両義的)な国家と捉える、等と述べた³¹⁶⁾。「半目ですか」「うん、半目だね」の遣り取りも何処か日本的な美しい曖昧さを感じさせるが、主語省略の共通認識は自明の故の阿吽の呼吸と共に勝者の遠慮も有ったかも知れない。第26期本因坊戦決勝7番碁第6局(1971.6.21~22)の終局の光景は又此と対照的で、「二百四十一手目、黒がコウをついだとき、残り時間は白一分、黒二分であった。秒読みの声ももう何十手もの間続いていた。/林は、盤から目をあげると、/“半目……?”/と呟いた。/石田は、小さいが、きっぱりした声で、/“半目いい”/と、自分の勝利を宣言した。」「“つくってみよう”/林が小さい声でいい、ダメを詰めて地を計算した。/はたして、盤面で黒の五目勝ちだった。コミを引いて、石田の半目勝ちである。石田は秒読みの声に追われながらも、コンピューターのような正確さで、おのれの半目勝ちをちゃんと計算していたのである。」³¹⁷⁾三好徹は『五人の棋士』

図22 図3の69(通算169, 本図中白1の上1路の黒石)に対応する白の失敗図

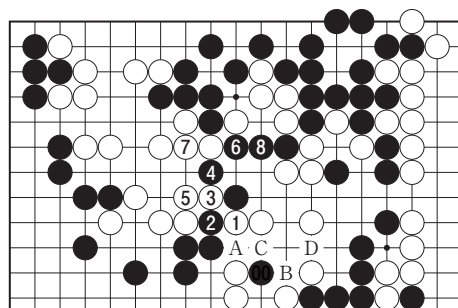


図22 出典 = 『読売新聞』1992年4月8日「棋聖決定七番勝負 第十六期 第7局」第7譜の参考図。

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(3)(夏剛・夏冰)

の第4章「勝負師の沈黙——林海峰」と第5章「盤外の敵——石田芳夫」で、史上最年少(22)の本因坊秀芳の誕生の瞬間を其々上記の様に記したが、『現代囲碁大系』第37巻『石田芳夫 上』(80)では当人は此の「生涯の一局」³¹⁸⁾に就いて、接近戦の末の大団円に筆舌に尽くせぬ喜びを表した³¹⁹⁾一方「勝利宣言」の件には触れていない。『坂田栄男 下』の第30期同棋戦決勝7番碁第4局(75.6.16~17)の解説「本因坊の系譜」に、「“コンピューター”の異名をひっさげ、石田芳夫のデビューははなばなしかつた。/“二枚腰”といわれる林海峯の堅城を陥し“石田時代”の幕を開けたのが、昭和四十六年の本因坊戦。/昭和四十九年には、史上三人目の名人・本因坊となる。/いい意味での“現代っ子花形棋士のはしり”，ともいえるだろう。/クール、クレーバー、正確無比。しかも計算の速さは抜群である。寄せになれば負けまいぞ、戦いの要素として、数字をクローズアップさせた功績は大きい」³²⁰⁾、という対戦相手の本因坊秀芳に対する評価が綴られた。其の特長を形容する3語の1番目は、『日本国語大辞典』では「(形動) (英 cool “冷たい、涼しい”の意) 冷静、沈着で、熱狂的でないさま」の1義であるが、『広辞苑』の「クール【cool】」の「①涼しくさわやかなさま。清涼。②超然とした、さめたさま。落ち着いたさま。冷静。“一な反応” ③恰好がいいさま。いかしたさま」の多義は、**囲碁が持つ精神の清涼剤の様な妙用や超然たる・沈静な性格、恰好の良さにも当て嵌る。新しい語義の③に対応する中国語の音訳+意訳「酷」(kù)は囲碁の厳酷の一面を思わせ、囲碁に可く見られる日本語の「酷」の成熟・至福と苦難・破滅の両面に目を向けさせる**(『広辞苑』の同項目 = 「① [本来、中国で穀物の熟したことをあらわしたことから] 酒などの深みのある濃い味わい。“一がある” ②むごいこと。ひどいこと。“一な練習”」)。

「クレーバー」(clever)の「賢い」「利口な」意も「手先の器用な→巧みな」の原義(『ジーニアス英和辞典』[編集主幹 = 南出康世^{みなみでこうせい}、大修館書店、2014)と共に、石田芳夫の盤上・盤外の「頭脳明晰」「多芸多才」「要領が良い」等の評価と合致する。三好徹は或る選手権戦の際に控室で実戦の手段に就いて研究する専門棋士の逸話として、或る程度手数が進んで計算が行われる段になると抜群に速くて常に正確な彼は可く頼まれ、そして「**電脳**みたい」の定評通り1分もしない内に「白は何目、黒は何目」とパツと言う、と記している。³²¹⁾ **囲碁は地の差で勝敗を決めるから目数の計算は形勢判断等で必須且つ非常に重要であるが、中国の棋士には頭が切れる人や寄せの巧い人は多数居るものの彼と似た類型は見当らない。「人間電脳」の奇才は人工^A智能^Iの利器に先立って賢さを競う頭脳競技の奥義の一端を示し、又器用な手談を進める試合巧者の武器と為る計量化の領分の深耕・開拓の余地を思わせる。**武宮正樹の石田評は「とにかく頭がいい——というか、要領がいいのですね」で始まり、「何をやっても器用ではある」としながら「器用というより、体力とか馬力の方が優れていたのではないか」と分析し、碁の計算能力とは裏腹に大雑把で全然繊細ではなく加藤正夫と同じく不器用なのかも知れないと言う。³²²⁾ 思いつ切り情緒的な趙治勲と対照的に情緒を排除しようとする節^{ドクイ}や非情な処^{ドクイ}が有

り、自分が一寸辛い / 打ち難いと思う局面でも「感じない」「鈍さ」も又其の独特の棋風の力なのだ、といった見解は「神算機械」AlphaGo に対する多くの囲碁人の印象とも重なり合っている。石田は木谷一門 200 段突破の翌年に本因坊位に就き木谷門下中初の主要選手権を獲得したが、門下生の選手権奪取続出の中で初獲得（1976）が此の兄弟子より 8 年遅れた加藤正夫は、『現代花形棋士名局選 4』（日本棋院, 76）の中で木谷道場の厳格な共同生活を振り返って、「真冬でも六時には起こされます。起きると、古碁なり新聞碁なりを一局並べることが義務づけられていました。これが意外に難行で、寒いときは、かじかんだ手を息で温めながら並べたものです。もっとも、石田君のように、三十手や四十手で終わった短い譜ばかり並べた要領のいいのもいました」と述べた³²³⁾。武宮も言及した要領の良さを映し出す日課の棋譜並べの手抜きは石田の才気を浮彫にし、中国棋界では羅洗河の「不勉強な天才」振りや国内随一の早見え・早打ち³²³⁾が彼と似通うが、最盛期終盤の 77 年に音盤「忘れるぜ」「ひよわな花」で歌手出世した様な器用さは先ず無い。何しろ中国では「玩物喪志」（『広辞苑』の語釈 = 「[書経旅葵 “物を玩び志を喪う”] 無用の物を愛玩して大切な志を失うこと）の戒めが有り、無用と思われ勝ちの囲碁の分野でも「器用貧乏」（中国語 = 「様様通、様様鬆」[彼は是と気が多く、全て中途半端]）が忌まれ、棋士は決定的な支障や限界を感じて職業人生に見切りを付けられない限り他分野に精を出すまい。聶衛平は『私の囲碁の道』の中で初代七段（3 人）中の羅建文の伶俐さ・遊び心に就いて、言わば「才子才に溺れる / 倒れる」（和製熟語の「策士策に溺れる / 倒れる」を振った造語）の嫌いを指摘した。中国古来の警句には「聰明反被聰明誤」（聰明 / 利口者却って聰明 / 利口さに誤る）も有るので、刊行時に羅（国家隊教練）の内弟子であった羅洗河の行方に対する周囲の不安は可く分る。当時 10 歳未満の此の才人型人材は秀逸な発想・奔放な棋風で大器の片鱗を示したものの、修行に没頭せず遊びに耽け勝ち³²⁴⁾から下記の師匠の二の舞を演じる事が懸念された訳である。

羅建文七段も棋界の高名な人物である。彼の碁は非常に賢く（本稿筆者注：原文 = 「聰明」）、飄然として（原文の「飄忽不定」は「軽快」「意外性が高い」等の意の他、「悠々と漂う」「ふらふら」「いい加減」の形容にも用いられる）、捉え処が無い棋風である。「軽快に転進する」点では、私は彼から少なからぬ事を学んだ。惜しい事に、其の碁は軽妙振りが些か度を越し、力不足の観が有る。私は可く冗談半分に彼の碁を「骨が軽い」（原文の「軽骨頭」は軽佻 / 軽率 / 軽薄 / 放埒 / 無節操 / 卑俗 / 慢心な人等に言う貶し詞）と称する。羅建文はもう少し厚く打てば、其の碁はきっと凄いものに成ろう。遠慮無く言わせて貰うと、羅建文は余り勉強しない天才である。1980 年以降、彼の興味は「調理術」に移ってしまった。彼自身の言葉に拠れば、「料理の腕が上がる程、碁が下手糞（原文 = “臭”）になる」という事だ。勿論、此は彼の自嘲である。只面白いのは、彼は 1981 年の全国大会で連敗を喫したにも関わらず、優勝と準優勝を分け合った私と馬曉春にだけ勝ったのだ。此は中々出来ない真似である。彼は諧謔的に、自分の刀

は無名の将は斬らない故だと主張したが、此の一件からも羅七段が流石に徒者ではない事が解る。³²⁵⁾

石田芳夫の聡明・器用・伶俐の特徴を集約した「クレバー」は実に言い得て妙であるが、『日本国語大辞典』の初版(日本大辞典刊行会編, 全20巻+別巻1, 1972~76)には無く、今世紀初頭の第2版で漸く『広辞苑』現行版より7年先行して【クレバー】が採録され、「(形動)(英 clever)《クレヴァ》頭のよいさま。賢いさま。利口であるさま」と説明される。石田が体现した「クレ(一)バー」が其の最盛期と重なる初版に漏れたのは残念であるが、『広辞苑』で「クレバー【clever】」(=「賢いこと。頭のよいこと」)に作る此の外来語は、同じくバタ臭い表現の「クール」と共に囲碁の「粋・澄み・冴え」等の魅力をも表せよう。『日本国語大辞典』の「クール」の用例は初版では「惰けもの(徳田秋声)五“然し那樣(あんな)寒冷(クウル)なものでは有るまいと思ふ”」しか無く、現行版で記される様になった出典の年代(1899)は当時の中国語の影響を思わせるが、「那樣」が死語と化した後の例として追加された現行版の2点目は漢単語の当て字ではなく、片仮名表記の「風に吹かれて(1967-68)〈五木寛之〉独りでする冬の旅“橋の上から眺める夜の河は、ひどくクールに光って見えた”」と為る。3点中の最後の「父の詫び状(1978)〈向田邦子〉ねずみ花火“日本人離れのした理知的な顔に眼鏡が似合っていた。今のことばでいえばクールというのだろう”」から、正しく理知派の石田の黄金時代に沈着冷静を表す此の単語が流行り出した事を想像できるが、彼は其の78年の王座位復帰後84年の天元位奪取を除いて7大棋戦での優勝が途絶えた。坂田栄男は82年刊の打碁集の中の手放して褒める様な上記石田評の次に一転して、「石田時代」は約五年続いたが、現在、休火山に入っている。どうした石田、とのファンの声が聞こえるようだ³²⁶⁾と辛辣な指摘をする。選手権戦史上初の名人本因坊(63年獲得)や日本棋院理事長(78~86)の立場を考えれば、2人目の名人本因坊(同68)林海峰の次の時代を開いた後輩への苦言は愛の鞭と言えるが、其の頃から続いた石田への鞭撻は期待を込めた愛情表現にせよ酷な感じがしなくもない。例えば翌83年刊の『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の「人名辞典」中の「石田芳夫」の項に、「45年第17期日本棋院選手権で大平九段を3勝2敗で破り、日本棋院選手権者となる。46年第18期は防衛した。/第26期本因坊戦で林海峰を破り“秀芳”と号す。以後5連覇を果し、引退後の名人本因坊の資格を得た。同年第9期プロ十傑戦優勝、47年にも連覇した。/石田は“コンピュータ”と呼ばれるほど、すぐれた計量感覚を持ち、正確無比なヨセで一時代を画した。/49年第13期名人戦に林海峰を4勝3敗で破り、3人目の名人本因坊となり、九段に推挙される。また第22期王座を林海峰から奪う」に続いて、「しかし50年に名人位と王座を大竹に奪われ、51年には本因坊を武宮に奪われ、不調をかこつことになる」と、中国でなら「不活躍」の部類に入る様な棋士の場合でも出ない低迷に就いての言及が有る。其の翌年に刊された『現代囲碁大系』第36巻『大竹英雄 下』(本人解説, 佐藤伸執筆)でも、

第8局（第1期〔新〕名人戦決勝7番碁第4局, 76.10.20～21）の第9譜（174～229）解説「フータヌルイ手」の最後に、挑戦者石田の2目勝ちの結果に就いて自分の澄まし過ぎた緩着に由る完敗と認めた上で、「石田君の勝ち方にはひところの切れ味がなかったように感じた。わずかな優位を絶対に手放さない、あのにくいほどの末足にかげりが見えた。今思えば、それは、このあとコンピュータ石田を襲った長い長いトンネル時代の前兆だったのかもしれない」と書かれた。³²⁷⁾ 同じ84年刊『小林光一』の第14局（第6期棋聖戦全段争覇戦準々決勝, 対石田章八段, 81.7.23）の解説も、「石田章さんの棋才は、若い頃からプロの間では評判でした。福井正明さんの名評論に、“いま当代で強いのは石田だよ。石田と言っても本因坊の石田（芳夫）ではないよ。七段の章であることはアキラかだ”というのがありました。当時、本因坊であった石田芳夫さんが、これを聞いてひがみ、自分を“弱い方の石田”と自称しました。福井さんも芳夫さんも、その意味では人騒がせです」と述べている。

「強い石田」と題する解説の上記第2段落の前の書き出しは、「石田章さんはヒラメキのある碁を打ちます。少し俗手的な言い方をすれば、努力型よりも天才型ということになりますか。もっとも、いくら天才でも努力をしないわけではありませんが……」と為っている。第1譜（図23）解説「ヒラメキ流」に有る通り此の対局は実験中の「小林流」が用いられ、白4の星に対して黒5・7と構え白8に対しては黒9の様^{きょうげき}に挟撃しても遅くはないというのが、中国流に代る独自の布石法の発想の始まりであると本人が披露している（曰く、右で低中国流^やに行っても、下辺の星下か星と目前の大場^{おおば}を白に与え、どうという事は無い。「白10と、さっそく“ひらめき流”がきました。/ごく普通のアタマの人が考えれば、2図の白1でしようが、これは黒2以下6のようなことを考えても、少し重い捌き。石田さんとしてはアキ足りませんまい」と言う（2図＝本稿図24）³²⁸⁾ が、小林光一か執筆者中山典之が命名したと思われる「閃き流」は羅洗河の「閃光流」を連想させる（後者は2006年三星火災杯^{サムスン}の報道で韓国媒体^{メディア}が羅の流儀を形容した「閃光」³²⁹⁾に由る造語）。藤沢秀行は自ら主将を務め石田章が5番目で出場する予定の第1回日中スーパー囲碁の際、彼の棋風は曹大元に似て厚いと中国側に紹介した³³⁰⁾が天才的・閃きの評価は報じられていない。日本の先鋒依田紀基の5人抜きに続いて中国の2番手江铸久が同数の牛蒡抜きを演じたが、「強い石田」を破った後「強中強」と言える小林に敗れた事は一流と超一流の差を感じさせる。李世石^{イセドル}に大敗を喫させたAlphaGoも世界の超一流に勝つとも劣らぬ実力の持主であり、其の冷徹・賢明・正確無比・抜群の超高速計算力・無敵の収束力と勝率計量化の新機軸は、「大坂田」に褒められた「電脳戦法」^{コンピュータ}（造語）の先行者の閃光を極致にまで強めた観が有る。石田芳夫は綽名に就いて地の勘定に熱心な自分を揶揄して高川格が言い出したのではないかと語った³³¹⁾が、戦いの要素として数字を大きく取り上げて扱わせた功績は坂田栄男が評価した通りである。計算は明るく手も見え寄せも巧いという秀行の「電脳石田」^{コンピュータ}評はAlphaGoにも適用するが、第3期棋聖戦決勝の前に石田の碁を並べて其の

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(3)(夏剛・夏冰)

強さをひしひし感じて嫌になった秀行が、挑戦者の実力を素直に認めた故に負ける心算は毛頭無いと闘魂を燃やしたのに対して、臨戦の李世^{イセドル}石^{セドル}は手掛りが乏しく敵の実像を掴む術が無い事も有って根拠無き樂觀に陥った。興味深い事に、秀行の此の石田評は自分の3連覇を脅かしかねない相手への警戒から棋譜を調べた結果であり、前期防衛戦で1勝3敗の劣勢から加藤正夫に逆転勝ちした後の言説には軽視の色が強い。彼はイーデス・ハンソン(在日米国人女性、芸能人・随筆家)を相手とする対談で、最高位保持者の眼中に人無しの優越感と酒精依存症に由って加勢された放言癖を發揮して、林海峰を「ありゃ、へぼだね」、大竹英雄を「ちょっと勝負根性が足らんような気がする」、石田芳夫を「全然へぼ、問題にならない」と両断した³³²)。石田章の七段時代(1975~79)と重なる石田芳夫の名人・本因坊失冠(75・76)を思えば、両石田の強弱に対する福井正明の論断以上の酷評は棋士の価値観を覗かせる処が目を引く。

図23 第6期棋聖戦全段争覇戦準々決勝、小林光一(黒、込5目半)vs. 石田章、1~10、149手完、黒中押し勝ち

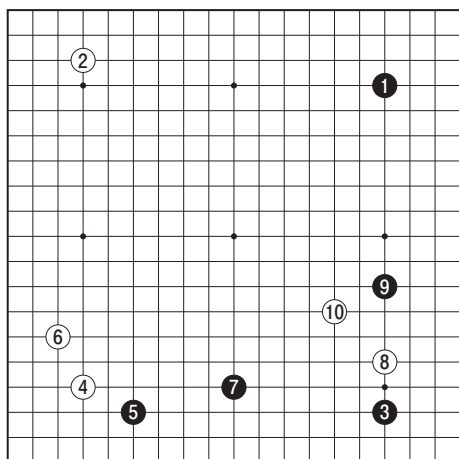


図24 図23の白10の普通の着想に由る進行(小林光一の解説の例示)

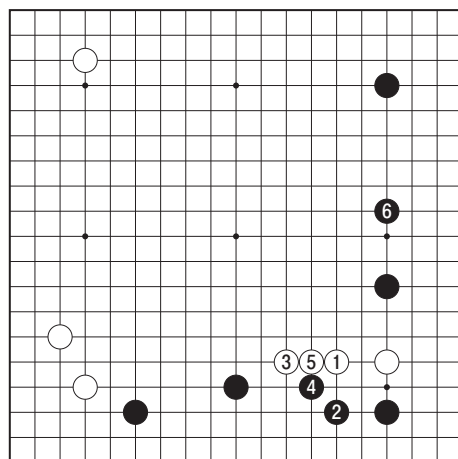


図23・24 出典 = 『現代囲碁大系』第42巻『小林光一』第14局第1譜・2図、139頁。

『広辞苑』の【へぼ】の「(平凡の略か)①わざのまづいこと。また、その人。へた。②野菜・果物などのできの悪いもの」に対して、『日本国語大辞典』の語釈は「(名)(形動)①技量のつたないこと。腕前の拙劣なこと。また、その人やそのさま。へた。②すぐれたところのない、平凡なこと。また、その人やそのさま」と為る。『広辞苑』の両義には用例の「俚言集覧“下手を一と云、一棋・一象棋など云”。“一な絵”“一きゅうり”」が有り、其の拙劣・出来損いの意味は囲碁・象棋の下手を表す中国語の「臭」(下手糞)と通じる。前出の樊麾の反省の弁

や羅建文の自嘲の言に出た此の形容詞は文字通り芳しくない意で、「醜」「愁」との同音(chou, 其々第4声と第3声・第2声)も負の^{イメージ}形象を強めている。時の棋聖は此の貶し詞で2人の名人本因坊経験者を斬ってから一層過激な表現を以て、「治勲は、なおへぼだね。これは一生ダメかもしれない。つまり、思想が低いんだよ。わたしのことを、あいつは親のように思ってるんですよ。わたしも、どのくらいかわいがったかわからない。しかし、あいつは思想が低い」と喋り捲った³³³⁾。趙治勲は1975年のプロ十傑戦優勝(初の公式戦優勝)で選手権獲得の最年少記録を作り、更に翌年の王座獲得に由る7大棋戦優勝の最年少記録(20歳5ヵ月)で注目を浴びたが、八段昇進(78)の直前に週刊誌に踊り出た秀行の此の「暴評」(「暴言」に擬えた造語)は、18歳の趙を取材した事が有る作家沢木耕太郎には趙にとって絶望的な宣告の様に思えた。趙は当初沢木に対して取材は名人に成るまで待つて欲しい、成るのは直ぐだと告げただけに、76年の名人戦総当り戦入り→陥落と翌年の王座失冠後の「啼かず飛ばずの歲月」の中で、加藤正夫の挑戦を1勝3敗の劣勢から逆転した後の藤沢棋聖の悪評は沢木の心を痛めた。³³⁴⁾一生駄目の予言を嘲笑うかの様に趙は81年に選手権戦史上4人目の名人本因坊と成り、坂田栄男の次に此の栄光を得た若輩が3人も秀行に「へぼ」と視られた事は奇妙である。秀行は76年の八強争覇戦決勝で1-2で趙に負けた事が有るにも関わらず見下していたが、皮肉にも彼は83年の第7期棋聖位決勝の3連勝後4連敗で趙の大3冠達成を手伝った。秀行は加藤正夫・石田芳夫・林海峰・大竹英雄を撃退した後の第6期防衛で再び林と対決し、其の「大正の砦」の踏ん張りで挑戦者は新棋聖当選確実と言われる碁を落し押し出された。「あと趙治勲と小林光一と武宮正樹をやってつけぬうちは、棋聖は渡さん」と気炎を上げた彼は、登頂を狙う趙の襲来に迎え撃つ際最早上から目線が消え大敵として強い警戒を抱いていた。「待ちに待っていた恋人に、やっと巡り合えた心境だ。(中略) 治勲ちゃんの充実、読みの深さ、確かさについては、いまさら言うまでもない。だが碁には、読んでも読み切れない、また、計算しても計算出来ない部分がいっぱいある。オレはそこで戦う。治勲ちゃんと同じ土俵で戦ってはとても敵わない。口幅ったい言い方になるが、治勲ちゃんと次元の違うところで戦う。世間じゃ棋聖奪取の本命登場などと言っているが、まだまだ負ける気はしない。」

読売新聞社の藤井正義記者に語った心構え³³⁵⁾では好敵手として趙治勲の実力を謙虚に評価したが、言わば「異次元戦法」で劈頭から3連勝を取めた後は予想以上の快調で気が緩んだ所為か、電話で武宮正樹を呼び出し「どうだ。秀行先生、強いだろう」と自慢する程少し浮足立った。曾て窮地に陥った時「7番勝負は4つ勝たなければ終らない」と自分に言い聞かせた³³⁶⁾のに、今回は「驕兵必敗、哀兵必勝」の定石通り趙の渾身の反撃で一瀉千里の大逆転を許した。趙は棋聖位・名人位・本因坊位決勝戦の29勝9敗で「7番勝負の鬼」の名を欲しい儘にし、3連敗4連勝の3回達成(他に84年名人位防衛戦対大竹英雄、92年本因坊位防衛戦対小林光一)から、3連勝して彼を怒らせて了ったのが敗因かも知れないと言う兄弟子大竹の敗

戦の弁³³⁷)の様に、趙を完封寸前に追い詰めると必死な逆襲を招くという背水の陣の恐さを思わせる伝説が生れた。逆境を強いられた趙の強い逆転力は尋常ならぬ自尊心・評価欲求が根底を為しているが、5年前に受けた「なおへぼ」「一生ダメ」「思想が低い」等の完全否定も発奮の起爆剤であろう。聶衛平は『私の囲碁の道』の中で2番目の師と為る雷溥華から受けた教育を振り返って、日本の棋士に比較的近い布石・寄せ重視の均衡型^{バランス}の棋風を始め多くの貴重なものを得たが、残念な事に其の温和・高雅な品格を学び取れなかったと述べている。「今私が青少年棋士に厳しく要求するのは、先生の影響を受けた事と言えるが、教師としての修養は先生に遠く及ばない。人が“へぼな手”を打ったのを見ると、つい“酷いへぼだな”と厳重に叱咤し、“へぼ過ぎる”“何だよ、此は完全に囲碁芸術をぶち壊すものだ!”等の過激な言葉を使って^{しま}、相手が引込みが付くか否か等は余り考慮しない。多くの少年棋士が私に叱られて目から涙が溢れた。余人は扱^さて置き、馬曉春も私に何回も“罵倒”された。」³³⁸)馬曉春等は「嚴師出高徒(厳しい師匠の下に優れた弟子が出る)の法則の通り大成したが、「臭棋」(へぼな手)と罵声を浴びせた「親父の雷^{かみなり}」は彼が尊敬した秀行と似ている。三好徹は「人間 藤沢秀行」の中で定評が有る其の後輩の面倒見の良さの美談として、低段者時代の林海峰・石田芳夫・加藤正夫・武宮正樹に絶えず胸を貸して遣った事を挙げている。弟子でもない彼等に対して、「“バカ、そんなへぼな手を打って、お前よく碁打ちになれたな”と、ことばは荒っぽい、嬉しそうにやっている」³³⁹)光景から、後に一流入りした林・石田と趙治勲を悉く「へぼ」と貶めたのは一種の愛情表現とも取れる。

三好徹は藤沢秀行がそそっかしい為此等の負けるはずの無い後輩に急所の碁を負かされた事に就いて、「大事な碁の終盤、打つところは、一か所しかない。相手がAと打てば、藤沢はB、相手C、藤沢Dの順で、完勝の碁に終わるはずだった。えんえんと考えたのち、相手はAと打った。じらされた藤沢は、Bと打つべきところを、手びょうしでDと打った。つまり、次の次の手を打ったわけで、碁はもちろんあつという間に負けてしまった」という例を示、「“しまった。秀行先生をやっちゃった”というのは、日本棋院では“ポカをやった”と同義語として通用しているくらいなのだ」と紹介している³⁴⁰)。『広辞苑』の【ぽか】の「不注意から起こした、思いもかけなかった失敗。“ぽかをやる”」と違って、『日本国語大辞典』の同項目は「(《名》) 囲碁や将棋で、不注意からとんでもない悪手を打ち、または指して、形勢を損じること。転じて、一般の物事にもいう。“ぽかをやる”」と為る(「不注意から」「の物事」「“ぽかをやる”」は初版に対する加筆)。『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の「ポカ」の「感^{ママ}ちがいの手。軽卒きわまる大悪手」の語釈の次に、用例「△—が出る碁=相当うまく打てるのに、一局のうち一ヶ所か二ヶ所常習的にポカの出るため勝率の悪い碁」と有るが、代名詞と為る程^{ほど}の常習者秀行の癖が此の単語の誕生又は定着に寄与したのかも知れない。『日本国語大辞典』に用例が無く初出・語源が未詳である「ぽか」は「ぽかん」を連想させ、『広辞苑』の当該項目の「②水面・空中・脳

裏などにたった一つ無造作に浮かんでいるさま。③穴のあくさま。また、間の抜けた感じで人が大きく口を開けているさま。④あるべきものがなくて空虚であったり、取り残されたりしているさま。⑤茫然自失のさま。ぼんやりしているさま」の諸義は、【ぼっかり】の「①水面・心などに急に現れたり、空中に軽やかに存在したりするさま。②口を開けたように、大きく深い穴や空洞ができていくさま。比喩的にもいう」の両義、^ひ延いては英語の vacant の「(心・表情・笑い等が) ^{うつろ}虚ろな、ぼんやりした」意と共に、心の隙間や脳の空白状態から突如生じる「ポカ」の由来・様態等と関連する様に思える。人智の「魔」には高度な思考の魔力の半面此種の悪魔じみた落し穴も処々潜んでおり、「秀行=ポカ」の等式や「碁神」呉清源の姓が「誤」の字形に含まれる事が示唆する様に、超一流の棋士も脳力の不具合の所為で蹴球の自殺点と似た錯乱に見舞われる瞬間が有る。秀行逝去の年の暮れに刊された『秀行百名局』（高尾紳路著、誠文堂新光社、2009）には、全容を紹介すべく名局・渾身の絶妙手ばかりでなく敗局・放心の大悪手も収録されているが、誉れ高い「異常感覚」と（悪）名高い「ポカ癖」は神算と誤算との紙一重の差を思わせる。

「勝局・好局・名局」「妙手・奇手・鬼手」「能格・妙格・神格・逸格」の価値順位

棋風・性格とも「異常感覚」の目立つ柯潔が不満を抱く中国棋士の決意表明の常套句には、「向前輩学習」（先輩に勉強させて貰います）や「下出名局」（名局を残したいです）が有る³⁴¹。何れも日本碁界の風習に染まった表現なので「脱日・排日」世代の彼の性分に合わないが、此の2つの修辞「定石」は囲碁中興の出発点と為る「倣日・随日」の遺伝子を示している。改革・開放後の中国棋士の日本を学ぶ姿勢は西洋文明を吸収する明治の日本人と共通し、強盛を目指す貪欲と強者に抱く謙虚を以て用語の導入から意識の変革と力量の増長を図った。近年の中国で散発した反日示威行進では「抵制日貨」（日本製品不買）の叫びが起きる反面、他ならぬ日本製の携帯電話や電子記録写真機を手を持つ参加者や野次馬の姿が映し出す様に、中華思想の尊大とは裏腹に外国の先進的な物の優位を認める現実主義・実用主義も有る。作家魯迅は1934年6月7日の『中華日報』に雑感「拿来主義」（持って来主義）を発表し、外国の良い物事・文化等を果敢に取り入れて自国の進歩に役立てようと提唱したが、半世紀後の中国棋界では王国日本に対する「拿来」は制度から言葉までの移植に現れた。清末の近代化途上に起きた日本からの自然科学・人文科学中心の漢単語の逆輸入熱の百年後、21世紀初めから文化面の「日源詞」（日本語由来の外来語）が続々と中国語に浸透して来た。専門用語に於ける「日源詞」の比率や定着度の高さでは碁界が全業界の筆頭に為ると思われ、好例として「日本」と同じ「に」や「な」行音で始まる「苦手」「投げ場」が挙げられる。「苦手」は『広辞苑』の「②勝ち目のない相手。いやな相手。また、気性などが合わないで互いに忌みきらい相手」

に当る意味として、『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』では「特定の妙に勝てない相手。格からいえば当然互角に張りあえるはずであるのに、どうもうまくいかない相手。もちろんプロの場合にもある」と説明されている。『囲碁天地』2006年第8期では第1回江^{カン}原^ワ大^{オン}世界^ラ杯中^ン韓^ド播^ン台^ラ賽^ン第10局(李昌鎬 vs. 常昊〔白, 3目半勝ち〕)の解説(兪斌)に、此の漢字表記の和語を用いた「再見! 苦手」(去らば, 苦手)という題が付けられている。³⁴²⁾『日本国語大辞典』にも無い「投げ場」は『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』では項が有り、「投げるに相応しい場面。プロは同じ投げるにしても、一応形を作って投げることを念頭においている。△-を求める=玉砕を承知で、投げるための形を作ること」と為っている。「玉砕」の語釈・例示は「負碁と見て壊滅を覚悟して決死の攻撃をかけ、玉と散ること。戦時中からとくに多く使われるようになった。△-に出る」であるが、『日本国語大辞典』の【玉砕・玉摧】の「(《名》(『北齊書-元景安伝』の“大丈夫寧可-玉砕-, 不能-瓦全-”による)玉のように美しく砕け散ること。名誉、忠節などを守って潔く死ぬこと)」が示す様に、漢籍由来の「玉砕」は中国語で「砕」(suì)と音・義の違いが有る「摧」(cuī, 「砕く/砕ける」の他「打ち壊す」「[挫き]折る」等の意を持つ)との混用に由り、中国語で死語化した「玉摧」(其々「玉砕」「玉折」に同じ「立派な死に方をする」「優れた人が死ぬ/若死にする」の両義)と結合した。日露戦争勃発の頃に日本で使われ始めた此の単語から中国語に無い「一主義」まで派生され、同辞書の語釈は「(《名》名誉、道義、節操を守るためには命を捨てることも辞さない立場をとること。また、不成功が明らかであるのに、やたらに事を進めようとする考え方や態度」で、用例(2点)の初出は第1次世界大戦(1914~19)終結後の「現代新語辞典(1919)」と為る。次の「レイテの雨(1948)〈大岡昇平〉“これは彼等が受けた玉砕主義の教育と、軍隊内の経験に基づいた空想であるが”は、【玉砕・玉摧】の最後の用例「桜島(1946)〈梅崎春生〉“どうせ私達は南方の玉砕部隊だと”」と好一対を為す。戦争文学で有名な此の2人の「第1次戦後派」小説家は囲碁観戦記も書いた事が有るが、過去の戦争や負の^{イメージ}形象と関係無く「玉砕」は「求投場」と同じく中国碁界で使われている。言語と意識は卵と鶏の如く相互因果関係に在り実質に対する概念の規定が見られるが、「玉砕」「投げ場」が中国の囲碁用語に採用された事は簡単に投げない伝統の変化に繋がり、名局への追求を誓う風潮も此の和製漢語が棋士の間で共感呼び市民権を得た結果である。

「名局」は『広辞苑』では「囲碁や将棋で、後々まで語りつがれるような、すはらしい対局」、『日本国語大辞典』では「(《名》碁や将棋の優れた対戦」と定義されているが、『日本将棋用語事典』(編集委員=森内俊之・佐藤康光・島朗・荒木一郎・池畑成功, 編集協力=中原誠・米長邦雄・羽生善治, 監修=原田泰夫, プロデュース=荒木一郎, 東京堂出版, 2004)には項目が無く、『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』では「立派なできばえの碁。昔は一手の誤りもないのを名局としたが、現在は少しばかりの失着が出て互いに力のこもった熱戦ならば名局とするというふうに多少考えが変わってきている。著名局」と説かれている。中国の国語辞典に無い此の

単語の両国共通の認識と適用の実態に即して再定義するなら、古典的な名局は一方又は双方が最善を尽し失着が殆ど無いという棋芸上の価値が高い対局であり、現代的な名局は双方が精魂を傾け多少の失着が有っても碁の真髄を体現し囲碁人に感銘を与える棋史上の知名度が高い対局であると言って可い。『秀行百名局』の第91局（第7期棋聖戦7番勝負第2局，対趙治勲，1983.1.26～27）では，高尾紳路は『囲碁』2009年10月号附録「名局細解」に有る兄弟子森田道博の詳解を引いた³⁴³⁾が，此の専門誌（誠文堂新光社刊）の名物附録の題と中身の通り名局は傑作でなければ成らない。名局に対する20世紀日本の囲碁棋士の拘りは道徳的・芸術的な潔癖を感じさせる程強く，一点の曇りも一手の失着も許さない様な完璧さを極力追求する高手の逸話には事欠かない。『現代囲碁大系』第6巻『橋本宇太郎 上』（本人解説，志智嘉九郎執筆，1980）の「序」に，15歳で入段後60年近くの間約1600局の手合をして来たが棋歴も対局数も自慢の種には成らず，「よい碁が打てたかどうか，これが私の打った碁ですと，人様にお見せできる碁がどれくらいあるか，それが問題です」と書いてある。「人に見てもらえるのは，この局ぐらいのものだ」と言う格別の自信作は，七段・本因坊時代の第16局（本因坊・呉八段3番碁第2局，43.12〔日付不明〕）である。先相先の橋本は中盤まで巧妙な打ち回しで弟弟子呉清源に対する主導権を維持したが，「珠玉篇」（解説の題）の内に第10譜（148～200）の題は「名局に残した汚点」と為る。黒189の処に抑えるべきだったと後悔の臍を噛んだ白188は190と不本意な後手を引き（図25参照），1目か2目損の此の誤りは「折角の名局に汚点を残したといわねばならぬ」と自ら断罪する。³⁴⁴⁾第1・3局とも先番2目勝ちで呉を圧倒したのに持碁に終わった此の局を会心譜とするのも，勝局より名局を尊び成敗の結果より内容の質を重んじる芸道至上主義の現れと言えよう。橋本は何時も自分の碁に不満が有って後に残す気になれなかったから棋譜を取って置かず，先年出版した全集の棋譜は全て友人志智が10年以上も掛って収集されたのである³⁴⁵⁾が，8歳年下（15年生）で同じ関西棋院所属の鈴木越雄も勝手に棋譜は一切残していなかった。人様に自慢できる碁は1局も打っていないと言う此の異色棋士（85年逝去後追贈九段）は，未熟な碁を見ていると我ながら情けなくなって来るから「過去は忘れる主義」に徹し，拙い碁を打った謝罪と棋士で生活できる喜びへの感謝を込めて毎朝1時

図25 本因坊・呉八段3番碁第2局，先相先・本因坊昭宇 vs. 呉清源（黒），148～200（図中48～100），277手完，持碁

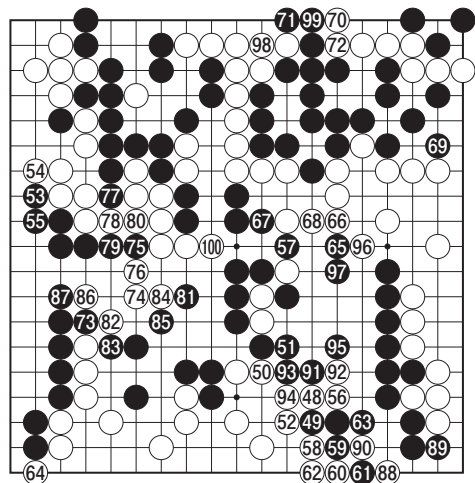


図25 出典 = 『現代囲碁大系』第6巻『橋本宇太郎 上』，第16局第10譜，161頁。

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方 (3) (夏剛・夏冰)

間土下座し神棚を拝んだ。³⁴⁶⁾ 自虐的なまで完美を求める2人の気質は邱永漢が言う「日本人は職人」³⁴⁷⁾の裏付けに為るが、品質・完成度の為に利益の犠牲も吝かでない「物作り超大国」の職人根性・名匠志向は、常に名局・名手級の出来栄をを目指す精神と努力で囲碁王国の形成に寄与した様に思える。

「名手」は『広辞苑』で「①すぐれた腕前の人。妙手。名人。“乗馬の一” ②囲碁・将棋などで、すぐれた手。妙手」と説明されており、①は『日本国語大辞典』で漢籍典籍の「北史－崔季舒伝“好_二医術_一、(中略)更銳意研精，遂為_二名手_一”」が付いている。中国語の近義語に有る「高手」は『日本国語大辞典』では和製漢語扱いで残っている(語釈＝「(名)わざのすぐれて立派なこと。また、その人」)が、用例4点中の初出の「医案類語(1774)一・医人称謂」は「妙手①」の語源と通じ、**医術も囲碁も「死活問題」(「詰碁」に当る中国語)に関ると**いう共通項に気付かせる。『現代漢語詞典』の【高手】の定義は「**図技能特別高明の人**」(図技能が卓越した人)で、用例の「象棋～|他在外科手術上是有名_二的_一」(「象棋の名手」|彼は外科手術に於いて有名な高手だ)は、同じ「棋術」(囲碁・象棋/将棋・西洋将棋等の技術を表す中国語)と**医術の対**を用いている。『漢語大詞典』では①「精於詩文写作或某種技芸的人」(詩文の創作或いは或る種の技芸に精通する人)、②「詩文写作或技芸高超」(詩文創作或いは技芸がずば抜けている)の両義と為り、①の出処(4点)中2番目の「宋羅大経《鶴林玉露》卷十三：“陸象山少年時，常坐臨安市肆觀碁，如是者累日。碁工曰：‘官人日日来看，必是高手。’”(下線は人名・地名等を表す同辞書の記号)は、庶民的な象棋を上回る碁の歴史の悠久さや詩文の創作と囲碁の表現との通底を思わせる。彼の南宋の大儒は幕府の思想家・兵学者佐久間啓の号象山(「ぞうさん」とも)の由来であるが、少年時代に囲碁観戦に入り浸り高手と見られた故事にも有る此の言葉は日本に伝わっていない。「高手」が日本で中国語の来歴も知られない儘で準死語と化して久しいのと対照的に、中国語の「妙着」と類義の「名手②」は「名局」と共に日本から中国碁界に輸出されており、2015年以來『囲碁天地』春節(旧正月)合併号(初回は第5・6期、16年・17年は第3・4期)の全巻が前年「名局名手」特集である。「妙手」の『広辞苑』の「①すぐれて巧みな技量。また、その持主。“琴の一” ②非常にうまい手段。特に、囲碁・将棋で非常にうまい手。“奇手一”」に対して、『日本国語大辞典』の「①すぐれたうでまえ。巧みな技量。妙技。また、その持ち主。上手」に、「蔡洪－圍碁賦“命_二班輪之妙手_一、制_二朝陽之柔木_一”」という囲碁所縁の語源が示され、「②碁、将棋など勝負事で、ちょっと気のつかない非常に妙味のある手」に競技の性質が強調されているが、『現代漢語詞典』の「**図技芸高超的人**」(図技芸が抜群に優れている人)は、日本語に無い「高超」の「**超群出衆**」(群を抜き出る)の高級・**「超級」**志向が窺える。「名人」も両言語の違いや日本語に於ける囲碁関係の表現の多さを再認識させる様に、『現代漢語詞典』の「**図著名的人物**」(図著名な人物)の1義のみと違って、『広辞苑』では「①技芸にすぐれて名のある人。名手。正徹物語“其比

②「四天王といはれし一」②名の通った人。有名な人。沙石集二“一なりけりとて許さずして”
③もと囲碁・将棋で九段の技量のある人の称。同職の間で推し、江戸時代は幕府が許した。現在は選手権の名称の一つ。“一位”の多義である。『日本国語大辞典』では①（語釈＝「一芸一道をきわめた人。技芸にすぐれて名をしられた人。評判の高い人」）に「韓愈－柳子厚墓誌銘」の出典が有るが、現代中国語と共通する「著名人」の意は無く、②は「江戸時代、囲碁または将棋の最高位に与えられた称号。段位は九段であった。現在は選手権の一つとなっているが、囲碁・将棋とも選手権保持者は最高の地位に位されている」と為る。此の準和製漢語から更に「名人芸」（『広辞苑』の項＝「名人のみが成しうる高度の技芸」）、「名人肌」（同＝「技芸にすぐれた人にありがちな、世俗を超越した性質。名人気質^{かたぎ}」）、「名人気質」（同＝「名人肌^{かたぎ}に同じ」）等の和製（漢）語を派生した。選手権戦^{タイトル}に由る名人誕生への制度変革の過渡期の名人本因坊秀哉は正に名人芸・名人気質^{かたぎ}の持主で、木谷實を相手とする引退碁で彼は囲碁の「酷」と人智の「魔」を体験・体現した。62譜に及ぶ観戦記（『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』1938.7.23～12.28）を発表した川端康成は、長篇実録小説『名人』（新潮社『川端康成全集』[全16巻]第14巻[52]等の版本を経た決定版＝『呉清源棋談・名人』[文藝春秋新社、54]）で其の孤高な姿と悲劇を描き、中には『日本国語大辞典』の項に欠落した「名局」の用例も要旨に絡む命題の形で出ている。

黒六十九の苛辣^{かろう}な攻撃は、名人も予期しなかったらしく、その応手に一時間と四十四分苦慮したのだった。名人にはこの碁が始まって以来の長考だった。

しかし、大竹七段には、五日前からの狙い^{ねら}だったのだろう。今朝^{けさ}の打ち継ぎに、七段は逸^{はや}る心をおさえて、また二十分ほど読み直したが、そのあいだにも体は力が漲^{みなぎ}って来て、ひとりで強く揺れ出し、盤の方へ一膝^{ひたひざ}乗り出していた。黒六十七に続いて、黒六十九を強く打ちおろすと、

「雨が風か。」と言って、高い笑い声を立てた。

ちょうどその時、嵐模様の夕立が来て、たちまち庭の芝生^{しばふ}は水につかり、あわててしめたガラス戸を、雨風^{あまかぜ}が叩きつけた。七段は得意のしゃれを飛ばしたのだが、会心の叫びでもあったらしい。

名人は黒六十九を見て、ふっと鳥影を見たような顔をした。ひょいととほけて、愛敬^{あいきょう}を出したような顔をした。これだけのことも、名人にはめずらしかった。

後に伊東での打ち継ぎに、黒の意外の一手、封じ手のための封じ手と疑えるような手を見た時、名人はかっと腹立って、この碁も汚れてこれまでと思い、そこで投げてしまおうと考えたと、休憩を待ちかねて、私たちに憤りをもらったことがあったが、その時でさえ、碁盤に向った名人は顔色に出さなかった。名人の心の動揺に、誰も気がつかないほどだった。

してみると黒六十九は七首^{あいくち}のひらめきであったらしい。直ぐ^す名人は沈思にはいった、昼休みの時間が来た。（中略）

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(3)(夏剛・夏冰)

昼休みの後、名人は坐るか坐らぬうちに、白七十を打った。食事のための休憩時間、つまり持ち時間の計算にはいらぬ時間にも、名人の考え続けていたことが露骨にわかるのだが、そうは見せぬために、午後の始めの手を少し考えるふりをするような技巧は、名人にはなかった。そのかわりに、昼飯のあいだも虚空を見つめていたのだった。

黒六十九が攻めの鬼手だったとすると、白七十は^{しの}凌ぎの妙手だったと、立ち合いの小野田六段なども敬服していた。名人はここを忍んで、急を凌いだのだった。名人は一步譲って、難を避けたのだった。打ちづらい名手だったのだろう。黒が鋭い狙いで切りこんだ勢いを、白はこの一手でゆるめた。黒は力んだだけのものは取ったが、白は傷を捨てて身軽になったとも見えた。

「雨か嵐か。」と大竹七段の言う^{にわかあめ}俄雨で、一時は空が暗く、^{でんとう}電燈をつけた。鏡のような盤面に白石の写るのが、名人の姿と一つになって、庭の風雨の^{すさ}凄まじさは、かえって対局室の静かさを思わせた。³⁴⁸⁾

中山典之は『昭和囲碁風雲録』第10章「秀哉名人の引退と本因坊戦の創設」の中で、「次代の覇者と目される木谷を迎えて、不敗の名人秀哉の人生最後の勝負碁」を取り上げ、「六十四歳にして若い木谷七段をあわやという所まで追いつめた名局であるとされる」と紹介したが、公式戦ではない^{せい}所為か第4節「秀哉名人、引退の花道」には着手に関する論評が無く、全書に32点有る参考譜にも棋史を飾る^こ此の著名局は採録されていない。4頁余り³⁴⁹⁾の最初の1/3は棋院・新聞社の重視度を映す打ち始め式の^{ものもの}物々しい行事に焦点を絞り、次の2/3は「最高の観戦記者」川端康成への称賛と観戦記の冒頭・末尾部分の抜粋である。持ち時間各40時間と為る^こ此の一戦は時間制限の有る碁の空前絶後の最長記録を作った(秀哉と木谷實の消費時間は其々19時間57分と34時間19分)が、川端は名人の病気に由る3ヶ月の中断等で14回も打ち掛けと為った持久戦に張り込み続け、対局中ずっと盤側に端坐し一刻も目を離す事無く盤上の進行と室内外の^{つぶさ}場景を悉に記した。小説家・劇作家^{みしま きお}三島由紀夫は「永遠の旅人——川端康成氏の人と作品」(1956.4)の中で、初対面の人に対する川端の有名な取っ付きの悪さの例として黙って相手をジロジロ見る癖や、初心の編集嬢が30分間何も話して^{もら}貰えず遂に^{こら}堪えずワット泣き伏した等の^{ゴシップ}噂話を挙げた。³⁵⁰⁾文芸評論家・慶応義塾大学環境情報学部教授福田和也の『大作家“ろくでなし”列伝 名作99篇で読む大人の痛みと歓び』(ワニブックス【PLUS】新書、2009)には、川端は曾て京都祇園のお茶屋で遊んだ時に約20人の舞妓を呼んで2列に正座させて並ばせ、「手前の列の端の娘の前に座り、あの^{ふくろう}梟のような目を見開いて、口一つきかずじつと娘の顔を見つめた。じつくりと眺めて、飽きると、次の娘の前に座った。その^{ぎょうし}凝視を、川端は、一言も発さず、二十人分繰り返した」と有る。本業の踊りも^{きゅうじ}給仕・^{しやく}酌も求められない舞妓たちにして見れば、「これ以上の屈辱はなかったろう、まだレイプされた方がましではないか」とまで書かれたが、次に「このような扱いを、何の^{さんたく}付度もなしに若い娘になしうる強さ、

図太さは、世間並みの悪や利己主義のなしうるものではない」³⁵¹⁾と、過激な糾弾から転じて尋常ならぬ光景から社会の良識をも超えた狂人的な強靱さに触れる。女性を無遠慮に見詰める彼の伝説的な凝視癖は痴的な「視姦」と捉えられる事も有る³⁵²⁾が、常人が「性騷擾」(性的な嫌がらせを表す中国語)容疑を避ける為にも持たぬ其の「異常感覚」は、囲碁観戦の場合に於いて知的な好奇心と超人的な集中力の相乗で棋道の伝播に貢献した。「残忍な直視の眼が、醜の最後まで見落さずについて、その最後に行きつくまでに必ず一片の清い美しいものを掴み、その醜に復讐せずにはやまない最近のこの作家の逞しい力が、『伊豆の踊子』の中では抒情性の一貫のために踏い、内部にふかく身をひそめている」と評論家・小説家伊藤整(名=整)は「川端康成の芸術」(1936.2)の中で其の出世作を顧みた。³⁵³⁾川端が彼の世界文学の桂冠を戴く2年前の66年に最終選考の対象候補1位と為ったのは、添付された伊藤の意見書の影響も有って主催機構の川端文学への理解が進んだ結果である。³⁵⁴⁾逝去(享年64)の前年に川端の受賞を見届けた伊藤は其程権威有る講釈者と言えようが、残忍な直視の眼で醜の果ての美を掴み醜に復讐する逞しい力は『名人』の深層にも通じる。

半世紀後に公開された選考資料の中のノーベル委員会委員オステルリングの報告書に曰く、川端作品は日本の生活様式や倫理=審美的な文化意識を表現しており、其等は登場人物の造形に彩りを与え、同時に其の日本的な文化意識を芸術的に西洋の影響から守っている。1961年の候補作『千羽鶴』(筑摩書房, 52)に同じ長篇の『古都』(新潮社, 62)も加わり、此の繊細で神秘的な詩的表現の傑作の堅く上品な筆調は感情豊かで、洗練された微妙で複雑な表現芸術は欧州の技法を遠ざけようとしている、と評された。³⁵⁵⁾『雪国』(創元社, 37年初版, 48年完結版)・『山の音』(筑摩書房, 54)と共に受賞作と成った『千羽鶴』は、小説家・評論家杉浦明平の「川端康成」(54.6)の中で次の様に『名人』と関連付けられた。「川端の挙げ用いるもろもろの伝統文化の頂点には能と茶と碁とが位している。(“碁は能や茶などのように、日本の不思議な伝統に深まったのだろうか”と『名人』の中で詠嘆しているように。)もちろん、封建的囲碁道の最後の名人本因坊秀哉の晩年を数年にわたって書きついで、あまり面白くないが、川端の一面を照らし出すものとして注意される『名人』において、碁の道が執拗に説かれているが、しかしこの小説じしん特異な存在であって、小説の世界一番もちこみやすいのは、お茶であろう。(中略)『千羽鶴』はお茶の会とお茶の道具とが愛欲と不可分離に溶けあいながら、物語を進めてゆく。茶道小説といってもおかしくはないくらいだ。前にあげたもろもろの芸術なども、じつは、この茶道の附属物として出てくる。物語の筋立においてだけでなく、物語をこしらえる精神そのものが茶道の精神そのものなのである。」³⁵⁶⁾芸道として棋道より歴史が少し長く直近の愛好者も同じ200万人台超の茶道³⁵⁷⁾との比較はともかく、川端が「愛着を感じてゐる」と自称した『名人』³⁵⁸⁾を余り面白くないと言い切る処は面白い。伊藤整の遺作『日本文壇史』(1~18巻, 大日本雄辯会/講談社, 53~73)に因んで言えば、日本の文壇では碁に

対する一部の既知・「^{きち(がい)}狂」層と多数の未知・無関心層との分断は大きい。趙治勲は日本製人工^A智能^I DeepZenGo との3番碁(2016.11.21~23)を終えた後の感想で、「碁はある程度強くないと、全く面白くないもの。これだけ強くなってくれたら、みんながそれで勉強して、世界に囲碁が広まる。感謝の気持ちしかありません」と語った。此の述懐を報じた『週刊碁』12月5日号の記事(1~3面、上田篤史)の大見出し「治勲貫禄」の通り、「第2回電王戦三番勝負/2-1でAI降す」(同1面の副題)結果に対する当人の受け止め方は、往年の碁界一の悔しがり屋ながら人工^A智能^Iの進化を歓迎する大棋士の広い胸襟を示した。人工^A智能^Iの寄与を期待した囲碁普及に於ける面白さの実感の重要性も思い知らされるが、確かに碁は入門こそ簡単なものの初級→中級→上級へと進まないと真の趣^{おもむき}は味わえない。人口比率を見ても碁は茶道と同じく「大衆愛好」ならぬ「小衆趣味」(中国語)に過ぎず、川端文学の愛読者でも専門的な知識が無いと囲碁小説の金字塔『名人』を敬遠するであろう。

趙名誉名人から1勝^もを挽ぎ取った^{ソフト・ウェア}電腦運用指令体系の本名は「禪」「善」を連想させるが、漸進的な上達を経て全体像を掴める様に成らなくては碁の魔力が全然^{ぜんぜん}見えない可能性が有る。日本棋院の最上級対局室「幽玄の間」を飾る川端康成揮毫(1971)の掛軸「深奥幽玄」は、彼より^{ちやうど}恰度26歳年下(同じ6月14日生れ)の能書家藤沢秀行の絶筆「強烈な努力」と共に、超絶の量の学習・実践に由るAlphaGoの成功が証明した囲碁の極致への道を示唆している。川端が共感の困難さを承知^{deepZen}で深い禪味の有る碁^{go}の歴史的な対局^{つぶさ}を悉に観察・記録した事も、棋道の深奥幽玄と棋士の強烈な努力を世に伝え後に遺そうとする熱意が根底に有ろう。引退碁の30年後ノーベル文学賞に輝いた彼の観戦記は日本の囲碁文化の豊かさの証であり、秀哉歿(40.1.18)の年から54年まで改稿・部分発表を繰り返した創作衝動の強さは、先ず幼い頃から嗜好した碁と棋道・棋戦・棋士の魔力に魅せられ^か駆り立てられたものである。其の当時の棋力は職業棋士に6子ぐらいなので手の事はチンプンカンプンだったが、ピンと張り詰めた対局場の雰囲気伝えてくれたと才人棋士中山典之は観戦記を讚えた。「後年、毎日新聞が起用した文士さんの観戦記との差は、例外もあるが、まあ一級と九段ぐらいか。散歩して帰って見たら碁が終っていた。などと書いた三文文士さんは観戦記者に非ず。単なる野次馬だ。これは『本因坊戦全集』の全観戦記を一読した、元観戦記者、中山の感想である。」³⁵⁹⁾『川端康成全集第二十五巻』(新潮社、99)には数篇の「圍棋観戦記」と「呉清源棋談」(53)等の他、数篇の「圍棋隨筆」と引退碁観戦記の小説化の原形『名人(プレオリジナル)』(40~48)が収録されており、完成版『名人』と合せて著者の棋道への愛着と棋士への密着、表現への執着が窺われる。小説では呉清源の権威有る解説に依拠した着手に就いての記述・判断は更に磨きが掛り、4度目の打ち継ぎ(7.26)の際の場景を再現する上記描写は盤上・盤外の両方とも面白い。41章の真ん中の第20・21章に妙手・名手・鬼手が登場するのは采配の妙を感じさせ、攻めの鬼手69と^{ハイ・ライト}凌ぎの妙手70(図26参照)の見せ場は左右対称の富士山の頂きを^{ほうふつ}髣髴させる。

観戦記の64回中の「四十一」(棋譜無し, 前回の棋譜は黒99が打たれた前々回の再掲)に、「この日初めて私は、本因坊名人の眉に、一寸ばかりも長い白毛を見つけた」と書いてある。³⁶⁰⁾ 小説の「七」で名人が死の6日前に床屋で長い眉を切り残させた事の後に此の話が出る³⁶¹⁾が、本人が「長命の相」と認識した「福眉毛」とは別の象徴的な意味として「白眉」が思い浮かぶ。『広辞苑』の「①白いまゆ。②〔三国志蜀志、馬良伝〕(蜀の馬氏の兄弟五人はみな才名があったが、特に眉の中に白毛があった馬良が最も優れていたという故事から)同類の中で最も傑出している人や物」の後者は、本局中の其の鬼手・妙手の応酬や川端の観戦記・囲碁実録小説の同分野での位置に該当する。②の用例「“軍記物の一”も盤上の戦記物語とも言える観戦記の性質と妙に通じ、現に白130を見て立合人岩本薫六段は「戦争とはこんなものなんでしょうね」と感嘆した。³⁶²⁾

「鬼手」は『広辞苑』では「囲碁・将棋で、相手を驚かすような奇抜な手」、『日本国語大辞典』では「(名) 囲碁、将棋などで、人の意表をつくような奇抜な手。おにて」と解釈され、『広辞苑』に無い「鬼手」は『日本国語大辞典』では「(名) 囲碁、将棋で、思いもよらない点に打たれた、てきびしい手。きしゅ」、『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の「おにて 鬼手」の項は、「相手の意表を衝いて、肺腑をえぐる辛辣な手」と定義されている。同じ和製漢語の類義語「奇手」は両辞書で其々「奇抜な手段。めずらしいわざ」, 「(名) ふつうと変わったやり方。珍しい技。奇抜な手。また、楽器などの演奏がすぐれていることにもいう」と為るが、『日本将棋用語事典』の「鬼手【きしゅ】」は「“奇手”がなんとなくビックリさせられるような手の時に使われるのに対し、“鬼手”は魂がこもっているような感じの手、いかにも勝負にきたなという感じの手の時に使われる。同じビックリするにしても、“鬼手”の方がいかにも人生をかけてるような感じで感動する」と言う。「奇手」と「鬼手」の違いは中国語由来の「奇才」「鬼才」と比較すればよく分るが、『日本国語大辞典』の【奇才・奇材】の「世にまれな秀れた才気、才能。また、その持主」と【鬼才】の「人間とは思われぬほどのすぐれた才能。また、その持主」の様に、同じ「才」でも「鬼」の超人的な次元は「奇」の超凡の水準よりも勝っている感じがする。中唐の詩人李賀は7歳で能く詩文を草し韓愈(唐宋八大家の筆頭と為る文学者)等を驚かせ、幻

図26 名人引退碁(1938.6.26~12.4), 本因坊秀哉 vs. 木谷實(先), 67~107, 237手完, 黒5目勝ち

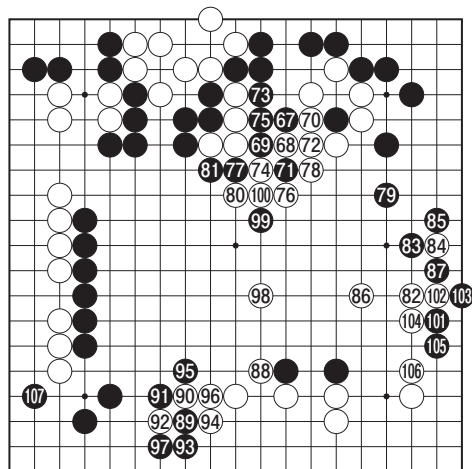


図26 出典=『現代囲碁大系』第8巻『木谷實 上』, 第16局第5・6譜, 169・170頁。

想的な詩風で李白の「天才」と白居易の「人才」に対して「鬼才」と称されたが、其の「黒雲
圧城城欲摧，甲光向尽開金鱗。」(黒雲城を圧して城摧けんと欲し，甲光月に向い金鱗開
く)³⁶³)や「黄塵清水三山下，更變千年如走馬。」(黄塵清水三山の下，更まり変ること千年も
走馬の如し)³⁶⁴)等の名句は，李白の「俱懷逸興壯思飛，欲上青天攬明月。」(俱に逸興を懷い
て壯思飛び，青天に上って明月を攬らんと欲す)³⁶⁵)や「天生我材必有用，千金散尽還復來。」
(天我が材を生ずる必ず有用あり，千金散じ尽せば還復來たらん)³⁶⁶)等と見較べても，確かに「詩
仙」も後塵を拝す様な神秘・飄逸な雰囲気^{おおいつ}が横溢しているという印象を受ける。浪漫的な古典
詩歌に魅かれる毛沢東は孤高の「三李」(李白・李賀・李商隱)を好んだ³⁶⁷)が，中国で流布
度が最も高い古詩集『唐詩三百首』([清]蘅塘退士[孫洙]編)には，303首中李白と李商隱
が其々27・22首収められているのに李賀は1首も採録されていない。序に「諺云：“熟誦唐詩
三百首，不会吟詩也會吟。”」と有る此の一般人向けの「万葉集」は，恐らく編者の選好よりも
鬼才は大衆の理解を得難いと踏んで割愛したのかも知れないが，神憑^{かみがか}り的な鬼手も「出奇制勝」
(不意打ちや奇策で相手を制して勝つ)の奇手より難しい。『広辞苑』の【奇才】の用例「“画
壇の一”」に因んで宋初の文人黄休復著『益州名画録』の説と結び付ければ，「好手」「妙手」「奇
手」「鬼手」は其々「能格」「妙格」「神格」「逸格」に当るであろう。『日本国語大辞典』の【ク
レバー】の用例は「モダン辞典(1930)“クレヴァ 才能のある”」と為るが，此の「能」より
「妙」「神」「逸」が順次に格が上がる図式は囲碁の境地の高低とも対応する。川端康成が好き
な室町中期の僧一休の「仏界入り易く，魔界入り難し」³⁶⁸)を捩^{もじ}って言えば，名手中の名手を
為す鬼手は至高の「逸格」と対応する至難の「魔界」の要素が濃厚である。

「脛がはれあがり，額に青筋立った名人の——この長い眉毛は，やはりほっと一つの救いだっ
た。まったく対局室は鬼気迫るといづく，その廊下に立って，夏の日の強い庭をふと見おろ
すと，近代風な令嬢が無心に池の鯉に魅^{こい}を投^なげているのが，私はなにか奇怪なものを眺める感
じで，同じ世のことは信じられぬほどだった。」「逆光線で見ると，名人の顔の輪郭がぼ
うとゆるんで，幽鬼じみる。(中略)九十五、九十六、九十七と続けて盤に打ちおろす石の音が，
空谷にひびくように凄^{すご}い。』『名人』第7章の中の「鬼神が悽愴^{せいそう}の対局」の描写には「鬼」が3
回も使われているが，「鬼気迫る」は同音の「危機迫る」と共に絶境・闘魂が鬼手の産婆^{さんば}であ
る事を示唆する。『日本将棋用語事典』の講釈の通り鬼手は勝負処で渾身の気迫を込めて放つ
超強手であり，棋士の全存在を賭け脳味噌を絞り尽した物なので常に痺れる様な衝撃・戦慄・
感激を呼ぶ。『読売新聞』2016年11月1日の第41期棋聖戦Aリーグ7回戦(張栩対蘇耀国)
第3譜(図27)の観戦記(高見亮子)に，「張は黒59のツケを打ちたかったのだ。見るから
に手筋。検討陣から歓声があがり，片岡九段も“強烈。鬼手と呼びたい”と語った」と有る。
「張の鬼手」と題する此の譜の前の第2譜(図28)は「ザ・手筋」の題の下に，「黒35とぺた
り」とつけた。“ザ・手筋。本にはよく出てきますが，実戦ではなかなか見ない”と片岡九段。

これで白は思いのほか身動きが不自由なのだ」と言う。中国語にも入った擬似漢単語（漢字表記の和語を表す造語）の「手筋」は『広辞苑』の項に、「⑥囲碁や将棋などで、その局面での有効な着手や指し手」という専門用語の意が有る。『日本国語大辞典』の【手筋】⑧は「囲碁や将棋で、ある局面で必要にして有効な着手。また、ある形で好手と好手が連なるさし手」と為るが、何れも衝撃度が鬼手に及ばないものの名手の基礎の重要な一部であると見て可からう。張の手筋は当世随一の詰碁名手に相応しい局所の形に対する俊敏な察知・判断に基づくが、此の1局で「見事」の字面通り見本を為す様な手筋に続いて見せ場の鬼手を繰り出したのは、挑戦者決定勝ち抜き式戦への出場権を懸けるAリーグ1位争奪の熾烈さも要因の一つと見える。最終戦で6勝1敗の張は6勝0敗の蘇を下し序列の利（4位対7位）で首位に立ったが、当初最下位に並んだ蘇・柳時熏が2位・3位（4勝3敗）と成った下剋上にも見られる様に、次の勝ち抜き式戦→挑戦の勝利への道を拓こうとする必死さが智術の発揮を最大限にさせた。半年前の『週刊碁』4月4日号の「張栩復活 第63回NHK杯・決勝/8年振り4度目の優勝/寺山 初出場で準V」（榎本宏幸）に拠ると、7大選手権戦史上初の5冠王・2人目の完全制覇経験達成（09・10）後13年の棋聖位失冠で無冠に陥った張は、遠ざかっていた選手権に就いて此だけ取れないともう一生取れないと思っていたと言う。「弱気が交錯する胸の内」と捉えられた人生に関する危機感は一に一生懸命の死闘を駆り立て、局地の闘いで人智の極致を尽す様な手筋や鬼手は一所懸命の心・技の爆発・閃光と言える。

図 27 第41期棋聖戦Aリーグ7回戦(2016.9.8),
張栩(黒, 込6目半)vs. 蘇耀国, 55~75, 171
手完, 黒中押し勝ち

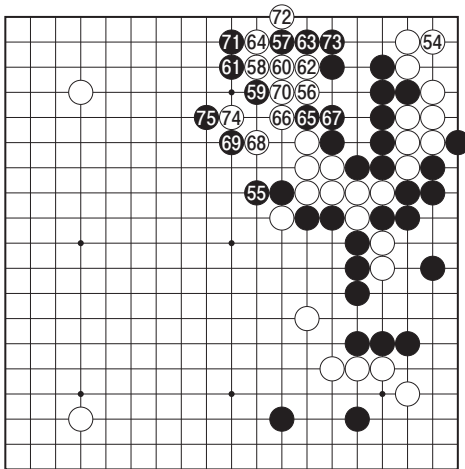


図 28 図27対局, 30~54。

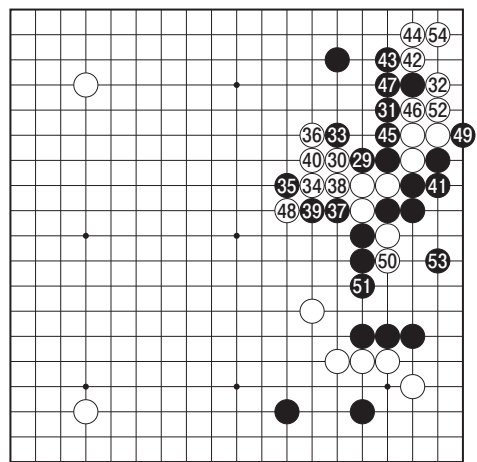
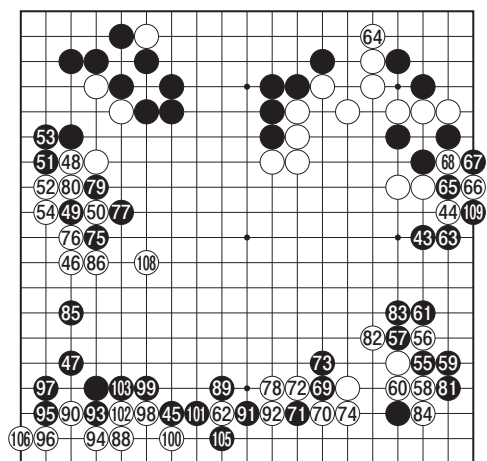


図 27・28 出典 = 『読売新聞』2016年11月1日・10月31日「棋聖戦 第41期Aリーグ7回戦」(観戦記 = 高見亮子) 第3譜・第2譜。

名勝負の「驚艶」「上善」の凄さと高手も免れぬ「拙棋」の危うさ

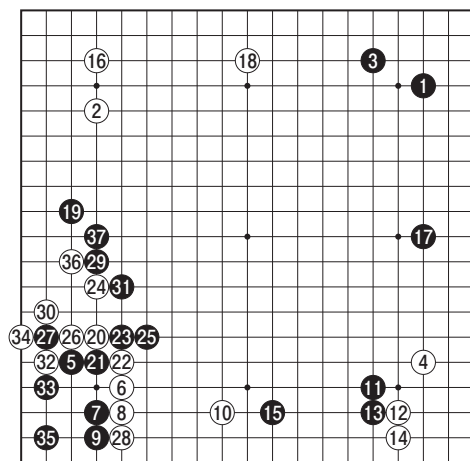
李世^{イセドル}対^{テラヤマレイ}AlphaGo 戦終了後の3月20日に放映された張栩対寺山伶四段(25)の熱戦は、記事の見出し「張、積極的な仕掛け/寺山の猛追も及ばず」の通り張の中押し勝ちに終わった。黒43の様子見→55・57の切断→65・67の劫を経て放った69の突けは自慢の一手で、85まで一連の折衝で黒が盛り返し後の劫絡みの攻防でも優勢の流れが維持された。(図29参照) 復調を期して前年春に故郷の台湾に生活拠点^{けんどちやうらい}を移した彼は捲土重^{きやうとうほ}来の橋頭堡を築き上げ、此の奪冠を発条にして2016年夏に本拠を日本に戻し宣言通り主要棋戦での再活躍を見せた。転換点と為る快進撃の会心劇で光った黒69は蘇耀国の事後解説で「好手」と評価されたが、4線の石に突ける形^{デジャ・ビュ}の既視感を辿って行くと棋史に残る手筋の名手と部分的に重なり合う。高木祥一は『秀策極みの一手』(日本棋院, 10)の第1章「天保十三年~十六年(1842~1844)/秀策十四歳から十六歳」の中で、「切れ味鋭い返し技」を解説の題とする第1局(先2子・先番安田秀策 vs. 太田雄蔵, 天保13年8月13日〔西暦=9.17〕)の黒29に就いて、「これぞ手筋!」の節で「素晴らしい手筋」「妙手」「脱帽と言わざるを得ません」と絶賛し、雄蔵の已むを得ない白30に対して黒31の連打は不満が無く、白32・34を強要して黒35の守りで自然と隅の嫌味も解消されたので、黒が一本取った分れであるとして解説している。³⁶⁹⁾(図30参照。先2子=同一相手と複数〔原則として偶数〕局を行う場合、下位者が先番と2子番を交互に打つ手合割)「最強本因坊の大局観、判断力30選」(表紙の副題)の冒頭を飾る此の華麗

図29 第63回NHK杯決勝戦(2016年初, 対局日未詳), 張栩(黒, 込5日半)vs. 寺山伶, 43~109, 211手完, 黒中押し勝ち



87=65 104=68 107=65

図30 安田秀策(先2子, 黒)vs. 太田雄蔵(1842. 9.17), 1~37, 242手完, 黒5目勝ち



な決め手は、「天保四傑」の1人である雄蔵六段(35)を後に超えた秀策二段の早熟の天才を示している。張栩は古譜を滅多に並べないと認めた³⁷⁰⁾し直接此の手の影響を受けたとは断定し難いが、林海峰・大竹英雄が生まれる100年前の「ザ・手筋」は先賢の凄さと碁の奥深さを思わせる。林が日本の2人目の世界王者と成った1990年に生れた新鋭寺山の手筋も中々の物であり、解説は黒69以上の賛辞で白186の割り込みを妙手とし188で黒5子が落ちていると言う。一瞬逆転の気配だったが気を取り直して黒203の突けが冷静で、次いで白AはBに切られて中央の白4子が落ちる展開に為り(図31参照、^{くだり}件の黒5子は⊕、白4子は⊖)、細かいながら黒に少し残りそうだと蘇耀国は見ているが、急所を衝く203も洒落た手筋と見做せ両者の巧手

の応酬と持味の発揮が好局を作り上げた。『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の「鬼手」の定義は相手の意表を衝いて肺腑を決る辛辣な手であるが、終盤に掛けての此の2手も互いに敵の懐を刺し込む^{あいくち}ヒ首の様な鋭利さ・破壊力を持つ。日本の阿含・桐山杯対中決戦12連敗を止めた井山裕太の執念の勝利に言われた「驚艶」は、^{これら}此等の智勇兼備の鬼手・妙手・好手・手筋の鮮やかさ・激しさの形容にもぴったり合う。日本の中日辞典に見当らず定訳も無い「驚艶」は此の文脈では意識の「鮮烈」が分り易いが、『現代漢語詞典』の「鬪対女性的美艷感到驚異，也泛指对事物的美妙感到驚異：她一出場，四座～|国際馬戲表演令観衆～。」(鬪女性の美しさ・艶やかに驚く。又広く物事の素晴らしさに驚くことを指す。「彼女が現れると、満座の人々が其の艶やかに驚いた」「国際曲馬の公演は素晴らしくて観客を驚かせた」)の通り、「華麗・美妙」に対する驚きを表す言葉である。囲碁の妙手や名局も往々にして美しい形や精神を備え美的な快感を与えるものであり、名局・名手を追求する中国棋界の新しい潮流は日本の囲碁文化の伝統に感化された処が多い。

名手(高手)が対戦し名手(妙手)が出る名勝負という多重の意味での名局の好例として、第17期名人戦決勝7番碁第7局(小林光一对大竹英雄, 1992.11.11~12)が挙げられる。名誉名人の資格と為る5連覇が懸る小林と「名人戦男」大竹は各々名人位への執念を持ち、其々棋聖8連覇中の日本覇者と同年富士通杯優勝の世界王者として貫禄も拮抗していた。第1~6

図31 図29対局, 186~203(図中86~103)。

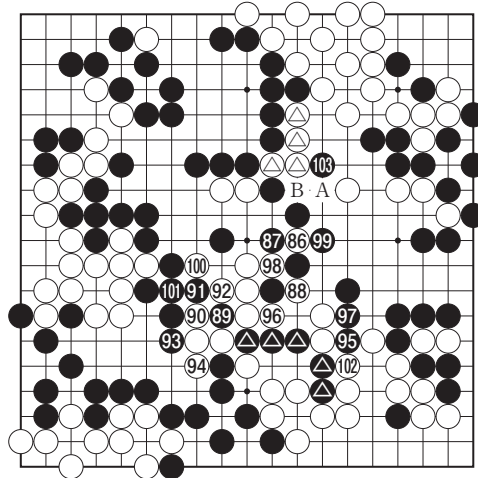


図29・31 出典 = 榎本宏幸「張栩復活 第63回NHK杯・決勝/8年振り4度目の優勝/寺山 初出場で準V」, 『週刊碁』2016年4月4日号。図30 出典 = 高木祥一『秀策極みの一手』, 日本棋院, 2010年, 12・14・15頁(経過図・実戦図。番号は192頁の総譜の通りに統一した)。

局(9.9~11.5)は互いに黒を入れ合うという7番勝負史上類を見ない展開と為り、最終局では黒番に当る大竹は布石で触れ合わず中盤で攻めも囲いもせず只管厚く打ち、何時の間にか優勢を占める様に成り大竹流の神髓を見せ付ける奇妙な名局が徐々に現れた。³⁷¹⁾序盤から從容として迫らぬ鷹揚さを發揮し先ず隅を固め辺の大場を占める事に徹底し、漸く35の突けで石の接触を始めた後は39の曲りに次ぐ41の帽子は、25・27・31の飛びや51・53・103の封鎖と共に「高者在腹」の中原志向を示している。(図32参照)此の「帽子」は『広辞苑』と『日本国語大辞典』で其々、「⑤囲碁で、相手の石を攻めるため、二路上からかぶせるように圧迫する手」、「⑤囲碁で、相手の石の中央への進出をはばんで、一路ないし二路隔たった点にかぶせるように打つ手」と説明されているが、「帽子の高川(格)」や大竹の姿勢に見られる様に此の手段は必ずしも攻めるとは限らず、不即不離に相手を抑制し己の中央占拠の点・線・面・塊の布陣をするのが妙味である。「帽子の高川」と「一間の高川」の名が示唆する様に帽子は1間飛びと表裏一体を為し(中国語で「[単] 関」又は「[一間] 跳」と言う囲碁用語は『広辞苑』には無く、『日本国語大辞典』の【一間飛】では「囲碁ですでに打ってある自分の石から縦又は横に同一線上一路(いちろ)隔てて打つこと。また、そう打った形」と説明される)、相手の中央を目指す1間飛びの点に打つ帽子は「敵の好点は我が好点」の法則に合致する(中国の囲碁格言には此の「敵之好点即我之好点」の他、「彼之要点為我之要点」[彼之要点は我之要点と為る]が有る)。『朝日新聞』12月9日掲載の第6譜(85-101)解説「何もしない大竹」(春

図32 第17期名人戦挑戦手合7番勝負第7局、小林光一 vs. 大竹英雄(黒、込5目半)、1~53、265手完、白1目半勝ち

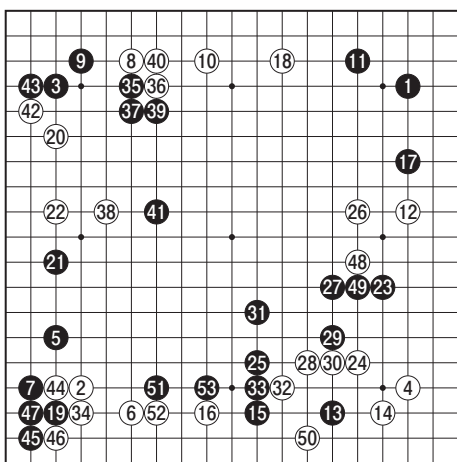


図33 図32対局、85~131

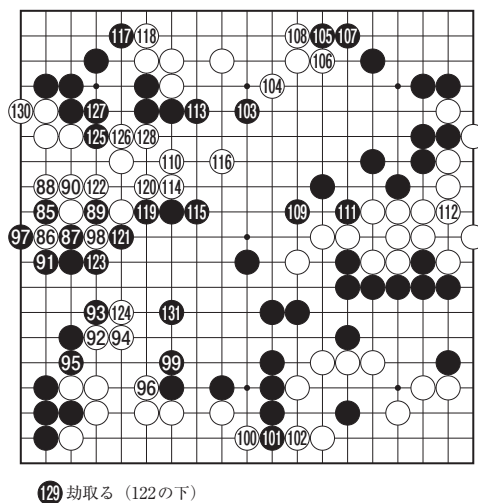


図32・33 出典 = 『朝日新聞』1992年12月4~7・9~11日「第17期名人戦第7局」(観戦記 = 春秋子) 第1~4・6~8譜。

秋子)に曰く、「攻める石はない。囲っても勝てない。ではどうしたらいいのか。(中略)大竹は何もしなかった。本手で押し通し、厚いまま、流れに身をまかせたのである。」此の「本手」は『広辞苑』の「③勝負事で、本筋の手」より、『日本国語大辞典』の「囲碁で、一見働きがないように見えるが、その部分で最も適切な着手」が専門的で本質に触れている。『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の「正着。一見ぬるいように見えても、その場ももっとも正しい手」から、橋本宇太郎の「火の玉」を無力化した高川格の「流水不争先」の「微温湯」が連想されるが、「慌てず騒がず」の大竹流³⁷²⁾は『道德経』第8章の「上善若水」(上善は水の若し)を体現した。「水善利万物而不争, 処衆人之所惡, 故幾於道」(水は善く万物を利して而も争わず, 衆人の惡む所に処る, 故に道に幾し)という老子の説は、強引な自己主張をせず大抵の棋士が嫌う実利の乏しい方に甘んじる流儀をも言い表せよう。大竹は1日目の終り頃「どうしようもないな、甘くて」「つらいな、碁打ちをやめたくなくなった」と眩き、翌日の初めに黒93・95・97・99・101は相変わらず当り前の手を打ち続けたが、103の2間飛びの好手を放った途端に小林は突如「大竹魔術」に騙されていた事に気付く、此の碁だけはどんなに細かくなっても1目半は勝つという絶対の自信が揺らぎ始めた。(図33参照)

『私の囲碁の道』の中の聶衛平が少年棋士を叱る「臭碁」は日本語版で「うそ手」と訳されたが、次の段落中の「橋牌」の「臭牌」の訳語「ヘマ」³⁷³⁾との整合性を考えても「へばな手」が良からう。和訳作業当時の『現代漢語詞典』第1・2版(1978・83)では「臭碁」は採録されておらず、文化的な生活の一部である頭脳競技も抑圧された「文革」の影響は概念への理解にも及ぼした。現行版では「碁」(囲碁・象棋・西洋将棋等)の空前の隆盛を反映して【臭碁】の項が有り、語釈は「図下碁時的拙劣の着数; 拙劣的碁術」(図碁を行る時の拙い着手。碁の拙劣な技倆)と為るが、字・義の両面で最も合致する日本語として已に死語化した「拙碁」が思い当たる。『日本国語大辞典』に見える「俚言集覧(1797頃)“ざる碁, 拙碁を云ふ”」は【笨碁】の用例で、3点中の次の「酒中日記(1902)〈国木田独歩〉五月八日“出張所の代珍, 派出所の巡查など五六名の者は笨碁(ザルゴ)の仲間で”」「牡丹雪(1930)〈嘉村磯多〉“互に毒舌を浴びせ合ひ乍ら笨碁(ザルゴ)を囲んだ”」から、20世紀前半の日本の脱中国語の傾向(「碁」→「碁」の用字)と愛碁家の多さを窺わせる。「笨碁」は『広辞苑』で「(笨造りの碁筭に土製の白石・黒石を用いることから、また、笨の目のあらいようにあらい碁という意から)囲碁のへたなこと。また、その人」と説明されているが、『日本国語大辞典』の語釈は「(“ざる”では細かいものがもれるというところから)へたな碁。幼稚な碁を打つこと。また、その人。へりくだって自分の碁をいう場合もある」とし、【補注】で「碁石はもと非常に小さく、小形の箕(み)を石の入れもの(碁筭)に使っていたが、技量の未熟な人や趣味の深くない人は、泥石(土を固めた石)に目のあらい笨を用いることが多かったところからともいわれる」との説を紹介している。【笨】の「④“ざるご(笨碁)”の略」の前に「②(比喩的に)大ざっぱで抜けた所

の多いものの意」と有り、「この校正はざるだ」という用例は異例にも出処が無く執筆者が実感に即して作っただけ。『広辞苑』の同項目では「②笨碁^{ぶご}の略」の後の④が「漏れの多いことのたとえ」で、例文の「何度やっても一だ」は「校書^{こうしょ}掃塵」と結び付けば校正乃至碁の読みの宿命と繋がる。此の四字熟語の項で参照を指示された【書を校^くする塵^{ちり}を掃^{はら}うが如し】は、「[夢溪筆談雑誌二]書物の校正は、その度ごとに誤脱などが発見され、いくら塵を払っても払い尽せないように、完全無欠を期することは至難である。校書掃塵」の意味である。連続^{ドラマ}『地味にスゴイ! 校閥^{こうわつ}ガール・河野悦子^{こうのえつこ}】(日本テレビ, 全10話, 2016.10.5~12.7放映, 原作=宮木あや子^{みやぎあやこ}『校閥ガール』『校閥ガール ア・ラ・モード』『校閥ガール トルネード』[14・15・16, KADOKAWA], 脚本=中谷まゆみ^{なかつたにまゆみ})に由って、文章の正誤・適否を確める仕事の平凡にして重要である性質が広く可視的に認識されたが、初回放送の1年前にAlphaGo挑戦が始まった棋界でも校書掃塵の例は掃いて捨てる程有る。中山典之は『昭和囲碁風雲録』の中で神戸市立図書館長を務めた文化人志智嘉九郎の危うさの証拠として、其の執筆に由る橋本宇太郎著『囲碁専業五十年』(至誠堂, 1972)の中の重大な誤りを挙げている。「日本棋院渉外部長で橋本宇太郎師のケンカ相手である奥山伍鹿を伍廉。本因坊戦の対局場を提供した橋元文治を橋本文治。そして川端康成は名作『名人』中で、木谷七段を“大竹七段”と仮名で登場させているが、志智氏は“大谷七段”と誤記している。/およそ、書物の中で人名を誤記するなどは在ってはならぬことで、もし、橋本宇太郎師が一度でも校正していたら、これらの間違いは在り得ぬことだが、これは単なる誤植に非ず、(中略)碁界に対する無智を証明する一端ではないだろうか」と言う³⁷⁴が、友人に一任し点検しなかった老棋士の無頓着も愛棋家識者の粗忽も「地味にヤバイ」(造語)。

世界の「人工^A智能^I活躍元年」(2016)には多くの職種は失業の危機に曝されると囁かれたが、日本では非創造型^{うらかた}の裏方の仕事と捉えられ勝ちの校閥は奇妙にも突如脚光を浴び始めた。日本テレビの連続^{ドラマ}『家売るオンナ』(全10話, 7.13~9.14放映, 脚本=大石静^{おおいしずか})でも、「校閥の鬼」の独身女性が誤字・脱字の無い引札に魅かれて住宅の購入に至った話有る。「爆売り」天才の主人公三軒屋^{さんげんや}万智^{まち}は謹厳・地味な彼女の背中を推すべく勤め先に乗り込み、古代希臘の「イソップ寓話」(伝・前6世紀頃)の「蟻と螽斯^{ありざりす}」の勤勉・儉約礼賛を引いて、「校閥の仕事が続けて10年、コツコツ貯金を作った草壁^{くさかべ}様は正にアリです。校閥部の地道なお仕事も又アリそのものではないでしょうか。真面目にコツコツ働く姿は勤勉な我々日本人の美德そのものです。皆様のお蔭で日本語は未だ死なず、活字文化は守り育てられています。有り難い事です。書籍を愛する読者でさえ、校閥の方の存在を知る方は少ないでしょう。スポット・ライトの当る作家の裏に掛け替えの無い校閥部の仕事有る事を誰も知りません。感謝もしません。書籍の後書^{あとがき}で著者にお礼を言われる事も有りません。然^{しか}〜! 皆様はそんな事は気にも掛けず、コツコツと作品の質を守り続けておられます。素晴らしいです。感動します。頭が下がります。

今こそ自分の勤勉さを誇りに思う時です」と、仕事柄元々静まり返っていた大部屋で嘖然として聞く数十人の社員に向けて熱弁を振るった。同行の営業員庭野聖司が「そうです。家を買きましょう！208号室を！」と更に一押しすると、彼女は「余計な事を言うな！馬鹿者！」と其の言わば「思想性が低い」へぼ・野暮を叱り、此で落ちたという確信で「ご清聴有り難うございます」と礼を述べ颯爽として去って行く。人生最大の買物を型破りの妙手・奇手・鬼手で売り捲る豪腕は喝采を浴びる要素が多く、作品は日本に止まらず放送の其々1時間/1週間後に香港・フィリピン・タイ・インドネシア・東埔寨/韓国・台湾・米国で放送された（英文題は「私の仕事は家を売る事です」という主役の台詞に因んだ *Your Home is My Business!* [御宅は私の商売です!], 中国語題は直訳の「売房子的女人」）。³⁷⁵ 次期（仏蘭西語の *cours* に由来した此の放送業界の用語は連続番組の1区切りの単位を意味し、通常週1回で1四半期に納まる13回）の同枠（水曜夜10時）の新作の宣伝として、各々が黙々と校正刷に没頭し肅々と点検を進める職場への突入勧誘の場面は効果的であるが、著者が校閲嬢の熱意・完璧さに感激し謝辞に其の名を記すという次作の非現実的な設定と共に、自ら黒子に徹し完成品に痕跡を残すまい日本の校閲者の「日陰」の在り方を浮彫りにしている。日本の常識・良識が往々にして海外の非常識・非常態である事の1例と為る様に、中国の書籍では校閲者は可く「責任校対+氏名」の形で「版權頁」（奥付）に記載される。「奥付」は書物の末尾に付ける、書名・著（作権）者・発行者・印刷者の氏名と発行日・価格等を記載した部分/頁を意味し、『日本国語大辞典』の語釈には「著者の検印紙を張り付け、または印刷する」とも有るが、「訂正増補新しい言葉の字引（1919）〈服部嘉香・植原路郎〉追加」が初出と為る此の奥床しい和語に対して、明治10年代に図書の奥付に入る「版權免除」の文言で一般化した和製漢語「版權」を用いる「版權頁」は、中国人の権利意識と自己主張の強さを現し位置も洋書並みに表紙の裏面辺りに在るのが多い。其処に編集者・校閲者や装訂者・「題名」（題字）者等の氏名及び発行部数等まで出るのは、「人過留名，雁過留声」（人は立ち去ると名を留め、雁は飛び去ると声を留める）との欲求にも基づく。

両国の比較の好例として毛著『我的父親鄧小平「文革」歲月』（中央文献出版社，2000）と、日本語版『わが父・鄧小平「文革」歲月』（藤野彰・鎧屋一ほか訳，中央公論新社，03）を挙げよう。原著の表紙裏（中国語は表紙裏を表す「封面/封一」に因んだ「封二」 [= 日本語の「表2」]）に、故人の三女（旧名 = 蕭榕，現名 = 鄧榕，50）の大きな多色写真入りの略歴が有り、見返し（其の頁及び次の遊び紙「中国語 = 「空白頁」）に次ぐ扉（同 = 「扉頁」）の裏の頁には、書名・著者名・出版社及び所在地域 [北京]・刊行年月・国際標準書籍番号・検索鍵・詞等の基本情報に続いて、著者・「責任編輯」（編集者）・「編務」（編集実務）・装幀設計・「責任校対」の名前が出ており、其の下に出版社兼発行所の住所・郵便番号・販売用電話番号や販売書店の他に印刷装訂の会社名・住所が書いてある。更に寸法（850 × 1168mm）・字数（390

千字)・「2000年6月第1版 2000年7月第三次印刷/印数 230000冊」, 定価(40.00元 [= 520円])・特典(「光盤[CD-ROM]」1枚付き)の後に、薄い小さな字で「本社図書如存在印装質量問題、請与本社聯係調換(当社の図書に若し印刷・装訂の品質の問題が有れば、当社に連絡し取り換えの要請を下さい)」と記され、続いて最後に太字(中国語=「黒体字」)で「**版權所有 違者必究**」(版權を所有し、違反した者に対して必ず追究する)という文言を掲げている。**海賊**(同=「海盜」)**版横行の国情を映す警告**と共に**權利主張の強さ**を思わせる記載として、前出の「装幀設計/敬人設計工作室 呂敬人+徳浩」(主要・副^{サブ}次の違いを示す活字の大きさの違いは原文の儘)の他、鄧小平語録と定価が印刷された裏表紙(同=「封底」)の前の頁(同=「封三」[裏表紙裏を言う日本語の「表3」に対応])の文字も、「責任編輯:劉敏/装幀設計/敬人設計工作室 呂敬人+李徳浩」と為る。対して日本語版(2巻)の上巻の表紙に書名・著者・訳者代表名、見返しの右(縦組につき原著と反対側)の頁に著者の写真・略歴が掲載され、扉に表紙の情報+出版社名、其の裏に「装幀・装画 鈴木正道」と記してある。文字通り本文の後に在る奥付には著者略歴が再掲され、下に表紙と同じ情報及び「2002年5月10日初版印刷 2002年5月20日初版発行」「発行者 中村仁」「発行所 中央公論新社」(以下、住所・電話[販売/編集]・URL・振替)・印刷 凸版印刷、更に「©2002 CHUOKORON-SHINSHA, LNC./MaoMao, Akira Fujino & Hajime Abumiya」の著作権表示が有り、続く国際標準書籍番号等の下に小さい文字で「定価はカバーに表示しております。落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部にお送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします」と結んでいる。後者の^{コピー・ライト}© 使用や電腦網上特定の情報蓄積体系の所在表示は当時の国際化の度合の高さを現し、編集部電話の開示や「小社」の謙称、送料負担^{くだり}の件は日本的な「小さな親切」の感が有り、目立つ処に装幀者の名を明記したのは中国と同じ**知的創造及び所有権への尊重**の証である。日本では有り得ない編集・実務担当・校閲者の「**版權頁**」での登場は**個我本位の所産**と思われ、同じく日本流に無い字数・印刷(累積)部数の明記は**中国的な物量主義の発露**と捉え得る。

『広辞苑』の「そう-てい【装丁・装釘・装幀】」の語釈の通り、此の中国語由来の単語は「(本来は、装^ま訂^めめる意の“装訂”が正しい用字。“幀”は字音タウで掛物の意)書物を綴じて表紙などをつけること。また、製本の仕上装飾すなわち表紙・見返し・扉・カバーなどの体裁から製本材料の選択までを含めて、書物の形式面の調和美をつくり上げる技術。また、その意匠。装本」の意である。装幀者の待遇と違って中身の充実さを著者と二人三脚^{ににんさんきやく}で追求する編集者が表に出ないのは、**形式面の体裁・見た目・装飾性・調和美を重視する日本的な感受性・価値観**とも合致する。『日本国語大辞典』の【装丁・装釘・装訂・装幀】では、「(名)①書物を綴(と)じて表装すること。書物の表紙、見返し、とびらなどの体裁をつくり外形を整えること。また、その意匠。装本。②書画などを表装して、掛け物や額などに仕立てること。また、その意匠」の両義に、其々「緑蔭茗話(1890-91)〈内田魯庵〉」等3点と「草枕(1906)〈夏

目漱石〉八」の用例が付き、「語誌」(1)明治末期、装本の美術工芸的要素が強まるにつれ、“製本”にかわって装い釘(てい)じる意の中国風の熟字“装釘”が使われたのがはじまり(新村出『装釘か装幀』)。(2)“装幀”は書画を掛け物や額に仕立てること。“幀”は本来“とう(たう)”であるが、慣用によって当てる。(3)“装丁”という表記は、昭和三一年(一九五六)の国語審議会報告『同音の漢字による書きかえについて』で決められたものも付してある。中国語では「装訂」(亦同音・同声調 [zhuāngdìng] の「装釘」に作る)は単に頁や紙を書籍や冊子に綴じる事を言い、書画・書物の表装・装飾の意味は読み方も異なる「装幀」(zhuāngzhēn)で表す。『漢語大詞典』の【装訂】(「亦作“装釘”」の説明有り)の用例(3点)の初出は「清龍啓瑞《上梅伯言先生書》」で、著者の音韻・文字学者(1814~58)の「装釘」は内田魯庵の「装釘」より数十年も早い。和製漢語と認識した『日本国語大辞典』の用例は最古の「釘」の他3点とも「幀」に作るが、『広辞苑』の見出し語で唯一抜けた「装訂」の例も無い処に中国語との本質的な違いが有る。言偏(中国語=「言字旁」)の「訂」が主と為る中国では言説の重みは外見の比ではなく、言偏・金偏無しの和風熟字「装丁」が生れた数年後に言への軽視から書界で想定外の事態が起きた。

三好徹は『五人の棋士』第3章「八方破れ——藤沢秀行」の中で、第2期名人戦(旧)7番決勝第1局(1963.8.4~5)で藤沢名人が坂田栄男挑戦者に負け、翌日の『読売新聞』報道の「坂田まず一勝」の見出しを見て不快になつたらしい事に就いて、坂田が勝って当り前の1勝を取めた様な微細な含みニュアンスが藤沢の自尊心を傷付けたとした上で、「記事の見出しは、整理部員がつける。締切り間ぎわのあわただしい空気の中で、記事に適してかつ読者にうったえる見出しをつけるのは、かなりの難事である。新聞社でも、カケダシを整理部に配属しないのは、そのためである。/この場合、整理部員に、坂田が勝ってあたりまえという意識が潜在していた、とはわたしは思わない。/“坂田、先勝”/とつければ、ふつうである。/ただ、これではいかにも芸がない。味もソッケもない。誰にでもつけられる。その上、漢字ばかりで字数も少なく、見出しとしては、硬すぎるのだ。/スペースによるが、見出しは、七、八字で平かなまじりがいいのである。整理部員は、苦心して“まず一勝”としたにちがいない。/しかし、そのことによって、藤沢の感じたように、まずはとりあえず一つ勝っておけ、といったふうなニュアンスが滲み出てしまったことも確かであった」と推論している。³⁷⁶⁾「ニュアンス」(仏蘭西語 nuance)は「色・音・調子・意味・感情などの微細な差異。陰影。濃淡」(『広辞苑』)の意で、問題の見出しは最良の心算つもりが無くても坂田の次局以降乃至最終の勝利を前提にしている。坂田は61年の7冠獲得の余勢むかところで向う所敵無しの快調に乗り周囲の期待も自ずと高いので、漢字で固まる硬さを避ける為に捻り出した偏向的な表現は実情を踏まえた処も無くはない。秀行は広島市安芸あきの宮島みやじま・厳島神社いつくしまの鎮座1400周年(93)に「磊磊」の揮毫を奉納し、日本三景の1つと為る名勝の歴史に彩りを添えた2字は其の自画像ま・理想郷りやうきやうと言って可い。「磊落」の「気

が大きく朗らかで小事にこだわらないさま」(『広辞苑』)を絵に描いた様な彼は、雑誌の観戦記の不都合な内容が癪に障り秀行の差し金と邪推した坂田の過剰反応³⁷⁷⁾はしないが、今回は7桁の読者を擁する棋戦主催者の扱いであるだけに流石に看過せず電話で抗議した³⁷⁸⁾。対戦者の神経がピリピリする決勝の大変さへの理解の不足に起因した拙い「まず一勝」は、敗者の心に火を付け後の名勝負を導き最終局の結果に由って坂田奪冠の予言と為ったが、半ば紙面の装幀者とも言える整理部員の見た目を重んじる感覚が紛糾を惹起したのならば、「真・善・和」[理・礼・利]より美を優先する価値順位に誤算の根本的な要因が在ろう。

争碁に見る江戸～明治の抗争の血脈と大正～昭和の好戦の気風

同棋戦の総当り戦の最終局(7.5～6)で6勝1敗の坂田栄男九段は5勝1敗の呉清源を破り、挑戦手合7番番では第2局(8.14～15, 白番)も持碁勝ちし「所向無敵」の氣勢を呈した。初戦の1目負けに続いて最小差で先ず2敗(上記標題を振った諸諺語)を喫した敵手は、次の3連勝(8.23～24/9.2～3/同12～13, 13目/12目/2目勝ち)で名人の意地を見せた。先ず2勝の快調驀進から後1敗でお了いという絶体絶命の窮地に追い詰められた坂田は、精神の安定と闘志の維持の為に古碁を並べて先賢への追体験から心・技の調子を取り戻した。次の局(9.21～22)で必勝の気合から得意の三々の布石を止めて激戦を中押し勝ちで制し、悪手らしい悪手が殆ど見当たらない名局(立会人呉清源の評³⁷⁹⁾で得点を3-3に変えた。後1勝が出来ず相手の追い込みで自分も角番に立たされた方は逆により重い圧力が掛り(「角番」は『広辞苑』の当該項目の「①囲碁・将棋などで、何番勝負かを行ううちの、それで勝敗が決まるという局番」の意)、此の棋界の常識を実感できる頂上棋士の防衛者に焦りが生じたとしても不思議ではない。『広辞苑』の【追いつ追われつ】(=「優勢・劣勢の逆転をくり返すさま。“一の好試合”)」の用例は、正しく然様な甲乙を付け難い双方の対戦の交互に一進一退と為る展開を表する熟語である。中型辞書の収録項目を網羅するはずの『日本国語大辞典』には珍しく此は採られておらず、代りに「お・う【追・逐】」の内の『広辞苑』に無い成句【おっつ返(かえ)しつ】(語釈=「[“おいつかえしつ”の促音便形]肉薄した戦いで、たがいの軍兵が追ったりしりぞいたりするさま)。出典=「太平記[14C後]九・六波羅攻事)は、個々の対局中の彼我の丁丁発止の対決、虚虚実実の駆け引きや形勢の消長を形容できよう。関連の【おっつかつ】の「(形動) (“お[追]つつすが[絶]つつ”, または “おつかつ [乙甲]” の変化したものである)という」差が少なくほとんど程度が同じであるさま。①ほとんど同時であるさま。遅速の差がほとんどない様。②優劣がないさま。まさりおとりががないさま。同じ程度」の両義は、「咄本・近目貫(1773)宇治川」を初出用例の①は現代では廃れ、「吾輩は猫である(1905-06)〈夏目漱石〉一〇」が初出(同2点中)と為る②は、『広辞苑』の「(オツ [乙] かカツ [甲] の転か) 優劣のないこ

と。同じ程度であるさま。おつかつ。“両者一の力を持つ”に残っている。同じ「～つ～つ」形の「持ちつ持たれつ」は類書の記述との雷同を忌む業界の常識に反して、両辞書で漢字・仮名が同様の「互いに助けたり助けられたりするさま」と説明されている。表記の違いも無い一致は意味の単純さと共に成句に垣間見る日本社会の同質性を思わせるが、「世の中は一だ」という用例が物語る馴れ合いは碁界の「追いつ追われつ」とは相容れない。囲碁の「追いつ追われつ」は番碁の複数局や1局中の2桁～3桁目の着手の場合に限らず、棋士や国・地域・選手団乃至人類対人工^A智能や人工^A智能間の力関係の変動にも当て嵌る。柯潔に中国王者の座を奪われてから10ヶ月で5位に下がった時越の凋落は些か目に余るが、碁の進歩の法則に由って勝者・強豪・王国や妙手・好局・偉業は破られる為に在るのである。

「持ちつ^{もた}靠れつ」に当る中国人社会の原理は「互に依靠」（互いに靠れ合う）と言い、日本語に無い「互相」と日本で馴染の薄い「靠」が示す言語の懸隔^{ギャップ}とは別に発想が共通する。「おつかつつかつ」の現代的な意味は「不相上下」（上下〔優劣〕の相違が無い）で表せるが、中国語にも有り「互相」と反転・同義の「相互」の日本語の同音語「争碁」の競技では、互いに相手を頼りにする事は本質に反し対戦の決りで上下の差を付けなければならない。『日本国語大辞典』の「あらいご【争碁】」の語釈は「(名) 勝敗に重大な結果が賭けられている碁の対局。そうご」と為るが、「そう-ご」の項目は【壮語・荘語】【相互】【蒼梧】【瘦語】【聰悟】【霜後】【叢語】しか無い。『広辞苑』の同項目の「①重大な勝負をかける碁。拮抗^{きつこう}している相手との碁。②日本一の地位を争う碁」には、同じく未採録で由来不詳の和製漢語扱いの「争碁」の仮名表示も出ていない。『漢語大詞典』には【争碁】が有り（説明は「見“争棋”」「争棋」を見よ）、主項目の【争棋】の解釈は「亦作“争碁”。下棋争勝。」（亦「争碁」に作る。対局して勝ちを争う）で、「宋梅堯臣《雪中赴宿隣幾原甫》詩：“劉郎與江叟，相對定争碁。”宋陸游《春晚書懷》詩：“疏雨池塘魚避釣，曉鶯窗戶客争棋。”」という典拠が付く。日本語で重大な真剣勝負の意に転じた此の単語は現代中国で多くの雅趣と共に廃れたが、詩人梅堯臣の生誕（1002）の約千年後に囲碁の用語・固有名詞として日本から逆輸入された。『日本御城碁全集——囲碁史上最残酷の争棋』（杜維新編訳、成都時代出版社、2011）も1例であるが、原著の瀬越憲作・八幡恭助・渡邊英夫編『御城碁譜』（全10巻、御城碁譜整理配布委員会、1951）は、刊行60年後に中国語版（2巻の「精裝」[上製]本、611局収録、1243頁）が出て、日本棋史の固有名詞が主眼を為す題の次に此の新語を用いた強烈な副題が付けられている（和訳＝「囲碁史上最も残酷な争碁」）。「争碁に名局無し」という格言も「争棋無名局」の訳で中国棋界の言説に屢々登場するが、囲碁報道に熱心で「まず一勝」騒動も起した情報源から名棋士に由る日本語の用例を拾えば、『御城碁譜』出版の年に行われた対藤沢庫之助^{くらのみすけ}の1局に対する「昭和の棋聖」の言が有る。『読売新聞』2010年7月20日夕刊の「なるほど囲碁将棋」欄に其の寄稿連載が掲載され、「呉清源師の生涯一局 その五 4 2人とも見損じた開幕戦」と題する文（構成・牛力力）

に曰く、「私が打った“打ち込み十番碁”で、最も注目されたのがこの十番碁でしょう。/当時、2人しかいない九段の対決であり、読売新聞社は一面の社告で大々的に宣伝しました。契約が成立するまで2年。難関は持ち時間で、私は10時間を、藤沢庫之助さんは13時間を主張し、結局、私が全面譲歩して開幕しました。/以前、藤沢さんの定先で十番碁を打っているの、第2次といえますが、今回は互先の手合でした。/“実戦図”は終局直前、白4までで黒が一手足らず投了しました。ところが私も、藤沢さんも見損じていたのです。“参考図1”の黒1と直ちに攻め合いにいけば、“参考図2”の黒17まで一手寄せコウで、白に不利でした。/実は終局直後、記録係の塩入逸造四段に指摘され、2人ともがく然としたのですが、“参考図1”の黒7と中から詰めるのが妙手で、私たちはこれをAと取る手順で読んでいたのです。/もっとも“参考図2”の白12の時点で、残り時間は黒13分に対して白は6時間近く残していましたので、白はAと押して、まだ戦っていたでしょう。/注目の開幕戦だっただけに、“争碁に名局なし”の格言通り、期待に反したあっけない1局で、いろいろ取りざたされました。/私にとってみれば、運がついていた初戦だったといえましょう。」(実戦図と参考図1・2 = 本稿図34・35・36)

図34 第2次打込十番碁第1局 (1951.10.20~22), 藤沢庫之助(黒)vs. 呉清源, 91~94(図中1~4), 94手完, 白中押し勝ち

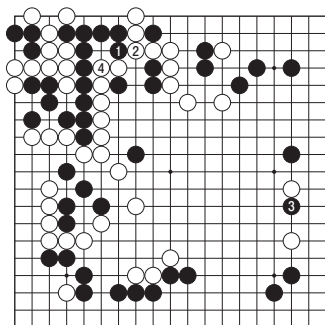


図35 図34に関する呉清源解説の参考図1

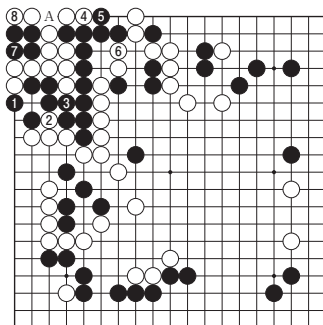


図36 図35と関連する参考図2 (図中14 = 13の右, 15 = 13の2路右, 17 = 13)

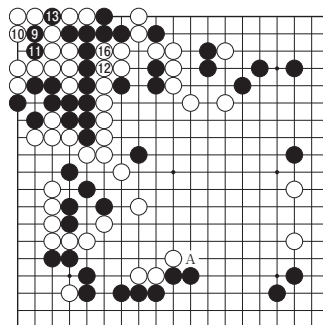


図34・35・36 出典 = 「呉清源師の生涯一局 その五 4 2人とも見じた開幕戦」(構成・牛力力), 『読売新聞』2010年7月20日夕刊。

『現代囲碁大系』第12巻『呉清源 下』の第6局として此の第2次打込碁第1局が有り、解説の題「昭和最大の争碁」と内の「1世紀の対局」の小見出しから棋史上の意義が分る。「呉と藤沢の勝負、全国のファンは期待し、呉と藤沢もまた、打つ気十分だったのである。二人は昭和二十三年、北海道の苫小牧駅でバッタリ出会ったことがある。/“やあ呉さん” “アッ藤沢

さん” /二人は奇遇に驚いた。藤沢は戦災で焼けた日本棋院再建の資金集めに苦小牧の製紙会社へ、呉の方は私用で厚賀まで行った帰りだった。藤沢がさそって、呉は製紙会社まで足をのばしたが、さすがは双方とも碁の虫。いつか二人で必ず十番碁を打ちましょう。そのときは一日打ち切り制がいいとか、ほくはそんな時間ではとても打てないから十三時間は欲しい、などと言いつつという。 /ところが二人が九段になってみると、ハタの方がうるさくなってきた。血を見ないでは済まないとか、武蔵と小次郎の対決など……こうしたことが、お互いに尊敬し合い、気心も知っていて、いつかはフェアプレーで打とう、と話しているような芸友の呉と藤沢の間をもみくちゃにしてしまったのである。 /おまけに、先に紹介した呉・橋本の第二次十番碁開始を告げる読売新聞の社告「囲碁ファン待望の的であった呉氏と藤沢庫之助九段との顔合わせは、呉氏がいつでも受けて立つ気構えでいるにもかかわらず、なぜか藤沢九段が打とうとしないため実現せず……」である。これが読売と藤沢の論戦の発端になった。 /確かに藤沢を刺激するに足る内容はあった。藤沢は共同通信社と、二十五年八月号の『棋道』に“私はいつでも立つ”と反論、翌九月号の『棋道』には読売の“いずれが非礼か”，藤沢の“非は読売にある”という両者の声明が掲載されたから、古いファンなら覚えておいでだろう。関西棋院の独立問題とともに、当時の世間を騒がせたものである。 /しかし、雨降って地固まる。時間はちょっとかかったが、呉・藤沢十番碁は日の目を見た。」³⁸⁰⁾ 藤沢庫之助は1949年6月9日(30)に日本棋院の大手合に由る昇段制度の下で初の九段と成り、呉清源は翌年2月22日(35)に橋本宇太郎・岩本薫との10番碁及び高段者総当り10番碁の好成績で九段に推挙されたが、上記解説の書き出しに出た両雄の邂逅は「**事實は小説より奇也**」という命題の通りである。松本清張の長篇推理小説(文藝春秋, 81)の題の様な「**十万分一の偶然**」が感じられるが、**日本と当時の世界の「碁都」**から遠く離れた北国で盤外活動中の双方の**意欲投合**(造語)は、**共通する強烈無比の「囲碁人根性」**(造語)を思えば10万%の必然性が有ると言つて可い。持ち時間で主張が岐れ呉の容認に由つて妥結した経緯は又**時間設定の大切さ**の例を為し、此の10番碁(51.10.20~52.7.4)を挟んだ第6・7期本因坊位挑戦手合と3重映しに為る。当時の同棋戦は10時間を基準としつつ対局者が希望すれば13時間まで延せる制度も有り、坂田栄男は橋本宇太郎の10時間の意向を呑んだ故に早見え合戦で一枚上手の相手に負けた、と考える高川格は次の挑戦で13時間を要請したが拒否され最後に11時間で譲歩した。³⁸¹⁾

後に「坂田まず一勝」の件で6歳年下の叔父藤沢秀行を怒らせた読売新聞社との対立から、**宮本武蔵・佐々木厳流の決闘**(1612.5.13)の類の活劇を見たがる**群衆心理**が感じ取れる。九州小倉の船島で両剣客が演じた激戦は後者の敗・死に終わったから刺激が強く喜ばれるが、**血が**進む様な一騎打ちを求める愛棋家の**渴望は棋士の飢渴精神を増幅させる働きも有る**。曾て日本棋院成立(1924.7.17)後10月25日に報知新聞社の呼び掛けで棋正社が結成され、**雁金準一**(45)・**鈴木為次郎**(41)・**高部道平**(42)・**加藤信**(32)4六段と**小野田千代太郎**(28)五

段が、各新聞社に提供する掲載用棋譜を抽選で決める棋院の方針への不服から反旗を翻した。5精鋭中の鈴木・加藤の棋院復帰後26年8月20日に残留組が棋院に公開挑戦状を発し、「名人秀哉氏とも自由なる対局を試みて、俱に与に大正棋壇の興隆に努力致」す旨を記し、「稍々前人未発の境地を窺ひ得たるやの自信を、強むるに至り」云々の豪語で挑発した。最高位者の権威と主流集団の実力を否定する様な喧嘩の売り方が思惑通り怒りを買ひ、双方の棋士が交代で出場する勝ち抜き形式の「日本棋院対棋正社敗退手合」が開催された。中山典之著『昭和囲碁風雲録』第3章「院社対抗戦」第1節「院社対抗戦の勃発」に拠ると、『読売新聞』の正力^{しょうりき}まつたろう^{まつたろう}社長が其の挑戦状を携えて棋院の大倉喜七郎副総裁を訪れた処、同紙は発行部数僅々5万部程の三流新聞で棋正社は放って置けば消滅すると見られた故に、棋院の生みの父である大倉財閥2代目総帥^{だんしやく}・男爵から「顔を洗って来い」と追い出された。「しかし、正力もまた一代の奇骨であった。“左様か。日本棋院が受けて立たぬと言うなら、それも結構だが、こちらにも覚悟がある。棋院はたった三人の棋正社を怖れて逃げたと宣伝するであろう”と捨てぜりふの一つも吐いたろうことは想像に難くない。その上に、正力には行動力があつた。秀哉名人に対しての実弾攻勢を、それも巨額な対局料を持ちかけたのである。/当初、秀哉は“敢然と受けて立つ”などという気分はなかつたろう。勝っても元々、負けたら名人の権威が地に墜ちる。相手は年少気鋭の雁金七段、雁金定先の手合割でもあり、年長者の秀哉が負ける公算は大きいのである。しかしながら秀哉は結局正力の提案に乗った。大倉も秀哉が打つと言ひ出したのではしかたがない、いやいやながら承認し、歴史に残る大争碁が行われたというのが実情だった。/この時の秀哉の出演料は明らかにされてはいない。しかし、秀哉敗北の時の保険として、その家族の一生、及び門弟の一生の面倒を見るに足る巨額なものだったことは確かだとされる。/正力としても一代の大バクチだったろう。しかし結果は大成功だった。秀哉・雁金局が世紀の大乱戦となり、新聞発行部数が一挙に三倍にもなり、一流紙の仲間入りが出来たからである。」³⁸²⁾ 24年後の藤沢庫之助に対する脅迫じみた揺さ振りも奏功体験の複製の様に思われるが、秀哉—雁金戦の棋譜・観戦記連載中に毎朝郵便箱を開ける愛棋家が待ち遠しかった状況³⁸³⁾は、江戸～明治の碁界の抗争の血脈を継いだ大正～昭和の好戦的な気風を現すものである。『囲碁百科辞典〔改訂増補〕』の第1部分「囲碁用語・術語辞典」中の「あらいご 争い碁」は、語釈が無く只「囲碁史辞典参照」の指示が有る。其の名称と齟齬^{そご}が有る第5部分「歴史辞典」に在る「争碁 ソウゴ」は下記の様に、専ら特定の時代に限定した固有名詞と為るが**囲碁王国の形成と強盛の秘密**を物語っている。

最初の争碁は幕府の命により碁所を賭して、2世本因坊算悦と2世安井算知の間で行われた。これは正保2年(1645)の御城碁を第1回とし承応2年(1653)まで9年の間に互先6局を打ったが、互いに得番勝で打分けとなり、碁所の決定をみるにいたらなかった。

寛文8年(1668)にいたり安井算知は種々運動の結果名人碁所に就任したが、これに対して3世本因坊道悦が異議を唱えて争碁を申込んだ。理由は、算悦死後道悦家督を継ぎ以来11年間御城碁において算知と1回も手合をしないということである。このとき寺社奉行より、公儀の決定した碁所に争碁を願出ること自体不都合である上、負ければ遠島処分であろうと、脅かされたが、道悦は断固としてあとへ引かなかったという。これは寛文8年より、道悦の先、一年20番の割で60番打つことで始まり延宝3年(1675)まで20番打ったところで中止となった。結果は16番まで道悦9勝3敗4ジゴで6番勝越し、17番目より手合を先相先に直し、先番3局全勝、白番1局1敗の成績であった。この結果算知は翌延宝4年碁所だけ返上、名人として仕出し、道悦は4世本因坊道策の後見として名人格で仕出し、貞享3年(1686)退隠した。

宝永2年(1705)から翌3年にかけて4世安井仙角対5世本因坊道知の互先の手合をめぐる争碁が行われる。仙角対道知は元禄16年(1703)の御城碁で初めて戦った。当時道知14才、定先で勝った。ついで宝永2年の御城碁のとき、道知の後見准名人4世井上因碩は仙角に対して、道知の技倆の進歩が著しいゆえ互先の手合で打ってくれるよう頼んだ。しかし仙角は不承知。前に一度定先を敗れただけで手合直りは前例がないという。お互いにゆずらず、書面は以って公儀に訴えることになった。その結果一段進めて道知先互先で打つようにとの沙汰があり、その下打ちが同年11月24日大橋宗桂宅で行われた。結果は道知先番1目勝、仙角が3度も作り直したといわれる碁である。つづいて因碩は翌25日道知の名をもって番数碁を申込み寺社奉行の許可を得た。第1局道知先番15目勝、第2局道知白番3目勝となり、仙角のほうから争碁の願下げを申し出て取止めとなった。

元文4年(1739)7世本因坊秀伯は上手に進むことを望んで5世安井春哲仙角の同意を得たが、5世林因長門入、6世井上春碩因碩の反対にあったので、門入に対して古例により一年20番の争碁を願出た。ところが門入が病気を理由にこれを避けたので、かわりに春碩因碩が戦うことになった。同年10月より翌5年6月まで、秀伯先互先の手合で8局打ったところで秀伯が吐血して中止。

結果は秀伯3勝2敗1ジゴ。翌6年2月これがもとで病歿した。

明和3年(1766)にいたり、久々に名人碁所をめぐる9世本因坊察元と6世井上春碩因碩との間に激しい争いが行われた。この年5月察元は名人碁所を望んで8世林祐元門入を添願人とし、因碩に交渉したが、2、3年後にするよう反対された。それでは争碁をと強硬に談判したので因碩は5世安井春哲仙角に相談した。仙角も察元の強引主義に不賛成で反対側に立ったので、7月14日察元は次のごとき名人昇級の願書を寺社奉行に提出、因碩と20番の争碁を願出た。

乍恐奉願口上の覚

当五月七日井上因碩へ私より林門入を以て此節私手合進度候間相願呉候様申達候処、因碩申候は先一兩年も相待候様、彼是申免角承引不仕候。依之家業為奨励先例の通二十番の勝負碁被仰付下置候様奉願候。以上。

明和三戌年七月

本因坊

囲碁の「酷」と人智の「魔」——究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能^I4強の特質・行方(3)(夏剛・夏冰)

これに対して老中詮議の結果、11月8日争碁20番が命じられ、同月17日の御城碁において第1局を打つことにきまった。手合は去年の御城碁で察元黒番であったから本年は白番ということになるが、因碩は争碁は本年から始まるのであるから改めてにぎり、丁半で決めるべきであると主張した。一悶着の末くじ抽きにより、因碩が勝って丁半で決め、その結果因碩黒番となった。この旨届出たところ本年因碩の黒番は当然であって、丁半不要と沙汰があった。第1局ジゴ、第2局から第6局まで察元5連勝(黒番3勝白番2勝)したところで手合直しを要求したが、因碩は古来手合直しは6番勝越でなければならないとして、算知道悦の争碁、道策の安井家子弟にたいする手合直しの例をあげて反対した。それに対して察元は6番勝越は多くの番数中において打ち込んだときであり、連勝のときは4番で手合変更すべきであるとして道的昇級の例および道知仙角の争碁を引用して対抗、一方願書を寺社奉行に差出し、名人昇級を願出た。

結局察元の実力は認められて、明和4年9月12日名人を許可されたが、碁所は同7年6月まで就任できなかった。

以後碁所をめぐる本因坊丈和、幻庵因碩の抗争が文化文政の頃あったが、争碁は打たれていない。また林元美が丈和に対して争碁を願出たが、実現しないうちに丈和の碁所退隠となった。このとき11世井上幻庵因碩が好機逸すべからずと、ただちに名人碁所の願書を提出、それに対して13世本因坊丈策は跡目秀和を以って争碁を願出た。

天保11年(1840)11月29日幻庵因碩对本因坊秀和の争碁20番の第1局が寺社奉行稲葉丹後守役宅で打たれた。同日31手打ち掛け、翌30日打次ぎ45手、12月1日71手、翌2日91手、同3日99手、4日より8日まで因碩病気のため延期し、9日105手、10日117手、11日再び因碩病気欠席、12日より徹夜で13日巳の刻(午前10時頃)に終り秀和先番4目勝となった。因碩はこの一局で争碁を断念し願下げたといわれる。しかもこの後、御好碁2局、御城碁1局(いずれも秀和先番)を打って連敗し、名人碁所の望みはついていた。

以上江戸時代の争碁の歴史は幻庵因碩对本因坊秀和の局をもって最後とし、以後は本因坊秀哉対二代中川亀三郎、また秀哉対雁金準一の院社対抗戦などが挙げられる。

『現代囲碁大系』第1巻『明治・大正名棋家集一』(解説= 榊原章二・福田正義・中川新之・岩本薫・中村勇太郎、執筆=藤井正義、1981)所収の5棋士・35局中、「本因坊秀哉」の部の第1局「院社対抗敗退手合 第一局/大正十五年九月二十七日~十月十八日 東京・読売新聞社/持時間各十六時間/名人 本因坊秀哉/先 七段 雁金準一」が巻頭を飾っている。「黄金期の碁界」と題する榊原九段の解説の冒頭に曰く、「秀哉を語ることは、明治、大正、昭和三代の碁界を語ることになるが、生涯の一局を選ぶとすればこの碁であろう。」³⁸⁴⁾ 算砂・道碩を初めとする古典名棋士の打碁集『日本囲碁大系』(全18巻、総編集=林裕、監修=岩本薫・橋本宇太郎・木谷実・呉清源・高川格・坂田栄男、筑摩書房、75~77)では、其の旧・新時代に跨る位置付け

と符合して最後の巻が『秀哉』（解説＝榊原章二，執筆＝田中道宏^{たなかみちひろ}，77）である。シリーズに収録された28人の対局は何れも最初に代表作を為す「生涯の一局」が置いてあり，其々の人・碁を最も体現する1点は『囲碁天地』2009年第1期～10年第20期に連載され（訳＝蘇甦二段/孫志剛三段），江戸～昭和初頭の名手たちの魅力や碁界の風雲に触れる企画は中国の愛棋家の歓迎を受け，終了を惜しむ読者に対して編集部は家元制終焉後の現代日本棋史の体系的な紹介を約束した³⁸⁵）。本巻の第1～26局の最後は川端康成が観戦記・小説を書いた対木谷實の引退碁であり，第25局は『昭和囲碁風雲録』第8章「史上第一の名局——本因坊秀哉対呉清源」で焦点が当てられた「日本対中国，国際試合」³⁸⁶（1933.10.16から13回打ち掛け，34.1.29終）であるが，明治15局・大正9局に次ぐ昭和の2局でなく院社初戦の対雁金局を選んだのは興味深い。第1局は時系列順に沿わず大正9年の雁金六段との「十五年ぶりの対局」（解説の題）で，碁界復帰の相手（先）に中押し勝ちした此の1戦（20.5.21～11.28，19回打ち掛け）も，本因坊秀栄病没（07）後の後継問題で確執が表立^{おもてだ}った2人の宿敵の激突が見所である。序の題「不敗の名人」とは裏腹に本因坊時代の14局（含「生涯の一局」）中3敗・2持碁が有るが，巻頭の目玉は「勝敗は別として，まさに力のこもった古今の名局」とされている³⁸⁷）。『現代囲碁大系』第1巻の第1譜（1～11）解説「平凡にスタート」では「平凡な布石」に就いて，白2は「秀策流」布石を避ける為の趣向で，秀哉は必勝を期した此處一番の碁（引退碁等）では此の小目を打っている；黒3の締り・5の高目は雁金の趣向であると述べた。³⁸⁸ 此處に『日本囲碁大系』第18巻の同局第1～3譜（1～12，13～23，23～42，解説題＝「宿命の対決」「手広い打ち方」「雄大な構想」）を図37で纏めて掲げ，「秀策流」の例として呉清源・本因坊秀格打込10番碁第1局（55.7.19～20）の同手数局面（図38）を挙げよう。古流の1・3・5で始めた呉は『現代囲碁大系・呉清源 下』の解説題「切り札登場」の通り，此の頃から黒7の上突けを好んで打ち此の定石を選んだ碁は殆ど勝っていると自ら語った³⁸⁹。「先番無敵」と言われていた呉はどんな定石を打っても殆ど勝っていると附言も有るが，「現代碁特有のゆるまぬ打ち方で古い碁には見られない」と言う11・13の2段撥ね³⁹⁰と共に，不敗の優位を築く意志が現れ能く2段撥ねで敵を封じるAlphaGoの高圧的な姿勢と重なる（件の用語は『日本国語大辞典』の「にだん-ばね【二段綽】」の項で「〔名〕囲碁で，ハネて相手がハネ返してきたときさらにハネる手」と解説され，「ハネ」は「はね【跳・撥・芻】」の「■〔名〕（動詞“はねる〔跳〕”の連用形の名詞化）」の内の「⑧〔綽〕囲碁で，双方の石が接触しているとき，相手の進路を止める形で自分の石から一つ斜めに打つ手段」に当る）。雁金・秀哉の「趣向」は『広辞苑』の「①おもむきを出すための工夫。また，そのおもむき」の意（②は略す）で，語釈中の鍵詞は「おも-むき【趣】」の「④しみじみとしたあじわい。おもしろみ」に当る。「一のある庭」の用例が付く④に対して「①心の動く方向。心の動き。心のあり方」が由緒正しく（出典＝源氏若菜上「人の心の，とあるさまかかると見るに」）が，「③物事のなりゆき。事情。

囲碁の「酷」と人智の「魔」—— 究極の頭脳競技の原理と中・韓・日・人工^A智能4強の特質・行方 (3) (夏剛・夏冰)

ようす。保元物語“合戦の一はからひ申せ”も別種の趣おもむきを持つ(⑤は略す)。**【趣向】**の用例「一を凝こらす」の出典は「太平記—“句の優美遠長たる体制ていしのみあつて、其の一落着の所を知り難し」と為り、応安～永和(1368～75/75～79)の頃までに成った軍記物語の中で形容した文章の雅致は、1世紀前の同じ種別ジャンルの『保元物語』で用いた合戦の趨勢と並べ面白い(中国語=「有趣」)が、此の対戦の趣向も「趣」の「走・取」の字形を体現する様に「取りに行く」方へと展開した(中国語では「走」は「歩く」「行く」意、「趣」は「取」「趨」と同音のqu)。

図 37 社院対抗戦(1926.9.27～28, 10.7～8・12・18), 雁金準一(先)vs. 本因坊秀哉, 1～42, 254手完, 黒時間切れ負け

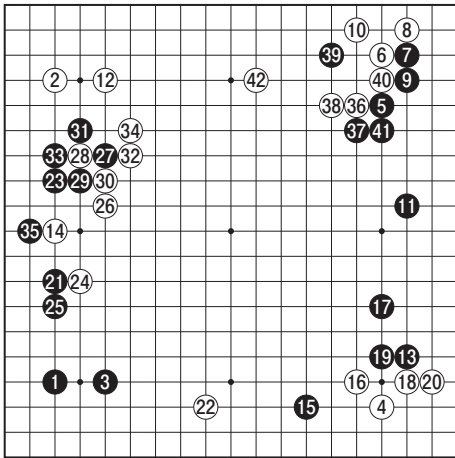


図 38 打込10番碁第1局(1955.7.19～20), 呉清源(黒)vs. 本因坊秀格, 1～42, 263手完, 黒3目勝ち

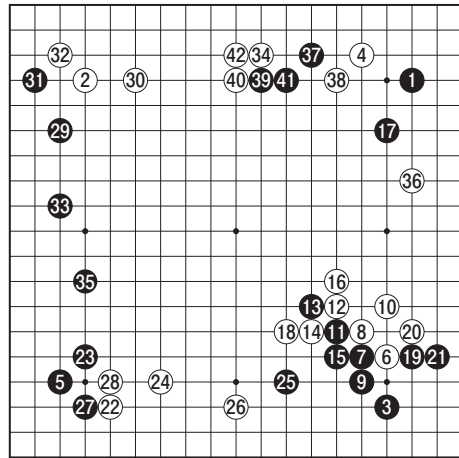


図 37 出典 = 『日本囲碁大系』18巻『秀哉』, 15・16・18頁。図 38 出典 = 『現代囲碁大系』第12巻『呉清源 下』, 135・137～139頁。

「鷹 vs. 鳩」「熱戦→冷戦」の両極と「清し・澄み・冴え」の底流

「不敗の名人」といわれた二十一世本因坊秀哉名人の遺譜の中で、名局は数多いが、生涯の一局をえらぶとすれば、やはり院社対抗戦の劈頭の、対雁金準一七段戦を当てるのが、至当であろう。³⁹¹『日本囲碁大系』第18巻『秀哉』の開巻局の解説の冒頭に出た「劈頭」は『広辞苑』で、「(“劈”は裂ける意) まっさき。事の一番はじめ。“会の一から荒れる”“開巻一”と説明・例示されている。『日本国語大辞典』の語釈は「(名) 事のはじめ。まっさき。最初」と為り、用例2点(初出 = 「棒三昧 [1895]〈正岡子規〉“彼の所説を雑誌の劈頭に掲げて以て雑誌の榮となすに至りては”」)は何れも名詞の用法であるが、漢籍典拠の「水滸伝—四四回“那大漢大怒, 焦燥起来, 将張保-, 劈頭只一提, 一交擲翻在地”」の場合は、動詞を修飾する

副詞と為り憤怒の打撲の狂猛な勢いを表す点に中国らしさが見られる。中国語では副詞として日本語と同じ意の他「迎面」（正面から向って）の類義語でもあるが、中国語の「劈」は「（人の頭・胸を目掛けて）真正面から向う」の他、「刀・斧等で（人/木等を）斬る/伐る」「雷撃で（物/人等を）壊す/死なす」等の語義も有る。日本語と同義の場合に限って字形に「刀」を含まない「辟頭」にも作るが、日本語に無い単語や使い方には切り込む・斬殺・凄い剣幕を表現する物騒・殺伐な意が多い。「劈」の「辟・刀」の字形の刀で切り辟く形象は連笑の「網名」「大刀向前衝」を連想させ、大刀を揮って前へ突撃して行くという勇猛な意味は「笑みを絶やさず」意の微笑ましい氏名や、華奢な体付き・照れ屋の風貌の「文弱」な外見とは逆の「武強」（造語）の内面を現している。同じ少壮層の時越・半昱廷と並ぶ力戦派の彼は可く劈頭から大石を仕留める「屠龍」を狙い、大石を「大龍」と言う中国語の発想で動物に見立てるなら彼等は「鷹派」に分類できよう。此の言葉は『日本国語大辞典』で「(名) (英 the hawks の訳語) 自分の政治理念や政治的主張を貫くために、相手方と妥協せずに、事態に強硬に対処しようとする立場に立つ人々。また、武力解決を肯定する強硬派をいう。↔鳩派」と説明され、用例に「夢の浮橋（1970）〈倉橋由美子〉中秋無月“相当なタカ派になったつもりでいますから、トインビーあたりでも軟弱すぎてお気に召さないかもしれませんよ”」が挙げられた。親子2代に亘る夫婦交換・近親相姦を描いた此の禁断の性愛小説は政治・武力と全く無縁で、『源氏物語』第54帖「夢浮橋」に因んだ典雅な異色作からの採録は純文学に拘る所以か。『現代漢語詞典』の同項目は「(指)主張激進、強硬的手段処理政治、外交等問題的派別（跟“鳩派”相对）：～人物（(指)過激・強硬な手段で政治・外交等の問題を処理しよう主張する派別〔「鳩派」に対して言う〕。「一人物」）と為り、『日本国語大辞典』の唯一の用例が初期的な登場なら中国に於ける出現は早いはずである。『広辞苑』の「自分の理念・主張を貫くために、相手と妥協せず、強硬に対処していく人々。また、武力をもってしても主張を達しようとする人々。↔鳩派」は、個人の信念を前面に出す点で政治・外交に軸を置く中国語の概念とは更に隔たっているが、困碁の有り形は人生・政治・外交の特質と通じるから「鷹派・鳩派」の比喻が持ち込める。

『広辞苑』の【鳩派】の「強硬手段をとらず、相手と協調しつつ事を収めようとする立場をとる人々」に対して、『日本国語大辞典』の「(名) (英 the doves の訳語) 自分の理念・主張を強力に貫くことより、相手側と妥協し、穏健に事態に対処しようとする立場に立った人々。また、政策の実施にあたり、武力の行使をしようとする人々に反対する人々。↔鷹派」は語源を紹介しているが、用例が無く【鷹派】との整合性に欠き使用歴も和製漢語か否かは不明の儘と為る。『現代漢語詞典』の【鳩派】の「(指)主張以温和、開明的手段処理政治、外交等問題的派別（跟“鷹派”相对）」(指)温和・開明な手段で政治・外交等の問題を処理しよう主張する派別（「鷹派」に対して言う）は、「開明」（語釈・用例＝「(指)原指從野蛮進化到文明，後

来指人思想開通, 不頑固保守: ~人士」[形元は野蛮から文明に進化した事を指し, 後に転じて, 人の思想が開け, 頑固・保守的でないことを指す。「開明な人士」]が示す様に, 【鷹派】の「過激・強硬」の中性的な語感と違って完全に肯定的な意味である。『日本国語大辞典』の【開明】の「(名) ①知識が開けて, 文物が進歩すること。文明開化。また, 知識が開け, 物事がよくわかること。聡明なこと。②知識などを開き, 不明な点を明らかにすること。③日が出る所。④獣の名。天獣という」は, 仏教語由来で他動詞的な③を除いて全て漢籍典拠が有るが今や①の意味しか使われない。『広辞苑』の「人知開け, 文化の進歩すること。文明開化。また, 知識に明るく聡明なさま」は, 人知→人工^A智能^Iの進化の文脈で「^{コンピュータ}電脳」石田^{クレバー}芳夫の聡明さやAlphaGoの開けた・明るい感じを連想させる。『現代漢語詞典』の【鵠】の項を結ぶ「常用作和平的象徴」(平和の象徴に用いる事が多い)と, 『広辞苑』『日本国語大辞典』の「はと【鳩・鵠】」の説明中の「平和の象徴と/ともされる」から, 両国乃至「地球村」の広範囲で共通する鳩派の^{イメージ}良さの根源的な理由を解釈できよう。鷹は『広辞苑』の記述には「姿に威厳があり, 古来尊重され, また鷹狩に使った」と有り, 『日本国語大辞典』では「古来, 姿に威厳のある鳥とされ, また, 鷹狩に用いられた」と為るが, 『現代漢語詞典』では後者と同様「尊重」は無く『広辞苑』に無い「^{たかいぬ}猛獣」の属性が記してある。日本語の「鷹犬」(『広辞苑』の項=「鷹狩に用いる犬。藤原隆祐朝臣集“帰さの道より一を乞ひ侍るとて”)と違って, 中国の「鷹犬」は『現代漢語詞典』の【鷹】の中【鷹派】に次ぐ子見出し語の定義の通り, 「^打打獵所用的鷹和狗, 比喻受驅使, 做爪牙的人」(打獵に用いる鷹と犬, 驅使され他人の手先と為る人を喩える)の意で, 中国語由来の「走狗」(『広辞苑』の項=「①狩獵などで駆け走って人のためにおいつかわれる狗。②転じて, 他人の手先となって使役される人を輕蔑するという語。“権力の一”)と同列の貶し詞である。字面で^{わしばな}鷲鼻・^{よう}鵠(鷹より小形の鷹科の猛獣)の眼の意と為る四字熟語「鷲鼻鵠眼」の語積も, 鷹の姿の威厳への敬意が無く「形容奸詐凶狠の人」(奸詐・凶狠の人を形容する)と言い, 5つの子見出し語中此と【鷹犬】の間の【鷹派】は自ずと粗野・凶暴の印象が付き纏う。

『広辞苑』『日本国語大辞典』の【鷲鼻】【鵠鼻】には負の^{イメージ}形象を匂わす文言が無いので, 日本語に無い「鵠眼」の通常の音読の語呂合せで言えば其の捉え方は^そ容顔^{ようがん}偏見であろうが, 『日本国語大辞典』の【三白眼】の語積中の断定調の「凶相とする」も似た様な嫌いが有る。同辞書の【凶相】は「(名) 占いで, 形から判断した悪い運。不運な相。悪い相」の1義で, 「中右記-天永三年(1112)六月一日」の用例のみを掲げた此の和製漢語は, 『広辞苑』では「①占いで, 悪いことが起こりそうな運勢。②悪い人相。凶悪の相」の両義と為る。『現代漢語詞典』では「^凶凶悪的面目; 凶悪の相貌」(凶暴な顔付き。凶悪な容貌)しか無く, 用例の「~畢露|一臉~」(「凶悪さが^{あらわ}露になる」「凶暴さが満面に漲る」)は悪い人相の多さを感じさせる。『漢語大詞典』の項(語釈=「凶悪的面目」)の用例(2点)の初出は魯迅『吶喊・狂人日記』で,

此の短篇小説（1918）は中国の現代文学の第一声なので世相・時代の険悪さを印象付ける。上記【鷹鼻鶴眼】の説明中の2つの形容詞は前者が『広辞苑』に有る（【奸詐・姦詐】＝「いつわり。わるだくみ」）が、後者は『日本国語大辞典』にしか見当たらない。【凶狠】の語釈は「《名》（形動）悪くよこしまなこと。悪くねじけていること。また、そのさま」で、「駿台雑話」[1732] 二・風俗は政の田地」の用例以外に漢籍典拠が無いのは疑問符が付く。『漢語大詞典』の【兇狠】の①「凶惡狠毒」（凶惡・残忍）・「亦指凶惡狠毒的人」（亦凶惡・残忍な人を指す）には、其々『隋書・越王楊侗伝』～魯迅『呐喊・狂人日記』の3点と『唐杜牧『郡齋獨酌』詩』の用例が有り、②「猶凶猛」（「凶猛」に同じ）にも「《水滸伝》第一〇五回」等2点が挙げられている。【兇】の簡体字【凶】の内の同音・同声調（xiōnghěn）の子見出し語【凶狠】（説明＝「凶惡狠毒」）も、「宋無名氏《開河記》：“寧陵下馬村民陶郎兒，家中巨富，兄弟皆凶狠。”」という典拠が付くが、現代では動物的な本能の濃厚化を映して「反犬旁/犬猶」（獸偏）の「狠」を使う方が残り、人間性の衰退化を象徴するかの様に「双人旁/双立人」（行人偏）の「很」を含む方が廃れた。『日本国語大辞典』の「こん（字音語素）1 良の類」の7項目中【狠】も入っており、「①心がねじけていること。もとる。“很”に同じ。/狠忤、狠復、狠戾、狠恣/②はなはだ。/狠好/」の義・例が挙げられている。同じ漢音の記号が有る【很】は「①命令に従わない。もとる。“狠”に同じ。/很忤、很復、很戾、很恣/猜很/②無道な。凶惡な。/很心」であるが、現代中国語では「很」は「とても」の意で「無道な。凶惡な」の意の「狠」とは混用しない。【奸詐・姦詐】の上の行に有る【頑狠・頑很】（語釈＝「《名》かたくなで心がねじけていること」）は、漢籍典拠「明史－雲南土司伝一・澂江」でも用例「東京開化繁昌誌（1874）〈萩原乙彦〉初・下・馬車並に人力車」でも「狠」を用いたのに、見出し語では中国人にとって違和感が強く日本人にも馴染みの無い「很」と併用している。同じく『広辞苑』に無い【狠毒】は「《名》（形動）性質がねじけて害意があること。また、そのさま」の意で、用例「日蓮上人（1894）〈幸田露伴〉二〇“想ふに著者は狠毒（コンドク）なる想像家にして少くも狠毒（コンドク）の点に於ては我が邦の一切の文客にも勝れたる想像家なるべし”」の後に、「[補注]『小説粹言－四』に“這處婆使—這般的狠毒（〈注〉ヒドクムゴキ）見識—”とある」が付いている。此の類の親字「良」（慣用音「ごん」の方が主項目）は『易経』の八卦の1つで、丑寅（鬼門に当る北東）の方位に配して山に象り静止の徳を表すのであるが、酷く惨き「狠」や朝鮮文化に濃厚な「恨」の派生は東北亜細亜の矛盾の象徴の様に思える。現代日本語では7項目中【良】【恨】【根】【痕】が生きている反面、【很】【狠】【跟】（＝「①かかと。きびす。/跟肘、跟腱/②あとにしたがう。/跟従、跟随/」）が消えた。踵を返して中国語への「跟従」（追隨）を止め中国的な誇張を抑え「毒」を消す結果と言えるが、「狠」と字・意が近く「狼」は中国語で「郎」と同音・同声調（láng）だけに吟味が要る。

『広辞苑』の「からす【烏・鴉】」の「古来、熊野の神の使いとして知られ、また、その鳴き

声は不吉なものとされる」は、『日本国語大辞典』の【三白眼】の「凶相とする」の**全否定の裁断より柔らかい**感じがする。後者の同項①は「知能は高く鳥類中最も進化した類とされる」等と肯定的な記述しか無く、最後の用例「日蓮遺文－開目抄(1272)“鳥は年中の吉凶をしれり、過去に陰陽師なりゆへ”」も凶の存在とする含みが無い。語誌の「(1)『古事記－中』に、神武東征の際に先導をする八咫鳥(やたがらす)が見え、『日本書紀』以下の史書に、赤鳥・白鳥などの色変わりの鳥が瑞鳥とされたことが見られる。また、②のように熊野権現の牛王の神符に凶案化された鳥が見られたなど、古来、神の・霊的な存在とされてきた。しかし、①に挙げた『万葉一一四・三五二一』東歌で“おほをぞどり”(をぞ=軽率の意、おおあわてものの鳥)と呼ばれたり、『枕草子』に“にくきもの”として挙げられたりする例もある」と悪評も併記されたが、「(2) 鳴き声は、挙例の『東歌』に見られるように、ふるく“コロク”と聞きなされたこともあるが、『枕草子－九七・あさましきもの』には“カカと啼く”とあり、また、中世には“ココカカ〔虎明本狂言・花子〕などの形もある。現代一般的な“カアカア”は、『新ばん浮世絵尽』[18C前]に、“かあかあすこし水をくれぬ”となり、江戸時代から見られるものである)」は、『広辞苑』に記された不吉説の言い伝えとは対照的に鳴き声の表記の客観的な紹介に止まる。『現代漢語詞典』の【烏¹(烏)】の「①烏鴉。②羽黒色。③(Wū) 凶姓(姓氏の1つを表す③に括弧付きで発音表記が付されるのは、固有名詞につき冒頭で大文字と為る故)の①が「烏・鴉」で、用例の「月落～啼(月落ち烏啼く)には鳥の鳴き声を不吉と受け止める様な印象が無い。尤も鳴き声にも吉凶にも触れていない【烏鴉】の次の【烏鴉嘴(嘴=嘴, 口)の項は、〔凶指説不吉利的話的嘴或人〕(凶不吉なことを言う口或いは人を指す)の意味である。『広辞苑』の多義中「③(烏に似た点があるところから)㊦口のうるさい人。④物忘れをする人。㊧意地のきたない人。㊨土地から土地へと渡り歩いている人」が有り、該当する『日本国語大辞典』の「④性質や行動が①と似ているもの」の中で記述が可也^{かなり}違うのは、最初の「④声高いうるさく言いたてる人。口やかましい人」と、最後の「㊨あたりをうろついている人。また、そのためにその土地や道などにくわしい人。“旅がらす”“阿波座がらす”など」である。「煩い/五月蠅い」「喧しい」「意地が汚い」は「憎き/悪き物」「浅ましき物」と通じるが、【烏鴉嘴】の例文「閉上你這張～。(縁起でもないことを言うお前の其の口を閉じなさい)は、鳥の鳴き声を忌む日本の常識と通底し其の「鳥型」人間(造語)への嫌悪を表している。[明末・清初]羅貫中著長篇小説『三国志通俗演義』第48回「宴長江曹操賦詩 鎖戦船北軍用武(長江に宴して曹操詩を賦し/戦船を鎖いで北軍武を用う)の中で、呉軍との赤壁会戦(208)の前に彼の魏軍総帥が鳥の鳴き声に触発され感興の詩を作った処、宴席に出た揚州刺史(地方長官)劉馥から何故斯様に不吉な言を出したのかと質された³⁹²⁾ので、**神の・霊的な瑞鳥と見る古の伝統も無い中国に於ける烏嫌い及び言霊観念の強さが窺える。**

「月落烏啼霜滿天，江楓漁火對愁眠。姑蘇城外寒山寺，夜半鐘聲到客船。」(月落ち烏啼いて

霜天に満つ、江楓漁火愁眠に對す。姑蘇城外の寒山寺、夜半の鐘聲客船に到る。『唐詩三百首』に収録された張繼の此の七言絶句「楓橋夜泊」に関して、日本語版（全3巻、平凡社、1973～75）の訳注者目加田誠は解説で次の様に述べている。「この詩は古来わが国でもよく知られているものであるが、蘇州寒山寺にある清の俞曲園（樾）の書いた碑によると、詩中の江楓の二字は、宋の龔明の『中興紀聞』には、江村となっているという。/又この詩について、わが国の謡曲（三井寺、道成寺）にも亦この句を引いて、やはり江村となっている。なるほど江楓では意味が分かりにくく、江村の漁火ならばきわめて穏当である。鳥が啼くのは夜明けであるのに夜半とはおかしい、とか、寺の鐘が夜半になる道理がないとか、いろいろ理屈をいって、“月は鳥啼に落ち”とよんで、鳥啼を山の名としたり、夜半鐘を一つの名詞としたりする注もあった。しかし、現にこの詩にこう詠われているのだから、このままに解すべきで、楓橋に舟を泊した夜の旅寝の憂さに、うつつともなく、夢ともつかぬ境地を巧みに歌ったものと見るべきであろう。」³⁹³ 曾て文芸評論家小林秀雄は『文藝春秋』特派の従軍記者として日本占領下の現地を訪ねて、随想「蘇州」（同誌38年6月号）の中で郊外の楓橋鎮に在る寒山寺の「殺風景」を貶した。「昨年の大晦日は、川端さんや島木君と一緒に、伊豆の温泉宿にいた。ぐっすり寝ようと、早くから床についたが、日本中の寺の除夜の鐘を聞かしてやるとかいう放送で、階下のホールが鳴り渡り、寝つかれず、腹を立てつつ仕方なく聞いていると、なかに寒山寺の鐘というのがあった。来てみると成る程ある。ここであの時マイクを持った男は、さぞ知らぬが仏と思っただろう。」³⁹⁴ 仏殿の中は宛ら石摺り工場と為例の張繼の詩を刻んだ碑の処で職人は拓本を作っており、「何々部隊百枚、何々部隊二百枚と注文が殺到している」から「恐らく嘗て知らぬ多忙」が推測された³⁹⁵。道理が無いと思われた寺の鐘が夜半に鳴る事は前年12月の蘇州落城に由って現実と為り、日本の放送で寒山寺が領内の一部の様に組み込まれたのは張繼の詩の知名度の証でもある。其の大晦日に一緒だった川端康成は38年6月から秀哉名人引退碁の観戦記を担当したが、政府が戦争の影響で同月に40年東京五輪開催の中止を決定し翌月に返上した状況の中で、戦乱の激動と重なる名人引退碁は日本棋史の転換点と昭和10年代の一大見せ場を為した。蘇州を攻略した占領軍の拓本特需の大量発生も日本に於ける「楓橋夜泊」の馴染度と共に、日清・日露戦争の勝因の1つに挙げられた敵を遥かに上回る将兵の識字率の高さ³⁹⁶が実感できる。文化の無い軍隊は魯鈍な軍隊であり、魯鈍な軍隊は敵に勝てないと毛沢東は抗日戦争の終盤に言った（「文化戦線の統一一戦線」[文化活動に於ける統一一戦線]、44.10.31）が、上記の島木健作（本名＝朝倉菊雄、転向文学の代表的な小説家）死去（享年41）の3日前、日本は国民識字率が約2割の中国を含む4大国（他に米・英・ソ）の降伏勧告を受諾した。

新潮社刊『小林秀雄全作品』（全28巻＋別巻4、2002～05）『10 中原中也』（03）に「蘇州」が収録され、同社出版部小林秀雄全集（同書は第6次に当る）編集室が施した脚注では、昭和54（426）

13年(1938)3月に著者が中国に渡り江蘇省南部の此の都市を訪れた経緯を紹介し、「昭和六年九月、日本は満州事変によって中国侵略を開始し、昭和十二年七月、盧溝橋事件によって日中戦争へと突入、著者が訪れた上海、杭州、南京、蘇州は、いずれもすでに日本軍の占領下にあった」と説明している。³⁹⁷⁾ 中国の防衛失敗で「東洋の巴里」の美称が有る中国最大の都市上海と首都南京だけでなく、「上有天堂，下有蘇杭」(上に天国有り，下に蘇州・杭州有り)と言う両景勝都市も陥落した。上海と浙江・江蘇(省都=杭州・南京)は80年代まで中国の「蕃都圈」(造語)であったが、国家の主権を巡る戦争は個人の名利を賭す棋戦と違って流血が伴うから遺恨も強く深い。件の「大刀向前衝」は此の5字を含む「大刀進行(行進)曲」の歌詞を連想させ(文中斜体で表示)、音楽家麦新(本名=孫培元)が盧溝橋事件(37.7.7)後の8月8日に作詞・作曲した此の歌は、副題「献给二十九軍大刀隊」(29軍大刀隊に捧ぐ)の通り盧溝橋守備に当る軍に捧げられたもので、33年3月9日に熱河省の長城喜峰口で日本軍と白刃戦を交えた同軍の大刀隊の事績を題材にしている。後に当初(文中下線が付く箇所)の「二十九軍的弟兄們」(29軍的弟兄たち)と「咱們二十九軍不是孤軍」(我等29軍は孤軍に非ず)を改めて、「大刀向鬼子們的頭上砍去！全国武装的弟兄們，抗戰的一天来到了，抗戰的一天来到了！前面有東北的義勇軍，後面有全国的老百姓，咱們中国軍隊勇敢前進！看準那敵人，把他消滅，把他消滅！(喊)衝啊！大刀向鬼子們的頭上砍去！(喊)殺！」(大刀で鬼子等の頭を叩き斬れ！全国の武装した兄弟たち！抗戰の日が遂に来た！抗戰の日が遂に来た！前には東北の義勇軍，後ろには全国の大衆，我等中国軍隊勇敢に前進せよ！あの敵を確と見よ！奴等を殲滅せよ！殲滅せよ！[叫び]突擊！大刀で鬼子等の頭を叩き斬れ！[叫び]殺れ！)という風になった。此の「鬼子」は和語の「鬼子」(『広辞苑』より詳しい『日本国語大辞典』の説明は、「(名)①鬼に似て異様な容顔で生まれてきた子。多く歯，また髪が生えて生まれた子にいう。②鬼のように荒々しく強い子供。③両親に似ていない子。比喩的にも用いる」と違って、『現代漢語詞典』の語釈の通り「**囹**対外国侵略者の憎称」(囹外国の侵略者に対する憎悪の呼称)である。「義勇軍」は『日本国語大辞典』の用例初出「蛻巖先生答問書(1751-64か)中」の通り和製漢語で、次の「国際連合憲章(1956)八四条」の様に国際社会の用語の和訳にも使われているが、「(名)戦争、事変に際し、国家の強制によらないで、人民が進んで編制した戦闘部隊。義勇兵団。義勇団」を意味する此の言葉は、『現代漢語詞典』では「**囹**人民為了抗擊侵略者自願組織起來的軍隊。特指我国抗日戰爭時期人民自動組織起來的一種抗日武装。」(囹人民が侵略者に抗する為に自らの意志で編成した軍隊。特に我国の抗日戦争中に人民が自主的に結成した一種の抗日武装集団を指す)と為る。代(暫定)国歌(1949~78)・国歌(82~)「義勇軍進行曲」(田漢作詞，聶耳作曲，35)は、満州事変(31.9.18)の起きた奉天(瀋陽)が省都である遼寧の義勇軍を原型にしているが、同省の中朝国境に在り志願軍入朝参戦の最前線基地丹東で生れ育った連笑の「大刀向前衝」には、「網名」・棋風俱に**中国・東亜の20世紀前**

半の熱戦と後半の冷戦の匂いを放つ感じがする。

「米・英連合軍」開発の秘密兵器 *AlphaGo* が中国系・仏蘭西籍の欧州王者に圧勝した直後、オバマ大統領は集会合会（2015.10.19, ^{パーティー}加州）で全米囲碁協会主席 Andy Okun から挨拶された時、囲碁は大学で強豪の Tim という男に教わった事が有る（“I learned to play Go in college from a guy named Tim. Tim was a Go master.”）と披露し、^{それ}其は大変複雑な遊戯で、直線的でないものだ（“It’s a very complicated game. …non-linear.”）と助手に教えた。³⁹⁸）彼は6年前に胡錦濤主席に碁道具1式を贈った事は若い頃の異文化体験に由来が遡れるが、対等的な立場で遊戯の規則に沿って両国関係を発展させて行く希望の暗示とも取れるし、順調に進まない（non-linear）^{ゲーム}紆余曲折の見通しを^{ルール}仄めかす発信という深読みも出来よう。06年春に胡が^{ホワイト・ハウス}米大統領府でブッシュに『孫子兵法』を贈った事への意趣返しだとすれば、双方とも抗争・交戦よりは平和的な共存を願う意向を託しているという風にも解釈できる。春秋時代（前770～前476）末の兵家孫武（生歿年不詳）が著した^{その}其の中国の兵法書の祖は、「計」篇（第1）で「多算勝、少算不勝」（算多きは勝ち、算少なきは勝たず）と説き、「謀攻」篇（第3）に「知彼知己者、百戦不殆」（彼を知り己を知る者は、百戦して殆からず）と有る一方、「謀攻」篇の「上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城；攻城之法、為不得已。」（上兵は謀を伐つ、^{その}其の次は交を伐つ、^{その}其の次は兵を伐つ、^{その}其の下は城を攻む。攻城の法は、已むを得ざるが為なり）、「百戦百勝、非善之善者也；不戦而屈人之兵、善之善者也。」（百戦百勝は、善の善なる者に^{あら}非ざる也。戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者也）と言う様に、謀略や外交を高等手段とし流血・犠牲を伴わない征服を最善とする考えが基を為している。虚構の大義でイラクを侵攻した「世界の警察官」（中国語＝「国際憲兵」）への揶揄の有無に関らず、訪問先の超大国の元首に兵法書を贈るのは儀礼上稍穏やかでない印象も否めないが、互いの衝突は干戈を交えぬ「闘智」（智能の闘い。駆け引き）に止めようという意も含み得る。前任が受け取った『孫子兵法』に対して囲碁の道具を^{リーダー}本家の首領に贈る挙動も意表を衝いたが、^{この}此の創意自体は^{アイデア}囲碁と似た暗黙の知的な意思表示や君子の嗜みの顕揚なのかも知れない。数学や電気用語で「非線形的」と言う non-linear に即して^{この}此の名著から碁の本質を探すと。「虚実」篇（第6）の「兵形象水、（中略）兵無常勢、水無常形」（兵の形は水に象る。（中略）兵は常勢無く、水は常形無し）が先ず思い当る。『論語』第6篇「雍也」に有る孔子の「知者楽水、仁者乐山。」（知者は水を楽しみ、仁者は山を楽しむ）は、呉清源の「行雲流水」や高川格の「流水不爭先」の棋風に見る碁の智力競技の特性を思わせる。両大家の氏名の字・義に水を含み三水偏（中国語＝「三点水」）を用いた呉清源の本名も「泉」であるが、『広辞苑』の「いずみ【泉】」の「（出水の意）①地中から湧き出る水または湯。また、その場所。〈夙夏〉。『清冽』な一」②比喩的に、湧いて出る源。『知恵の一』」の様に、「白・水」から成る^{この}此の字も碁の心・智・技の「清し・澄み・冴え」の源流を形容できる。

中山典之は『昭和囲碁風雲録』第17章「高川秀格の時代」で1952年の本因坊戦を回顧し、挑戦者が実績皆無の高川と決った時に日本棋院は落胆し関西棋院はシメたと思うと言う。曰く、同じ関西の有望株「天才田中(不二男)」(16年生れで1歳若い)と並称された「秀才高川」は、其の柔らかい物腰・温和な風貌の所為か「非力の高川」という不名誉な仇名を付けられ、「天才山部俊郎などは“高川のパンチではハエも殺せない”と口をすべらしたほどであるが、何ぞ測らん、その“非力”は賢明・冷静の代名詞であり、形勢判断のもたらす一部分、一結果に過ぎないことが後になって判るのである。/棋士は、大したパンチを受けずに半目か一目半ほど負かされる高川を恐いと思わないのである。一発で場外まで吹っ飛ばされる木谷や藤沢朋斎、気付かぬうちにカミソリで切られて首がなかったという坂田の方が骨身にこたえる。/高川は思ったより強いのではないか、という評判が出て来たのは、毎年の下馬評をくつがえして、本因坊位を四期、五期と防衛してからだった。これと言った妙手も出ず、一間トビの高川、ボウシの高川と言われる高川の碁では、プロを感心させるのは難しいが、本因坊位を九年連続して維持した高川に力がないわけがなく、形勢判断という武器が、怪力があったのだろう。」³⁹⁹⁾老子『道德経』第43章の「天下之至柔，馳騁天下之至堅。」(天下之至柔は、天下之至堅を馳騁す)は、世の中の最も柔らかい物(水)は最も堅い物(鉄の類)を凌駕できるという逆説である(日本語にも入った「馳騁」は「馬を駆け廻す。馬で駆け廻る」「思う儘に支配する。欲しい儘に振る舞う」の両義)。第78章にも「天下莫柔弱於水，而攻堅強者莫之能勝」(天下に水より柔弱なるは莫し、而も堅強を攻むる者之に能く勝るもの莫し)と有るが、賢明・冷静な形勢判断で下馬評を覆して大棋戦を制し続けた怪力は道教的な神格性を持つ。全碁界の敬服を得るのに長い歳月が掛った其の「非硬派」(造語)の地味な凄さと比べれば、類似の靈性を帯びるAlphaGoは対李世石戦の「驚艶」妙技で一挙に満天下の名声を博した。高川に囲碁人の瞳る様な名手が減多に無かった事も好手連発のAlphaGoと対照的であり、自ら白番の名局と評した第7期本因坊位挑戦7番碁第4局(52.8.6~7)が1例に為る。『昭和囲碁風雲録』中の本局(参考棋譜19)第1譜(1~100, 本稿図39)の解説では、「白24までと、実利と厚みの分れ。白は後手になるが左上隅と右下の星が良い位置にいる。/黒35と気合のハネ出し。しかし白は36、38と受け流して流水不爭先の構え」と有り、「白96とノビ切ってはすべてが決した感があると高川。この手に回って勝利を確信した」と述べている。「形勢判断の高川が言えば、さもありなんと思うが、一流棋士はこうも早く勝敗を見定めるのであろうか」と結び⁴⁰⁰⁾、第2譜(101~235, 同図40)解説は「本局は、厚みにモノを言わせて寄りついた高川白番の傑作とされている。高川のヨセは定評があり、その足どりは一歩も乱れなかった」と語る⁴⁰¹⁾が、「好手」「妙手」「奇手」の評価どころか「強手」「決め手」「勝着」の表現も使われていない。橋本昭宇本因坊の「快刀」風の「火の玉」を無力化した言わば「温泉」の「微湯」は、「冷泉」吳清源の「妖刀」と好一対で「隠れた鷹派」とも言える程に能く爪を隠している。

図 39 第 7 期本因坊戦挑戦手合第 4 局 (1952.8.6 ~7), 本因坊昭宇 (黒, 込 4 目半) vs. 高川格, 1 ~100, 235 手完, 白 3 目半勝ち

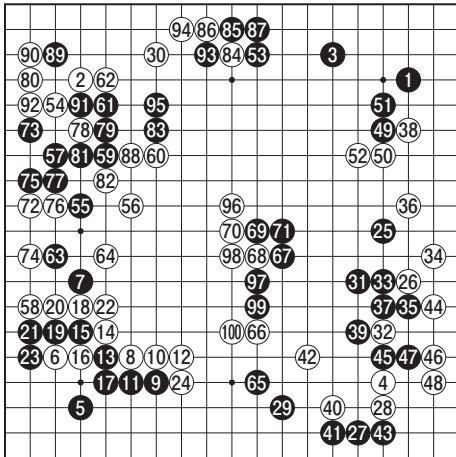


図 40 図 39 対局, 101~235 (図中 1~135)

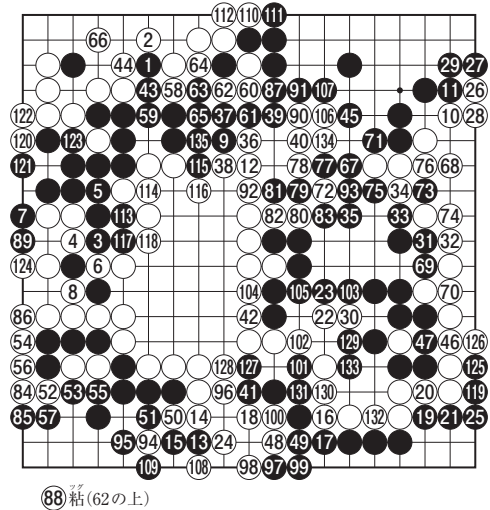


図 39・40 出典 = 中山典之『昭和囲碁風雲録』文庫版, 下巻 60・61 頁。

宇太郎^{テンポ}と歩調が合わない高川を出したのは日本棋院の妙手だったのかも知れないと言う中山典之の評は、高川格の挑戦権は自力で選抜を勝ち抜いた結果なので棋院の失望への諷刺の様にも響くが、関西棋院総帥との争碁に於ける日本棋院の高川派遣の妙手は寧ろ前年の立会人起用であり、^{じか}直に敵の有様を観察した体感^{じか}は結果的に次期の闘いの予備知識と為ったに違いない。毎日新聞社が彼に観戦記を依頼した事も先見の明と「選賢の明」(諧諺語)が感じられ(日本語に無い「選賢」[賢を選ぶ]は『管子』「戒」が初出で、賢能[中国由来の漢単語、『広辞苑』の語釈 = 「賢くて才能あること。また、その人」][な人]を選ぶ意)、一流棋士が一流棋士同士の対局の観戦記を書くのは棋史上の特筆すべき事項と言える。棋院の主力は藤沢庫之助九段・木谷實八段・坂田栄男七段で高川七段は其^モの他多勢^{たぜい}の陣^{クラス}だったので、競馬で言う大穴を出す事を誰も予想できなかったから立会・観戦が頼まれたのかも知れない。其^モの執筆した分は巡り巡って坂田が本因坊を角番に追い込んだ第 4 局 (1951.5.17~18) で、^{エース}逆境が逆転を生む第 5 局の昇仙峡の劇変はまさしく此^この 1 戦の明暗^{かど}に由^{もたら}って齎された。高川が次期挑戦権争奪決戦で坂田を下し更に橋本から奪冠したのは 2 重の勝利と成るが、『現代囲碁大系』第 18 卷『高川格 上』(本人解説, 村上明執筆, 81) の第 21 局 (第 7 期本因坊位決勝 7 番碁第 4 局) の解説「好局で王手」の中で、「第二局は持久戦の途中、橋本さんに緩着が出て白がおもしろくなった。寄せでも橋本さんは間違え、八目半という大差になってしまった。/ “高川さんと打っていると、なんだかぬるま湯につかっているみたいで、さっぱり闘志が沸かない” / 橋本さんがそういった感想を洩らしたのもこの第二局のあとだったらしい。/ 確かに、才気煥発の橋本さんの芸風

から見れば、私の碁は質が違うだろう。やはり丁々発止と戦う坂田さんのような碁のほうが、調子が合うに違いない」と述べた。⁴⁰²⁾「沸かない」の「涌/湧」ならぬ「沸」は沸騰しない「微温湯」の所為の不完全燃焼に似合うが、文中の和製四字熟語(『広辞苑』の「ちょうちょう-はっし【打打発止・丁丁発止】」=「[ハッシも擬音] 刀などで互いに打ちあう音。また、激しく打ちあう様子。“一の議論”。『日本国語大辞典』の【丁丁発矢・打打発止】の語釈は「(副)(多く“と”を伴って用いる) ①激しく音をたてて、互いに打ち合うさまを表わす語。②激しく議論をたたかわしあうさまを表わす語)も、快刀・利剣で斬り合う死闘を交す橋本一坂田の一騎打ちの激しさを形容する妙味が出る。第4局では橋本流は先ず黒9の大桂馬で現れ(通常は図41のAの開きかBの3間開き)、挑戦者が其の近辺で撥ね出した白38から中央での追いつ追われつの正面衝突が始まり、本因坊の黒41を決めて43と伸び、47と調子を求めて49・51と1歩ずつ先行する処に、高川は巧まざる(意識的に工夫を凝らしたものでない)芸の巧みさを感じ観戦記で讚えた。白54の3間飛びで誘いの隙を作り間に入った黒55に対して白56と包囲・分断を図ったが、黒61の戦線離脱で白62~68の猛攻を招いたのが敗因かという分析が観戦記に有る。⁴⁰³⁾白92~110の隅に生きる過程で106の先手の覗きで124~132の切断・鯨呑の伏線を敷き、136の好手で凌げた(以下黒が図42のAと出ても白がBの当りで無事に終る)⁴⁰⁴⁾辺りは、「凌ぎの坂田」の本領が遺憾無く發揮され其の「ザ・手筋」を見落した橋本は即座に投了した。丁丁発止の熱闘を目の当りにした高川は恐らく敵・我両側の2人に対する闘争心を強め、故に翌年に強打を避ける戦法で両強敵を順次倒して驚異の連勝を遂げたと言え

図41 第6期本因坊戦挑戦手合第4局、本因坊坊宇(黒、込4目半)vs. 坂田栄男、1~70、136手完、白中押し勝ち

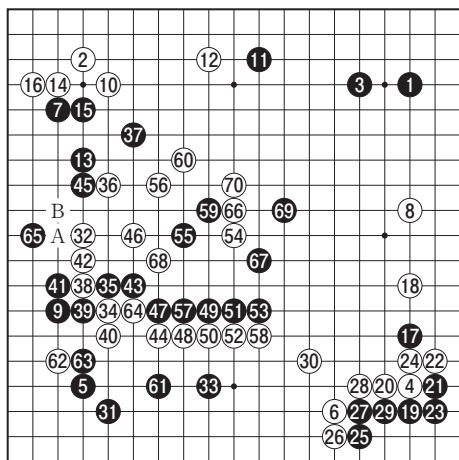


図42 図41対局、92~136

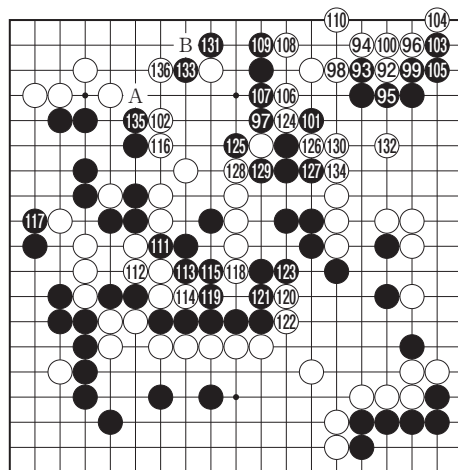


図41・42 出典=中山典之『昭和囲碁風雲録』文庫版、上巻335・336頁。

なくもない。

気合激突の読み合戦が端的に現した囲碁の尖鋭な相克の側面

第5局は「昇仙峡の大逆転」の伝説として後世に永遠に語り継がれて行くに違いないが、勝者は『現代囲碁大系・橋本宇太郎 上』の自選譜に同棋戦の7局中の最終局しか入れず、逆に敗者が『坂田栄男 上』の中で同棋戦の唯一の記録として残し序文で大いに取り上げた。紙幅の制限で代表作を絞らなければ成らないので橋本の防衛成功譜は至当な選択であるが、次期挑戦者が採った同第4局の同じ「好局で王手」を外した坂田の判断は一見奇異に映る。囲碁対局の平均手数の約6割弱に当る136手は前出の第2期棋聖戦決勝第5局と略同じで、其の碁(1978.3.1~2)は当然ながら勝者の勲章として『藤沢秀行 下』に納まっている。『読売新聞』2009年5月12日夕刊の「なるほど囲碁将棋」に連載が始まる「**追悼** 藤沢秀行名譽棋聖 この4局」でも、高尾紳路は「1 大長考で大石を召し捕る」の題で4日前に逝った師の此の1戦を挙げた。多くの棋士が同棋戦7番勝負史上最も印象的な碁として選ぶ本局には故人の神髓が窺え、角番に追い込まれていた52歳の彼の不屈の氣勢が屈指の名局を生み防衛成功へと導いた。「【局面図1】△のツケに対し、黒1の飛びは2時間57分という記録的な大長考で、藤沢は白の大石を殺せると読み切った。黒5と並んでいよいよ本気だ。/【局面図2】黒34となって、“殺し屋”と異名を取る加藤の大石を召し捕ってしまった。ここで加藤は投了した。右上の白と黒は白の後手ゼキだが、右辺の黒が生きると同時に、下方の白の大石が死ぬ。/後日、白の大石にしのがあったかどうか研究されているが、部分的なしのぎの有無は問題ではない。加藤は全部生きようとし、藤沢はまとめて取りにいった。二人とも、そうでなければ自分に勝ちはない、と判断していた。だから、気合と気合、読みと読みとの激突になったのである。高尾九段“先生は相手にダメージを与えられるような勝ち方をしたかったのでしょうか”。すさまじいまでの、藤沢の勝利への執念と恐ろしいまでの集中力であった。」(局面図1・2は図43・44。両図中の黒1~黒5、白1~黒34は実戦の黒93~黒97、白98~黒131)高尾の解説に基づく文(赤松まさひろ正弘)は一時代を築いた希代の碁打ちの豪放・緻密な棋風に触れ、「藤沢名譽棋聖ほど、プロをうならせる手を残してきた人はいない。独創性、中盤の力強い打ち回し、厚みを背景にした寄せなど、どの分野でも群を抜いていた」とした。「酒とばくちにまつわる数々のエピソードは、負のイメージで語られがちだが、それは名棋士、藤沢の名をおとしめるものではなく、芸の輝きをいっそう引き立てる彩りととらえたい」とも言うが、勝利への険しい径と判断し乾坤一擲の賭けに出た豪胆も競輪狂の芸の肥しが有った物か。現に、『現代囲碁大系』第43巻『趙治勲』(本人解説、中山典之執筆、83)の最終局最終譜の解説は、「10 三連敗から四連勝」の題で第7期棋聖戦挑戦手合の大一番の激闘・善戦を振り返って、「藤沢も、競輪などで鍛えた勝負度

胸が大勝負に生きているかもしれない」と書いてある⁴⁰⁵⁾。言わば“all-or-nothing”(全面的又は皆無の。一か八かの。妥協を許さない)との認識から、加藤正夫も丁丁発止と気合が激突する読み合戦の渦巻きに全身全霊を投じ死力を尽した。酒も呷り女も泣かず等の彩りで引き立てられた芸の輝きは同じ稀代の名手坂田も一緒に、専門家を唸らせる佳着の多い秀行でさえ彼の天来の妙手に翻弄され闘志が萎えた事が有る。其の坂田は初の本因坊位挑戦でも天才宇太郎が痺れた上記の絶技等な自慢の種が多いのに、最も痛い逆転負けの起点という影の部分の奥底に自ら光を当てた事は非凡さの現れと言える。

図 43 第2期棋聖戦挑戦手合7番勝負第5局, 藤沢秀行(黒, 込5目半)vs. 加藤正夫, 93~97(図中1~5), 131手完, 黒中押し勝ち

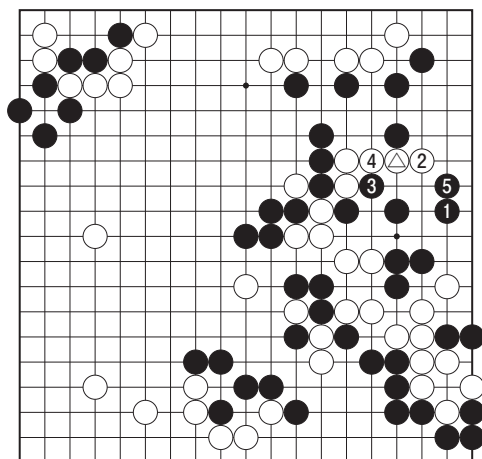


図 44 図 43 対局, 98~131(図中1~34)

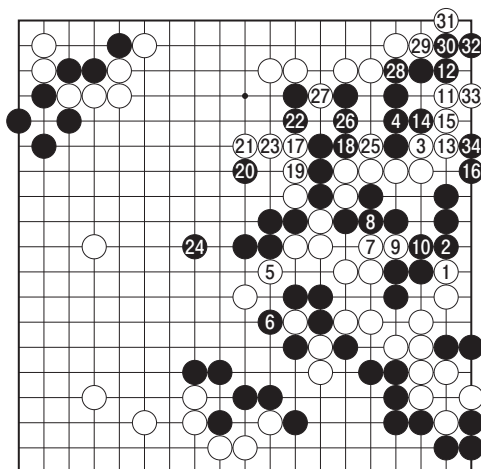


図 43・44 出典 = 「追悼 藤沢秀行名誉棋聖 この4局 1 大長考で大石を召し捕る」(選・高尾神路九段, 文 = 赤松正弘), 『読売新聞』2009年5月12日夕刊。

『坂田栄男 上』は初段時の1934年に呉清源五段に打って貰った^{もら}2子指導碁を始めとし、63年に藤沢秀行名人への挑戦で選手権戦史上初の本因坊名人と成った局が最後である。山頂に登り詰めるまでの棋士生活の句読点とも為る25局中に特に強烈な印象が残るのは、51年の「昇仙峡の戦い」、61年の「悲願十年の局」、63年の「頂点に立つ」の3局だと言う。「本因坊戦は、当時唯一のメインイベントであり、この檯舞台で時の本因坊橋本昭宇に挑戦、三対一のカド番に追いつめながら「昇仙峡の戦い」から三連敗、世紀の大逆転を喫するのである。この衝撃は大きく、その後の十年間にわたり、私の心にスランプとなって深く刻み込まれたのである。ほかの棋戦に勝ってもうれしくない。本因坊戦だけが本命だ、と心に決めたものである。したがって、十年後の昭和三十六年、高川本因坊の十連覇を阻止して、初めて本因坊に就いた時のよろ

こびは筆舌につくせないものがあつた。/昭和三十八年“頂点に立つ”の一局は、また違ったよるこびがあつた。本因坊名人を加え、碁界を制したという誇りである。私は、この碁を“終生思い出の局”として大事にしているのである。⁴⁰⁶⁾「序」の此の述懐に出た「昇仙峡の戦い」を題とする第8局の解説は先ず時代背景として、「岩本薫八段から本因坊を克ち取った橋本宇太郎八段は“錦の御旗”はおおげさとしても、本因坊を旗印に、関西棋院独立を宣言し、「本因坊は日本棋院の棋士であること」の一項が日本棋院を刺激した。/“あの旗を奪還せよ”/話がいささか血なまぐさくなるが、それが当時の雰囲気であつた。私は、その尖兵として、七番勝負への挑戦者となつたのである」と振り返る。⁴⁰⁷⁾「克ち取った」の中の通常表記である「勝」と違う変則的な「克」は「尖兵」の「尖」と共に、**丁丁発止と鏑競り合う両闘士が見せた囲碁の尖鋭な相克の特質の一端を字面に現している。**『日本国語大辞典』の【尖兵】の「(名) ①部隊の接敵行進中、前衛の最前方を警戒しながら進む小部隊。→先兵。②(比喩的に)全体にさきがけて、新しい分野や敵対する分野に進出し、足場を固める働きをする人」は、其々の用例「土と兵隊(1938)〈火野葦平〉」「裁判(1952)〈伊藤整〉最終弁論〈福田恒存〉」が示す様に、**戦中の軍隊用語が元で坂田が挑戦の土俵に跳び上がった時代に戦後の転義が生じたので、藤沢秀行等と似た「戦中派」的な坂田の血気旺盛・熱血沸騰を形容するのには相応しい。**昨今②の意でも使われる「先兵」も「敵対勢力」の総帥に斬り込んで行く先鋒に似合うが、先ず1勝の幸先を経て後1勝で決勝点到着の優位に立つと**勝気が先走る「勝・先」の所為で、「気負いが空転する」事態と為り**「あと一勝のむずかしさは、本局を境に明暗が反転」した。本因坊戦で遂に「十年の雌伏を余儀なくされ」た**「痛恨の一局」に対する痛切な反省**⁴⁰⁸⁾は先ず、第1譜(図45の1~20)を検討する「1 白の趣向」の次の言の様に**若気の不当**に向けた。「首を洗ってきました」/本因坊昭宇、四十四歳。打ち盛り、淡々たる心境が対局前のさわやかな弁となる。/坂田栄男七段、三十一歳。こちらは血気盛んというか、ここで決めようというわけで、ゆとりがない。/(中略)/黒7のカカリには手を抜き、白8と迫る。/“軽妙・橋本流”は、さいごになるかもしれない一番を、心おきなく、自分の碁で打ち進めたい心と察しられるのである。/白の趣向であろう。黒石を寸断し、混戦に持ち込み、その中に妙機を掴もうとする、得意の戦法である。/(中略)/白14に対しては、黒いと三々に入るほうがわかりやすいし、それで十分だが、相手の注文に応じて、真正面から戦う意図。気合いではあるが、若さでもあろう。/黒15に白16の大ゲイマが適切。白ろの一間は、黒17のあと、黒はのツメがきびしくなる。/黒17の曲がりに、白18・20と取まつたのは、下辺の戦いに備えて至当であろう。⁴⁰⁹⁾

第2・3譜(21~47, 47~64)の解説「2 ノド元深く」「3 大空中戦」の注目点として、「(前略)黒41は俗手であるが、これを打たないと、黒43とは出られない。/白44の突き当たりは当然であり、この点を黒に打たれると封鎖されてしまう。ほぼ必然のなりゆきであるが、黒45は必然とはいえないのである。/冷静に考えれば、上辺黒46に展開して、ゆっくり中央の

図45 第6期本因坊戦挑戦手合7番勝負第5局 (1951.5.30~6.1), 本因坊昭宇 vs. 坂田栄男 (黒, 込4目半), 1~20, 273手完, 白10目半勝ち

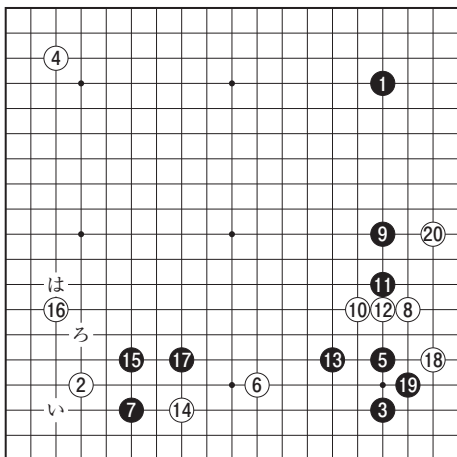


図46 図45対局, 41~64

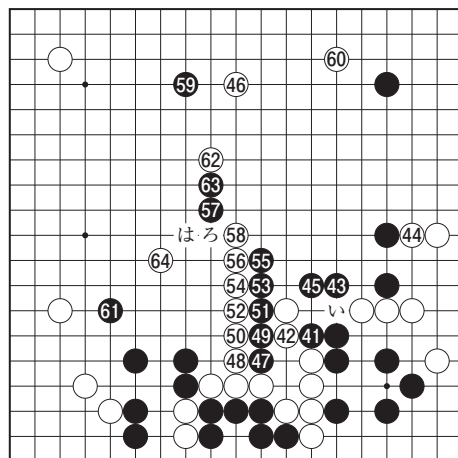


図45・46 出典 = 『現代囲碁大系』第22巻『坂田栄男 上』, 89~91頁。

攻めをふくむべきである。白いの出切りは打ちにくいところだからでもある。/白46と大場に先行され、黒47とノド元深く攻め込んだか、よかったかどうか。」「(前略)黒57が異様なようだが、攻めの急所である。この手で黒58、白ろ、黒57、白はは、気持ちのいいハネだが、白を逃すだけでつまらない。/白58は気合いで打たれたものと思うが、白64に逃げていれば無事である。白ががんばり、大空中戦となった。/黒59に60は、居直った感じ。さあ、攻めてこい、という態度である。/黒61の遠攻作戦に、白62は、いかにも橋本さんらしい軽手。だが、やはり、白64と打っていればわかりやすい。/黒63のぶつかりが、きびしい筋である。」⁴¹⁰⁾ (図46参照) 前回の終局手数に近い第6譜(121~133)でも「難戦」(第4譜[65~100]解説題)が続き、「騎虎の勢い」と題する解説は又もや相手の術中に嵌った心理面の未熟さを悔んでいる。「序盤からはげしい戦いである。/“軽妙・橋本流”を真向から受けて立ったのは、勝ち越している自信と、若さであったろう。/しかし、局勢は白の思いどおりに難解の藪に入り、一手一手、手探りで進む状況。」⁴¹¹⁾ 漂泊の俳人種田山頭火の名句「分け入っても分け入っても青い山」(1926)に因んで言えば、坂田は老練な橋本の誘導で「分け入っても分け入っても未知の道」を歩む羽目に陥った。「必然的に時間も切迫、このあたりでは、すでに秒ヨミの段階であり、疲労も加わる。」⁴¹²⁾ 空間を争う囲碁では棋士の敵は彼我双方の人間(又は人工^A・人工^I)の他に時間も有り、事前に設定された時間制限の恐さは時限爆弾(中国語 = 「定時炸弹」)の字・義の通りである。秒読みの逼迫は予期せぬ処に現れる障害や競争相手の「伏兵」と違って所定の難関なので、元々危ない橋を渡る対戦者にとって其の起爆は場所が予定通り万仞の谷へと移

る事に等しい。呉清源は前出の日本最強決定戦対坂田局で10時間の持ち時間内に「わからん」と呟いたから、まだ「碁神」の域に程遠かった坂田の此の際の秒読み中の困惑・混乱は察するに余り有る。「黒21・23は上辺の黒地が味悪く、減りのくる打ち方であるが、あくまで中央の白の大石を攻める気合いである。しかし、冷静に反省すれば、やはり、闘志が空転しはじめていようでもある。黒23とこちらの連絡が止まれば、白24は当然といいながら、左上方の黒をねらっているのである。黒25には、白26でつながっている。黒27と差し込んでおいて、右辺、黒29と転じたのが、大変な思い違いであった。まさか、右辺の白を捨て、左上方面と刺し違えてくるとは思わなかったのである。むろん、黒30と連絡すれば、まだ悪くはない。白30と断たれ、黒33の取りきりは騎虎の勢いだ。」⁴¹³⁾ (図47参照、文中の21~33 = 実戦の121~133)

図47 図45対局, 121~146(下2桁表示)

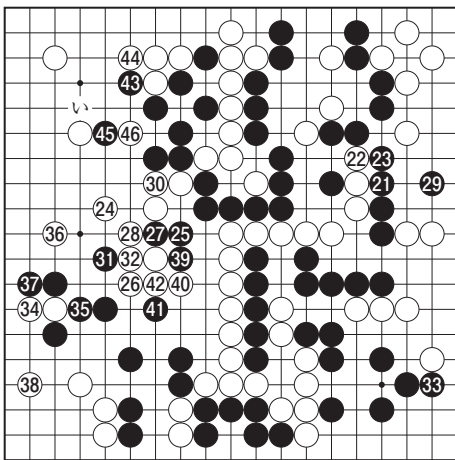


図48 図47の実戦145に代る坂田栄男の変化図

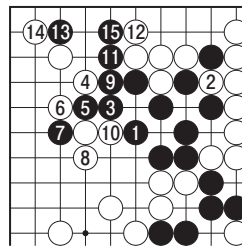


図47・48 出典 = 『現代囲碁大系』第22巻『坂田栄男 上』, 94~95・95頁。

「騎虎の勢い」は『広辞苑』で、「[新五代史唐臣伝、郭崇韜“俚語に曰く、虎に騎る者の勢い下がることを得ず”] 虎に乗って走る者が途中で下りることができないように、物事のゆきがかかり上、途中でやめにくいことのたとえ。はずみのついた激しい勢い」と説明されている。中国の四字熟語「騎虎難下」(虎に騎って下り難い)は専ら、事を進める途中で困難に遭って行き掛り上止め難いことに言う。碁を打つ事も象棋を行る事も将棋を指す事も中国語で「下棋」の総称で表せるので、「騎虎難下」は「虎」の背に跨った碁打ちの下りる事/石を下ろす事の大変さを形容できる。虎から降りても虎に振り落されても食い殺されるから走り続けざるを得ない訳であるが、棋戦中の「虎」には暴れる相手や暴走する自分と共に絶えず進行し超過を許さぬ時間もある。漢籍の「苛政猛於虎」から来た「苛政は虎よりも猛し」(『広辞苑』の語釈 =

「[礼記檀弓下] 住民に重税や徴兵などの負担を強いる苛酷な政治は、人食い虎よりも更に凶暴で、人々を苦しめる」を振^もって、**囲碁の苛酷さを現す「秒読み(中国語=「読秒」)は虎よりも猛し**という命題を思い付く。「右辺を捨て、左上方面と刺し違えたのは、白の勝負手であろう。/白34の下がりを利用し、黒35に白36と大きく包む。/小さく取りきるのでは追いつかないのである。/いよいよ、さいごの修羅場を迎えた。/白38の活きに、黒39・41を利用し、黒43から45と動き出すのであるが、秒を読まれていることとて苦しい。/ついに、黒45が敗着になってしまった。/白46のツゲが急所であり、むずかしくなったのである。/5図、黒1が急所である。白2と眼を欠くほかないが、黒3、白4に黒5・7の出切りは妙手。/白8と引けば、黒9、白10をうながし、黒11以下15まで、少なくとも、コウには持ち込めたのである。/白46が同点の急所だったわけである。/次の一手で、黒いとハネれば、コウぐらいになっただろうが、時間がなくて読みきれない。」(文中の着手は図47参照。5図=図48)第7譜(134~146)解説の「7敗着、黒45」の此^この記述⁴⁴⁾の通り**秒読みは敗着の誘発装置**で、騎虎の勢いに乗せられた故「勝敗定まる」(第8譜[147~200]の解説題)結果と為った。「黒47と左下隅に転じたが、この手で、右上隅、黒56のアテを利用しておけば、まだ勝敗不明である。というのは、白いとツグのは、黒87が残るし、白88とツゲば、黒いと抜き、黒ろのコウが残る。どのみち、黒いに抜いてあれば、白48以下の手段は生じない。/白52まで、逃げられたのが痛く、勝敗も決まった。/黒61のツゲに白62と手堅く、黒67から手をつけ、黒73で一瞬、手のようだが、白74が絶妙の応手であり、これで手にならない。/白74で、うっかり、6図、白1と取ると、黒2とアテられ、事件である。/白3の抜きに、黒4とツゲば、コウつきながら大きな攻合いになってしまう。/白90とツガセ、いくぶん黒は得をしたが、もはや、勝負は

図49 図45対局、147~200(図中47~100)

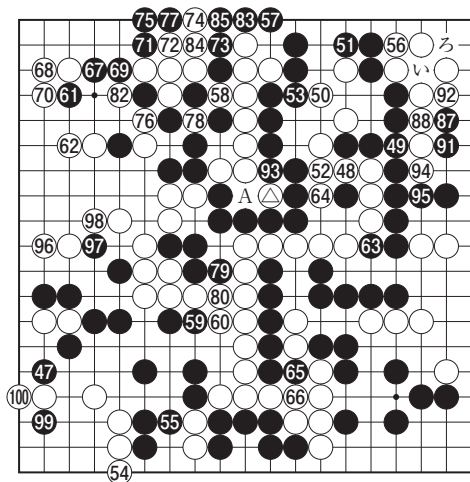


図50 坂田栄男が示した図49中174の失敗図

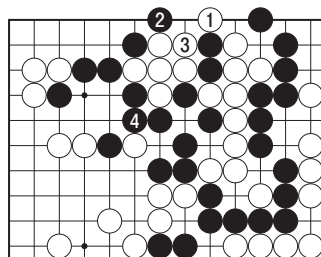


図49中、**81**劫取る(78の上)、**86**同(78)、**89**同、**90**粘(82の右)

図49・50 出典 = 『現代囲碁大系』第22巻『坂田栄男 上』, 96頁。

動かない。/黒 93 のアテは、まったくの錯覚である。」⁴¹⁵⁾ (図 49 [実戦の 147~200]・50 [文中の図 5] 参照)

273 手完・白 10 目半勝ちの本局の最終譜解説「9 世紀の大逆転」には着手への言及が無く、検討対象の最後の黒 193 (時間繋ぎの当て) が全く効かず無駄な手に為った事は痛ましい。相手が必ず此に対して常識的な対応をすると信じて其の間に次の手を考える時間捻出法は、当代の日・中・韓の一流棋士でも賢い秒読み対策として極めて当り前の様に使われている (中国語の名称「打将」は象棋の「將軍」[王手]に当る「打吃」[当て]の意である)。上辺中央の白の活きの為の手入れを強要する此の手は結局攻め合いの具合を読み間違え、他所の利かしや大寄せに転じた白 194 以下の応手には坂田は恐らく愕然としたのであろう。当りと為っている白の 1 子 (⊙) を取る手は終盤の黒 257 (A) で打った小寄せに過ぎず、実利の損以上に重い挫折感が生じかねない此の不覚は通常の彼には絶対に有り得なかった。合計消費時間の黒 9 時間 59 分対白 7 時間 25 分の大差にも心理的な余裕の有無が窺われ、秒読みの非常事態に追い詰められた敗者と持ち時間を温存した勝者は鮮明な対照を為す。自分でも理解し難い其の空振りの恥辱を曝した坂田の敗着は秒読み中の黒 145 であるが、鋭利な棋風を現した此の突けの右 1 路が正解で相手に突け込まれて非勢に傾いた展開は、小林光一棋聖に挑む山城宏の「半目の 1 億円」の逸失を招いた同じ左上の 1 路差と共に、碁盤の 361 路中の 1 路差が往々にして天国と地獄の境目と為る事の典型例に挙げられる。黒の裏に突け返し其の眼形を潰す白 146 は「目には目を、歯には歯を」の反発だけでなく、黒 45 は白 46 の大場に行くべしとの反省と同様「敵の急所は我が急所」の格言の証に為る。『現代囲碁大系』第 5 巻『岩本薫』(本人解説、高橋敬光執筆、1981) の 30 局中の 1 割が、同じ明治人の橋本宇太郎 (02 年生れの岩本より 5 歳年下) との対戦 (46・50・74) である。岩本は第 3 期本因坊位決勝 3 番碁で橋本に連勝し (46.7.26~8.21) 奪冠後 2 期保持したが、初の 7 番勝負と為る第 5 期の防衛で 4 番棒負けを喫し (50.3.28~4.28) 橋本に雪辱された (原文に有る「棒負け」は後出の「棒で勝つ」と同じく『日本国語大辞典』にも無いが、此の「棒」に当る「ストレート」[競技等での連勝又は連敗]は昭和初期に已に使われ始め、『日本国語大辞典』の用例 [2 点] の初出は「アルス新語辞典 [1930]〈桃井鶴夫〉と為る。『囲碁百科辞典 [改訂増補]』に「棒」の項が有り、「棒のように連続していること。①——に勝つ。——に負ける」と説明されている [①と呼応する②は無い] ので、新語誕生の半世紀後の碁界で棋士も著述家も和風の用語を好んだ事が窺える)。本巻中の対橋本の両勝局の間の同棋戦第 3 局 (4.20~23) は各 13 時間の持ち時間が有り、本因坊・挑戦者は其々残り 11 分・3 分まで闘い 271 手完・白 4 目半勝ちの熱戦と為った。第 1 譜 (1~45) の解説「1 変幻自在流」に曰く、「白 4 と同形のカカリは、ハサミに先着されて白悪しが定説である。そのタブーを敢えて打ち、白 8 のあき隅。百戦練磨の強者のみが許される構えといえようか。(中略) 左下隅黒 29 のカカリに、白 30 の一間高バサミ。/この手が新手かどうかは不明

として、当時の私には、橋本変幻自在流新案の一着かと思われた。/長考の末、黒31のコスミツケ。その困惑ぶりが、この応手に表現されている。そして疑問手であった。/黒39のケイマ、白いケイマ、黒ろの押しまで、現在では定石型となっているわけなのだが——」⁴¹⁶⁾(図51参照)第3譜(72~111)の解説「3 緩着のボウシ」は先ず白72の右下隅の三々入りを至当とし、黒地を抉っても形勢不利と見て白が強行した82・84の出切りへの黒の対応をも肯定したが、「下辺黒99のボウシ。白の受けを期待したものだが、独善の緩着であった。/譜の107に飛んで断点に備えるのが目下の緊急事。/石がソッポに向かって、営々として築きあげた黒の優位は一挙に崩れ去ってしまう。/白100の切りは厳しく、黒はやむなく105以下押し切るが、要石の底抜け事態を招き、逆転の兆し」と語る。⁴¹⁷⁾此の失着と白の巧みな攻防で「黒の厭な碁に」(第4譜[111~145]の解説題)為った事は、前線から離れ又は急所を外す「閑手」(不要不急の手を表す造語)の不発・不毛を思わせる。

図51 第5期本因坊戦挑戦手合7番勝負第3局、本因坊薫和(黒、^{コシ}込4目半)vs. 橋本宇太郎、1~45、271手完、白4目半勝ち

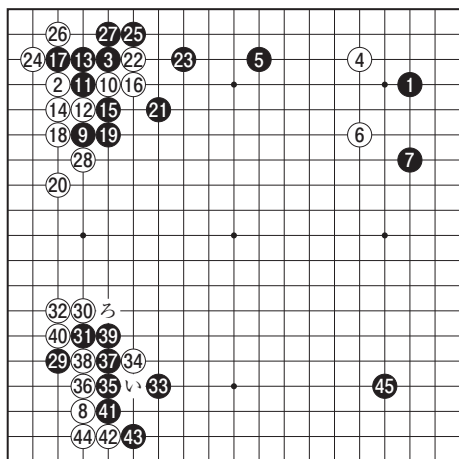


図52 図51対局、72~145

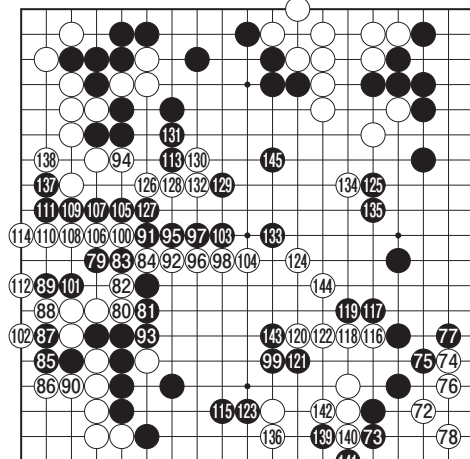


図51・52 出典 = 『現代囲碁大系』第5巻『岩本薫』、193・195~196頁。

此の局に賭けた意気込みとは裏腹に競り合いの勝負所で緩着を打ち要石を切り取られ、「後は橋本流の華麗なる収束をみるばかりであった」と最終譜(248~271)の解説は言う。⁴¹⁸⁾「7 タイトル交替」に出た「華麗」は「5 白、巧みな収束」(第5譜[146~201])にも有り、思わぬ地を作り敵地を破る好手筋・手順は「黒の味悪るを衝いて、適切華麗」と書かれた⁴¹⁹⁾。「6 大勢決す」では厚みを利用した手筋の巧拙は当人の技倆に直結すると言って相手を讃え⁴²⁰⁾、同巻第16局(日本棋院前期大手合、1940.8.14~15、先相先対木谷實、先番3目勝)の解説でも、

木谷は寄せ段階でも手厚く打って後に^{こぼ}零れ地が付いて来る流儀を好んだと述べた上で、^{かのうよし}加納嘉徳九段著『ヨセ辞典』（誠文堂新光社，74）の要旨を引いて^{アマチユア}非職業者の寄せ軽視を批判し，寄せは勝敗が目前に迫って来る^{プロ}訳なので職業棋士と雖も神経が擦り減るものだと語っている⁴²¹⁾。本巻刊行の少し前に^{プロ}本因坊・十段・天元・王座・鶴聖 5 冠王（79 達成）時代の加藤正夫は，現役棋士から寄せの日本一を挙げるなら林海峰と石田芳夫のどちらかに為ろうと答えた。⁴²²⁾ 日本最強の自負を公言した頃の^{ヨセ}評価だから 2 人の同輩の収束力の^よ抜群な凄さが可く分るが，『現代囲碁大系』第 33 卷『林海峯 上』（本人解説，大石清夫執筆，80）に収録された対橋本宇太郎戦（第 10 期プロ十傑戦決勝 5 番勝負第 3 局，73.3.28）は，緒戦で敗れ後 3 番を棒で勝つ展開の決め手と為る「苦しみ抜いた勝利」（解説の題）である。「超ベテラン」の相手の棋風に就いて岩本薫と同じ「変幻自在」の 1 語に集約し，「こちらがこうと思えば，たえずその裏をかてこられる。これほど打ちにくいタイプの人はいない。この碁も，やはり気合いを外され通しで，ずいぶん悩まされた」と回顧する。⁴²³⁾「1 はぐらかされる」「2 頭が混乱した」「3 橋本ペース」「4 大苦戦」（第 1～4 譜 [1～22, 23～29, 30～34, 35～47] の解説）の記述⁴²⁴⁾に拠ると，絶えず反発に反発を重ねて来て簡単に相手の思惑に乗らないのが橋本流の持ち味であり，本局では橋本でなくても当然と為る黒 47 の当て込みになって初めて自分の予想が当たった。（図 53 参照）「黒 23，これも読みになかった。私は 3 図を予定していた。白 4 のアテまでが定石。黒が 5 と右上の形を整えれば，白 6・8 と厚みを築く。また，黒 5 の手で 8 なら，白は 5 と侵略する。白からコウのいやがらせもあり，これは打てると思った。しかし，黒 23 とあまりみか

図 53 第 10 期プロ十傑戦決勝 5 番勝負第 3 局，林海峰 vs. 橋本宇太郎(黒，^{コミ}込 5 目半)，1～47，275 手完，白 5 目半勝ち

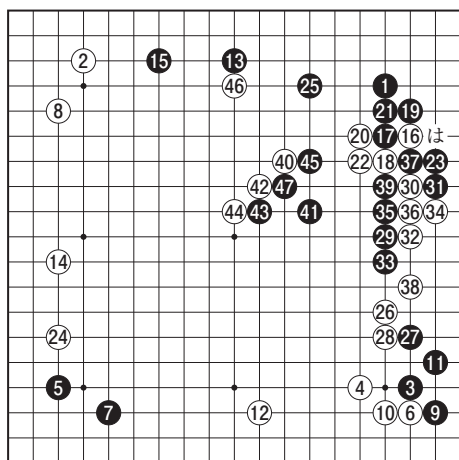


図 54 図 53 の 23 に対する林海峰の予想図

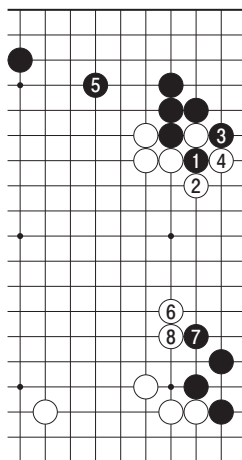


図 55 図 53 の 33 に対する林海峰の予想図

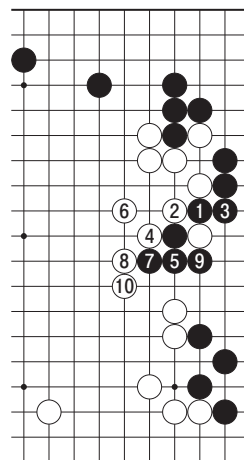


図 53・54・55 出典 = 『現代囲碁大系』第 33 卷『林海峯 上』，253～255・257 頁。

けない手で、裏をかかれた。」(3図=下掲図54)「黒33伸びが、またまた予想外の一手だった。4図、黒1とハネ込んでこれると決めていたのだ。白10までとなれば、白の厚みがバカにならず、相当である。/思惑外れの拍子に、白34と抑えたのが大ポカ。この手は、白はの手が成立するという妙な錯覚があったのだが、こうなっては完全に橋本ペース。ここから私の苦難の道が始まる。」(4図=下掲図55)当時30歳の林は已に名人位6期・本因坊位3期獲得で気力・棋力充実の黄金期に在ったが、橋本翁の幻術に悩殺され持ち時間6時間の碁の序盤で失着が出たのは人智の魔の悪戯か。

林海峰は黒37に白38と無理にでも抵抗しなければならぬ処に白34の非を見るとし、白38で39と駄目を接ぐのは其こそ黒38で白戦わずして負けた様なものであると説いた。白34は「5図、白1と膨れて3・5と二段にハネ、以下11までと打たねばならなかったのである」(5図=下掲図56)が、実戦で抑えて「黒35には、白いでよいと錯覚していたのだから、話にならない」と省みた。⁴²⁵⁾(い=図53のは)黒41と攻められ大苦戦を強いられた白は82突きの勝負手で左下隅の黒の領地に入り込み、106までとなって隅に活き「白には、攻める楽しみが出来、同時に、勝負のアヤが生まれた」。⁴²⁶⁾(以下白142までの着手は図57参照)中国語で「無憂角」(「侵される」憂いの無い角)と呼ぶ小目+小桂馬締りの隅への突撃は、黒の2子の近くの左辺・下辺に白の援軍(比較的堅実な2間開き)を活用して成功したが、「成算があってもなくても、こういくより打開の道がない。白いと囲うなどは、黒90で負け」と「5白盛り返せど……」に続く第6譜(82~106)の「6白に楽しみ」の解説は言う⁴²⁷⁾。「7形勢逆転」では黒107の打ち込みは此処を凌いで一気に勝ちを決めようとする手とし、橋本らしい此の厳しい打ち方によって黒115まで作戦大成功と為ったが、此の後橋本の足取りが急に乱れ、始まりと為る黒117は「14図の1・3が手筋で、必勝の態勢だった」(14図=下掲図58)が、実戦は外を厚くした為に以下黒29と逃げ出されればならず形勢は逆転である、と語った。⁴²⁸⁾第8譜(130~166)の解説「8勝勢確立」は、「白32は双方の根拠で絶対。白34も上辺白石のしのぎをかねて必要」で始まり、「42に手がまわって、もう負けぬと思った。残るは寄せだけである」と結ぶ。⁴²⁹⁾最後の「9黒のミスに救われて」では黒の巧い筋や大きな寄せも逆転とは行かないと述べ、「この一局は、序盤で失敗して苦しい戦いだったが、橋本先生の失着に救われ、勝ちを拾うことができた。終盤、もし黒の乱れがなければ、どうなっていたか——。/ミスを最小限にとどめて、食いついていったのが、よかったようだ」と総括する。⁴³⁰⁾林は同年の後半に3連敗後4連勝で石田芳夫の名人位挑戦を退け王座位の初獲得が出来、橋本は同年からの7期連続在籍で名人総当り戦入りの最年長記録(72)を残し、古稀を迎える直前に第1期棋聖戦決勝7番碁に進んだ(1-4で敗退[76.12.2~77.2.8])。其々最盛期の終盤と序盤~中盤に在り俱に時の第1走者集団に居た両者の此の対戦でも、黒35から「敵の急所は我が急所」の利害共有を再認識でき、黒117から「1路差で明暗が分れ得る」勝負の法則を思い付き、後者に代る

林の最善図から手筋の即効力（即効性の有る決定力を表す造語）が実感できる。「名局無し」と言われる争碁には此の競技の普遍的な原理は往々にして端的に現れており、相手の注文を外し通す橋本の「変幻流」と必敗の局面でも粘り抜く林の「辛抱流」（造語）は、敵の敵（不調・失着・秒読み等）が味方にする事と共に碁の奥義・機微に想いを馳らせる。第1回本因坊戦（39～41）で殆ど誰も其の優勝を予想しなかった関山利一六段（31）は、次期（43）決勝6番碁で1敗後に第2局の3日目に持病の悪化で倒れ棄権負けに終わった。実力制の初代本因坊の雅号「利仙」は仙人じみた風貌と共に安井仙知の棋風への敬慕も有り⁴³¹⁾、3代目の「薫和」も本因坊秀和に肖ったものと推察され⁴³²⁾ 俱に古層への継承が見受けられる。「本因坊は第一期関山利仙。第二期橋本昭宇。第三・四期は岩本薫和の順で、私の号は下村宏（海南）さんに相談して、和という字が相応しいと考えてつけたわけだ。」⁴³³⁾ 下村宏は古稀の年に内閣情報局総裁（国務大臣）としてポツダム宣言（45.7.26）受諾に尽力し、昭和天皇に由る終戦詔書朗読の「玉音放送」（8.15）の前後に言葉を述べた人物なので、「和」は昭和を意識し「八紘一宇・武運長久」を否定する平和志向が込められた様に思える。2・3代目の「昭宇・薫和」に含まれる「昭和」は2人の闘いに時代精神の象徴性を持たせ、両者の原爆下の対局（第3期同棋戦決勝6番碁第2局、8.4～6、広島市外五日市）も歴史的な巡り合せである。江戸の碁の「争・奪」の性格を引き継いだ昭和の碁は「戦・乱」の要素が添えられただけに、4代目本因坊高川秀格や坂田栄男の次の名人本因坊林海峰の「避戦」型の出現と主流化は、20世紀後半の日本の碁の「懸命な熱戦→賢明な冷戦」の変容の現れとして意義が大きい。

図 56 図 53 の 34 に代る
林海峰の改良図

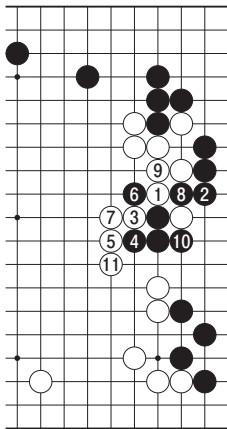


図 57 図 53 対局, 82～142

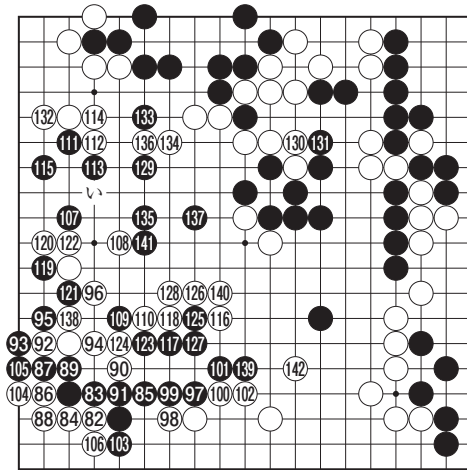


図 58 図 53 の 117 に代る
林海峰の改良図

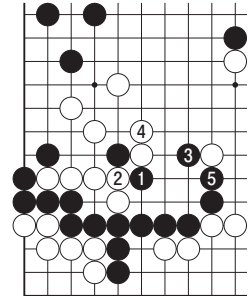


図 56・57・58 出典 = 『現代囲碁大系』第 33 巻『林海峯 上』, 256・260～262・261 頁。

注

- 315) 「記憶の一局 No.151 第16期棋聖戦七番勝負第7局」, 下島洋平八段解説, 囲碁将棋チャンネル 2016年4月5日放送。
- 316) 大江健三郎「^{アムビギュラス}あいまいな日本の私」, 『あいまいな日本の私』(岩波新書, 1995年), 4~8頁。
- 317) 注53文献, 214頁。
- 318) 『現代囲碁大系』第三十七巻『石田芳夫 上』(本人解説, 山本有光執筆, 講談社, 1980年), 220頁。
- 319) 注318文献, 233・220頁。
- 320) 注152文献, 170頁。
- 321) 注53文献, 229頁。
- 322) 注51文献, 78~80頁。
- 323) 加藤正夫『現代花形棋士名局選 4』, 日本棋院, 1976年, 182頁。相場一宏「木谷道場」(『現代囲碁大系』第九巻『木谷實 下』[本人解説, 相場一宏執筆, 講談社, 1982年])にも, 表記の不一致が3カ所有る(原文の「起こされ」「義務づけ」「終わった」は「起され」「義務付け」「終わった」に作る)ものの, 原文引用の形で出ている(261~262頁)。
- 324) 王鋭「天才逸事——記新科世界冠军羅洗河九段」, 『囲碁天地』2008年第3期, 46~48頁。
- 325) 注108文献, 60~61頁。日本語版(注82文献)に於ける当該部分は71~72頁。
- 326) 注152文献, 170頁。
- 327) 『現代囲碁大系』第三十六巻『大竹英雄 下』(本人解説, 佐藤伸執筆, 講談社, 1984年), 97頁。
- 328) 『現代囲碁大系』第四十二巻『小林光一』, 138~139頁。
- 329) 劉昊「摘星記」, 『囲碁天地』2008年第3期, 2頁。
- 330) 聶衛平『聶衛平全集』第2集「擂台狂飆」の「1 江鏗久怒涛九連勝」, 『人民網・体育頻道』転載(2015.7.2)。猶, 本稿の連載第3回で引用した^{ネット}電腦網情報の最終閲覧日は, 出稿の2017年1月13日である。
- 331) 内藤由起子『囲碁の人ってどんなヒト? 観戦記者の棋界漫遊記』, 毎日コミュニケーションズ, 2005年, 101頁。
- 332) 沢木耕太郎「帰郷」(日本版『PLAYBOY』1985年4月号), 『沢木耕太郎ノンフィクション II 有名であれ 無名であれ』(文藝春秋, 2002) 436頁(対談の出処は記されていない)。
- 333) 注332文献, 436~437頁。
- 334) 注332文献, 435~437頁。
- 335) 注55文献, 286~287頁。
- 336) 注55文献, 87頁。
- 337) 「第9期 囲碁名人戦 第7局/趙名人, 土壇場で底力/奇跡の四連勝, 大竹下す」, 『朝日新聞』1984年11月16日。
- 338) 注108文献, 15頁(日本語版[注82文献]に於ける当該部分は17~18頁)。
- 339) 注183に同じ。
- 340) 注183に同じ, 179頁。
- 341) 注71文献, 7頁。
- 342) 俞斌「再見! 苦手」, 『囲碁天地』2008年第8期, 26~31頁。
- 343) 高尾紳路『秀行百名局』, 誠文堂新光社, 2009年, 265頁。
- 344) 『現代囲碁大系』第六巻『橋本宇太郎 上』(本人解説, 志智嘉九郎執筆, 1980年), 161頁。

- 345) 橋本宇太郎『現代囲碁大系』第六卷『橋本宇太郎 上』「序」, 1頁。
- 346) 近藤隆史『関西棋院の山系』, 『現代囲碁大系』第十六卷『鯛中新・鈴木越雄・窪内秀知・宮本直毅・本田邦久』, 275~276頁。
- 347) 注15文献, 64頁。
- 348) 川端康成『名人』, 新潮文庫版, 1962年, 79~80/81頁(行を空けた処の上は「二十」の最後まででの大半, 下は「二十一」の冒頭部分)。
- 349) 注25文献, 189~193頁。
- 350) 『文芸読本 川端康成』, 河出書房新社, 1983年, 39頁。
- 351) 福田和也『大作家“ろくでなし”列伝 名作99篇で読む大人の痛みと欲び』, ワニブックス【PLUS】新書, 2009年, 30頁。
- 352) 川端康成の所謂「視姦(癖)」に就いて^{ネット}電脳網上の言説にも散見されるが, 曾て読んだ記憶が有る活字文献での使用を引き続き確認したい。筆者は「眼で犯す」意の此の卑猥語で現代日本文学の「顔」の振る舞いを表す事に抵抗を禁じ得ないが, 『日本国語大辞典』にも無い此の和製漢語の由来には知的な好奇心を抱き, 福田和也が暴いた「大作家“ろくでなし”」の逸話と照らし合せて, 強烈な凝視の形容としての当否を考えてみたい。因みに, 本稿の「痴的な“視姦”」の修飾語も「下品」の所為か同辞書では採録されていないが, 『知的な痴的な教養講座』(開高健の随筆集, 集英社, 1990年)という大作家に由る立派な用例が有る。
- 353) 注350文献, 30頁。
- 354) 「川端康成 受賞前も最終候補/ノーベル文学賞 選考資料公開/1966年に1位“繊細”“神秘的”と賛美」(文化部 待田晋哉), 『読売新聞』2017年1月10日。
- 355) 注354に同じ。
- 356) 注350文献, 120頁。
- 357) 公益財団法人日本生産性本部編著・発行『レジャー白書2016 少子化時代のキッズレジャー』(2016年)に拠ると, 15年の茶道・囲碁人口は230万・250万である(47・48頁)。
- 358) 「他力によつて成就したせみか, 私はむしろ比較的拘泥のない愛着を感じてゐる」という『呉清源棋談・名人』(文藝春秋, 1954)「あとがき」の自己評価は, 文芸評論家川嶋至著『川端康成の世界』(講談社, 69)第6章「現実からの飛翔——『雪国』と『名人』」の最後(242頁)にも引いてある。
- 359) 注25文献, 191頁。
- 360) 川端康成「本因坊名人引退碁観戦記 四十一」, (『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』夕刊, 1938年9月5日), 『川端康成全集第二十五卷』(新潮社, 1999年)107頁。
- 361) 注348文献, 26頁。
- 362) 注348文献, 146頁。
- 363) 李賀「雁門太守行」。訳は黒川洋一編『李賀詩選』(岩波文庫, 1993年)24頁の当該部分を基にし, 一部変えた。
- 364) 李賀「夢天」。注363文献36頁の訳を参照し, 一部変えた。
- 365) 李白「宣州謝朓樓餞別校書叔雲」。訳は蘅塘退士編・目加田誠編注『唐詩三百首1』(平凡社, 1973年)184頁の当該部分を参照し, 一部変えた。
- 366) 李白「將進酒」。注365文献423頁の訳を基とし, 表記を一部変えた。
- 367) 逢先知「古籍新解, 古為今用——記毛沢東読中国文史書」, 龔育之・逢先知・石仲泉『毛沢東的読書生活』(生活・読書・新知三聯書店, 2010年)245頁。

- 368) 川端康成「美しい日本の私」(1968年12月),『川端康成全集第二十八巻』(新潮社,1999年)350頁。
- 369) 高木祥一『秀策極みの一手』,日本棋院,2010年,11~15頁。
- 370) 丁烈八段解説,張大勇構成「乱世沈刀——張栩時代的2004~2006」,『囲碁天地』2007年第1期,68頁。
- 371) 谷口^{なぐちまきお}牧夫「小林光,五連覇“名誉名人”に/第17期名人戦——朝日新聞」,『1993年版・囲碁年鑑』(『棋道』5月号臨時増刊号,日本棋院)57頁。
- 372) 「棋聖戦・挑戦手合七番勝負第7局」解説,『1993年版・囲碁年鑑』64頁。
- 373) 注108文献,15頁(日本語版[注82文献]に於ける当該部分は18頁)。
- 374) 注25文献,321頁。
- 375) 「ウィキペディア フリー百科事典」の「家売るオンナ」の項目の冒頭の概要紹介。
- 376) 注53文献,154~155頁。
- 377) 近藤啓太郎『勝負一代師 囲碁専門棋士の実態』,ぶっくまん,1976年,147~148頁。
- 378) 江崎誠致『石の鼓動』,双葉社,1973年,193頁。
- 379) 「第二期名人決定七番勝負」第10譜(1-172完)観戦記「坂田の名局」(方円子),『読売新聞』1963年10月18日。
- 380) 注232文献,54頁。
- 381) 注55文献,27~28頁。
- 382) 注25文献,36~39頁。
- 383) 注25文献,43頁。
- 384) 『現代囲碁大系』第1巻『明治・大正名棋家集一』(解説=榊原章二・福田正義・中川新之・岩本薫・中村勇太郎,執筆=藤井正義,講談社,1981年),12頁。
- 385) 十三「関於若干稿件」,『囲碁天地』2010年第23期,18頁。
- 386) 『日本囲碁大系』第18巻『秀哉』(解説=榊原章二,執筆=田中道宏,筑摩書房,1977年)第25局第1譜解説の題,217頁。
- 387) 注386文献,37頁。
- 388) 注384文献,13頁。
- 389) 注232文献,136頁。
- 390) 注232文献,136~137頁。
- 391) 注386文献,13頁。
- 392) 小川環樹・金田純一郎訳『完訳 三国志(四)』(岩波文庫,1988年改版)46~49頁参照。
- 393) 蘅塘退士編・目加田誠編注『唐詩三百首3』(平凡社,1975年),70~71頁。
- 394) 小林秀雄「蘇州」(『文藝春秋』1938年6月号),『小林秀雄全作品10 中原中也』(新潮社,2003年)183~184頁。
- 395) 注394文献,184頁。
- 396) 板谷敏彦「日本人のための第一次世界大戦史 第10回 識字率と軍隊」,『週刊エコノミスト』2015年9月1日号,61頁。
- 397) 小林秀雄「蘇州」の冒頭の「蘇州」の語に就いての脚注(新潮社出版部小林秀雄全集編集室),注383文献,176頁。
- 398) 新舟「奥巴马送胡锦涛圍棋深層 原来美国總統真学過」,「新浪体育微博」,2015年10月24日。
- 399) 注55文献,42~43頁。
- 400) 注55文献,60頁。

- 401) 注 55 文献, 61 頁。
402) 『現代囲碁大系』第 18 卷『高川格 上』(本人解説, 村上明執筆, 講談社, 1981 年), 194 頁。
403) 注 55 文献, 335 頁。
404) 注 55 文献, 336 頁。
405) 『現代囲碁大系』第 43 卷『趙治勲』(本人解説, 中山典之, 講談社, 1983 年), 269 頁。
406) 注 179 文献, 2 頁。
407) 『現代囲碁大系』第二十二卷『坂田栄男 上』, 88 頁。
408) 注 407 に同じ。
409) 注 407 文献, 89 頁。
410) 注 407 文献, 90~91 頁。
411) 注 407 文献, 94 頁。
412) 注 410 に同じ。
413) 注 410 に同じ。
414) 注 407 文献, 95 頁。
415) 注 407 文献, 96 頁。
416) 『現代囲碁大系』第五卷『岩本薫』(本人解説, 高橋敬光執筆, 講談社, 1981 年), 193 頁。
417) 注 416 文献, 193 頁。
418) 注 416 文献, 199 頁。
419) 注 416 文献, 197 頁。
430) 注 416 文献, 198 頁。
421) 注 416 文献, 142 頁。
422) 中山典之「孤高のひとり旅」, 注 246 文献 277 頁。
423) 注 123 文献, 252 頁。
424) 注 123 文献, 253~257 頁。
425) 注 123 文献, 256 頁。
426) 注 123 文献, 256~260 頁。
427) 注 123 文献, 260 頁。
428) 注 123 文献, 261 頁。
429) 注 123 文献, 262 頁。
430) 注 123 文献, 263 頁。
431) 注 344 文献, 131 頁。
432) 注 344 文献, 198 頁。
433) 注 416 文献, 192 頁。

夏 剛 (立命館大学国際関係学部教授)

夏 冰 (京都囲碁道場師範)

围棋之“酷”与人智之“魔” ——顶级智力竞技的原理及中、韩、日、人工智能4强的特质、走向(3)

本部分首先以日语及汉语的“酷”之多义为线索，环视围棋之“酷”的严酷、潇洒和深厚，以其对照人智之“魔”的魔法、魔力和魔性。用“活电脑”石田芳夫棋风的冷静、敏锐、精确，比较“阿尔发高”表演的沉稳、机灵、神奇，再联系藤泽秀行高招与昏招同样频出的奇特规律，探讨围棋中尤为微妙的计量元素和人脑内极度复杂的悟性和误区。

接着盘点“胜局、好局、名局”和“妙手、奇手、鬼手”，对应中国古代绘画理论的“能格、妙格、神格、逸格”价值排榜。将中国棋界大量接受“名局”等日源词及萌发“下出名局”意识等变化，解释为通过技术层面及文化层面向繁盛数世纪的围棋王国学习而演进的表现，同时就上世纪末以来形态、本质均有变化的“名局”加以经典意义和当代意义上的再定义。

扫描惊艳夺目型、“上善如水”型等诸多现代“名胜负”，及高手亦难免的类似“校书扫尘”的犯错之必然，引出人工智能所凸现的围棋的变幻无穷和充满风险。回顾争棋显露的江户至明治时代的对抗血脉与大正至昭和时代的好战风气，导入“鹰派、鸽派”和“热战、冷战”等政治、外交概念，审度围棋的多姿多彩及围棋史的丰厚绚烂，揭示作为游艺雅致清澈而作为竞技尖锐相克的两面。

(夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授)

(夏 冰，京都围棋道场教师)

